

Z32-B88

# 金の星

三月号



六十  
三  
号

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM Kodak

# MARUZEN

新 興  
童話の傑作集

## 第一輯 第二輯 家協會 日本童話選集

第一輯 (刊) 初山遊 (繪) 川上四郎 武井武雄 (繪) 村山知義  
第二輯 (刊) 初山遊 (繪) 川上四郎 武井武雄 (繪) 村山知義

第一輯 定價三圓七十五錢  
第二輯 定價三圓七十五錢

小川未明著  
未明童話集

鹿島鳴秋著  
童話集 キヤベツのお家  
小學三四年程度 二圓 送料十八錢

保積稻天著  
兒童劇小 公女  
定價一圓卅錢 送料十二錢

湯原(1)素 茂 鳴 命  
定價一圓五十錢 送料十八錢

武井武雄畫

各一冊一圓卅錢 各料八錢  
No. I No. I

あるき太郎  
百頁 二色版 一、三色版 五九二  
おもちゃ箱  
百頁 三色版 八、凸版 九〇



No. II  
動物の村

百頁 口繪 三色版

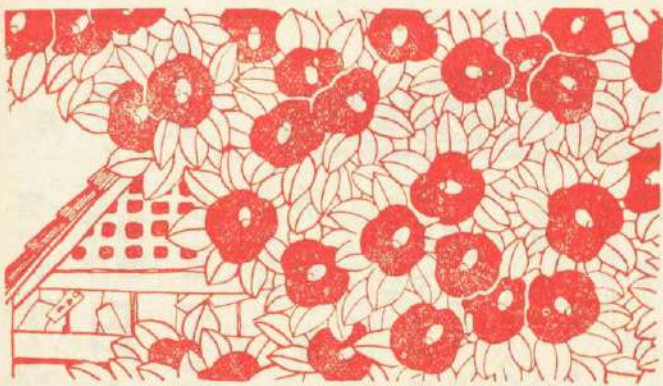


(通橋本日京東)

丸善株式會社

札幌 仙台 福横 東京 神戶 大阪 名古屋

ルピ丸・田三・田神—京東



目次

みんなおはひり(表紙・石版)……………岡本歸一  
 春の來る日に(口繪・三色版)……………寺内萬治郎  
 天神さまはお手習ひ(童話)……………野口雨情  
 同作曲……………(ニ)本居長世  
 秘密の路(童話)……………(六)小島政二郎  
 太吉と白猿(童話)……………(一〇)立石美和  
 男と女十二組……………(三)寺田良作  
 世界一周物語(繪ばなし)……………(一四)久米元一  
 仇討……………(三)大木雄三  
 三つ寶(童話)……………(一〇)内藤辰雄  
 舜天丸王子(童話)……………(五)三島霜川  
 てるてる坊主の話(童話)……………(六)武野藤介  
 丸太より大汽船まで……………(五)柳田謙吉  
 川べりの春(童話)……………(六)達崎龍



別れの馬子唄(童話)……………(六)西川喜平  
 白鳥姫物語(童話)……………(七)高橋里江  
 まつりの箱(推薦童話)……………(五)野口雨情選  
 大空高く(童話)……………(八)權藤はな代  
 不思議な瓢箪(童話)……………(七)原田謙次  
 前齒を賣る少女(童話)……………(三)大戸喜一郎  
 笑ひがもと(童話)……………(一三)田中宇一郎  
 大佛運(童話)……………(一〇)小山勝清  
 雲雀(童話)……………(三)三木露風  
 星とくれと(童心句)……………(一)野口雨情選  
 いとぐるま(大人篇)……………(一〇)野口雨情選  
 雲(子供篇)……………(一四)野口雨情選  
 世界童話欄……………(三三)

初音の鼓(日本)……………(三三)生命の水(ロシア)  
 鍋かぶり(日本)……………(三三)謎を解く王子(長篇)

に日る來の春



畫郎治萬内寺

（書版出社星の金）



# 親孝行な

## 少年少女の話

大戸喜一郎先生著 定價金壹圓廿錢

岩岡とも枝先生畫 送料十錢

親孝行をする事は日本人なら誰でも知つてゐます。しかし、本當の親孝行はなかなか出来なものです。まして、貧乏な家に生れて、その日その日の食物にも困つてゐるやうな家に生れた少年少女でありながら、自分で親を養つて、立派な人になつた人達の話は、是非皆さんがお讀みにならなければなりません。この「親孝行な少年少女の話」といふ本は、さういふ立派な行をした少年少女のお話ばかりを集めた本です。日本ばかりでなく、支那や西洋のお話も澤山に入つてゐます。しかも、誰でも知つてゐるやうな有名な人の親孝行のお話でなく、餘り世間に知られてゐないで、さうして本當に涙の出るやうな尊い行をした少年少女のお話ばかりです。近くは學校や郡で表彰され、その土地の模範として表彰されたお話もあり、何れも皆さんに親しみの深いお話ばかりです。著者の大戸先生は長い間非常な苦心をなさつて此の名著をお書きになりました。實地にその場所へ行つて調べたり、それは、非常な苦心の結果出来上つた本ですから、お父様もお母様も、此の本は皆様のために喜んで買つて下さるに違ひありません。

小學兒童獎學用品と眞理に理想

29版  
なためるに  
繪手本

16版	16版	21版
日本神話 下上	日本傳説 下上	日本童話 下上

21版  
標準  
學習字典

東京高等師範教授 阿部七五三吉先生共著  
尋常五・六學年・高等科賞品用  
風景の巻・器物の巻・花の巻・東洋の巻  
四冊・各廿五錢・厚紙・石版・構圖説  
各冊金廿五錢・郵費六錢・特別美術紙  
費用紙付 定價金壹圓八拾錢 郵費拾錢

東京高等師範教授 阿部七五三吉先生共著  
尋常五・六學年・高等科賞品用  
風景の巻・器物の巻・花の巻・東洋の巻  
四冊・各廿五錢・厚紙・石版・構圖説  
各冊金廿五錢・郵費六錢・特別美術紙  
費用紙付 定價金壹圓八拾錢 郵費拾錢

東京高等師範教授 日下部重太郎先生著  
尋常五・六年・高等科・補習科  
賞品用として適に絶好  
内容見本御申越次第送呈  
四六判九百頁 印刷鮮明 製本堅牢  
定價金壹圓 郵費拾錢

七六一三三東京振  
匹七七三 神話電

館風培

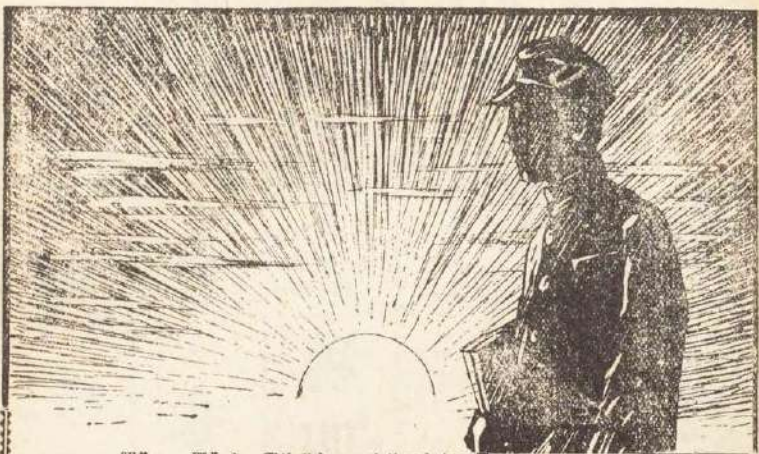
區田神市京東  
目丁一町錦



金の星社編・寺田良作先生装幀  
繪入  
**アラビヤン・ナイト**

菊判箱入美本 定價金貳圓五十錢  
内容二六〇頁 送料十二錢

此の「アラビヤン・ナイト」は何といふ立派な美しい本でせう。書棚に飾つて置いただけでも楽しみます。まして一つ一つと此の中のお話を読んで行つたら、どんなに愉快でせう。中のお話は「アラビヤン・ナイト」の中でも一番面白くて有名な「アリババと四十人の泥棒」「魔法の馬」「漁師と悪魔」「ひげの長さが三千尺」「シンドバットの航海」などを集めてありますから、幾度讀んでも讀みあきません。又、挿畫は世界でも有名な畫で、それをそのまゝ版にして澤山に入れていますから、畫とお話と両方でもこんなに良い本はありません。しかも定價が驚く程安いのですから、是非一度書店でござらん下さい。



創立廿六週年  
五十回新學期 **會員大募集!!**

満天下の  
青少年諸君に檄す

●講義録見本つき規則  
ハガキで申込み次第無代進呈す。

新しい陽が上る  
君よ新しい希望に燃えて  
大日本國民中學會へ入會せすや  
一年の計は元旦にあり  
君の一生の幸不幸が今定まるのである。  
學問の大切なことは君も亦よく知つてゐるであらう  
さうして獨學でも立派に成功出来ることや  
獨學者の爲には大日本國民中學會の中學講義録が  
一番理想的であることも亦よく君は知つてゐる筈だ。  
昭和三年の新春だ。特に君の決心を促す。

日本第一の立身成功の基礎を  
中學講義録でつくれ!!

入會者  
目下  
五大特典  
提供

東京 駿河臺 大日本國民中學會

((書版出社星の金))

### 書叢語物傳實史歷本日

齋生先山古鳥羽・著生先川霜島三  
◇錢十料送◇圓壹金冊一各價定◇

6 維新 哀史 彰義隊と白虎隊	5 信玄と謙信(川中島戰)	4 小楠公	3 赤穂四十七士	2 曾我兄弟	1 源義經
徳川幕府が倒れ王政復古となった明治維新の物語の中で、有名な彰義隊と、白虎隊の物語を面白く書いたのが本書です。少年諸君はこの本によってどんなに深い喜びを見出されるでしょうか。	信玄と謙信の幼い頃のお話からはじまって、この二人の偉い大將が川中島で大合戦をする有様までくわしく書いてあります。一々史蹟をさぐって書いてあるこんな面白い本は外にありません。	備正行のお話で本になつてゐるものが少い中に、この本だけは勇壯な正行の一生を傳へてゐる得難い著述です。父正成の死後、正行はどんなに勇壯な一生を送つたか本書を御覽下さい。	三島先生が最もお得意の研究だけに、でたらめな譚話などさ逸ひ、眞に追つてゐます。大石蔵之助をはじめ四十七士が、血の涙を流して主君の仇を討つたその當時の有様が手に取るやうに分ります。	あはれにして勇ましい曾我兄弟の物語は、日本の物語として永く傳へられるべきお話です。三島先生の苦心の結晶になつたこの「曾我兄弟」はこの物語と共に永遠に傳へられるべき名著です。	源義經のお話は誰が讀んでもたまらなく面白いお話です。この本は、でたらめの義經の物語とは違つて、歴史によつて義經の生ひ立ちから最後までを書いたものでありますから眞に立派な本です。

((書版出社星の金))



### 八幡太郎義家

三島霜川先生著  
羽鳥古山先生畫

四六判箱入美本  
内容二〇〇頁  
挿畫十五葉  
定價金壹圓  
送料十錢

日本歴史實傳物語叢書(9)

▽八幡太郎義家のお話を書いた本は、ほとんどありません。今度のはじめて三島霜川先生が皆さんの爲めに書いて下さいました。ですから大評判です。各書店から大層な注文を受けてをります。

▽武人の守神とまで崇められてゐる義家の一生は、此の本を讀めばすつかりわかります。戦争のお話が澤山にあつて、面白い事限りなく、そして又、深い教訓を受けるやうなお話ばかりです。

▽歴史に有名な、前九年、後三年の大戦争のお話は、くわしく此の本に出てゐます。これだけ讀んでも此の本の立派な價値があります。

▽例によつて、三島先生の苦心の名著であつて、羽鳥先生の挿畫と共に、皆さんの御愛讀を待つてゐます。

日本歴史實傳  
物語叢書 (8) 南朝  
新田義貞 (新刊)

南朝のために奮戦した新田義貞の一生を知りたい方は此の本をお読み下さい。

世界の有名作を三種づつ一冊に收め、目もさめるばかり美しい本です。定價の安いにもびつくりされてゐます。皆さんが待ち兼ねて買ふのもその譯です。

金の星家庭文庫 (1)

ロビンソン漂流記  
アラビヤン・ナイト  
ガリバー旅行記  
定價金貳圓  
送料十二錢

金の星家庭文庫 (2)

アンデルセン童話  
青い鳥  
イツツブ物語  
定價金貳圓  
送料十二錢

金の星家庭文庫 (3)

西遊記  
ドン・キホーテ  
グロム童話  
定價金貳圓  
送料十二錢

金の星家庭文庫 (4)

母を尋ねて三千里  
小公女  
奴隷物語  
定價金貳圓  
送料十二錢

金の星家庭文庫 (5)

竹取物語  
古事記  
平家物語  
定價金貳圓  
送料十二錢

著者が數年間の苦心の結晶である此の一大名著が遂に出版されます。東西の天才を網羅すること十八人。しかも、これだけ深い感動を與へる本も少いでせう。

少年天才物語

立石美和先生著・富田千秋先生装幀

四六判箱入美本・定價壹圓八十錢  
内容三五〇頁・送料十錢

本書こそ不朽の名著であると信じます。日本全国の各小學校は本書一冊を備へて教材として使用される必要があります。挿畫は『金の星』でおなじみの川上四郎先生です。

(著者より) 皆さん! どうかこの本を愛して下さい! この本の中に出て来る十八人の人達は、皆さんの最も優れた先輩です。どうか、この人達に親しんで下さい!皆さんの一番仲のいいお友達にして下さい。この人達の、小さい時から歩いて行つた道——いづつかの困難な、物悲しい哀愁の物語は、きっと、皆さんの清らかな涙をそそがずにはゐないでせう。けれど、けれど、落胆をしてはいけません。決して悲しんではいけません。御覽なさい! この小さなお友達、二生けんめいな努力の前に、打ちくだかれたかたど何んな困難があつたでせう。どんな不幸があつたでせう。悲しくなつた時、つまらなくなつた時、すぐこのお友達のことを思ひ出して下さい。(以下略)



# 著名刊新の行發社蘭金

書叢語物士志王動 維新 幕末

第三編 川名芳郎編  
池上浩裝幀  
**黒船の襲來**  
(ペリー來朝と生麥事件)

第九編 加治亮介編  
池上浩裝幀  
**尊王攘夷**

四六判箱入美本  
本文約二百頁  
原色版二枚  
凸版刷摺繪豐富  
定價各金一圓  
送料十二錢

世界名篇物語叢書第十六編  
小島政二郎編 池上浩裝幀  
ナポレオンを捕へろ  
(附録 ナポレオンを救ひに)

四六判箱入美本  
本文百八十頁  
原色版凸版豐富  
定價金九十錢  
送料十二錢

少年少女科學大系第八編  
松平道夫著 池上浩裝幀  
**兒童鑛物學**

四六判箱入美本  
ドイツ式裝幀  
本文百九十頁  
定價金一圓  
送料十二錢

世界童話叢書第十一編  
豊島次郎編 高坂元三裝幀  
**スペイン童話集**

四六判箱入美本  
本文三〇〇頁  
原色版凸版豐富  
定價金一圓半錢  
送料十二錢

三百年といふ長い太平の夢を食つてゐた徳川幕府も、嘉永六年に米國の水師提督ペリーが四隻の軍艦を率ゐて浦賀の港に現はれた時、その驚きやうはどんなでせう？ さうでなくてさへ、やうやくその處のあやうくなつて來た幕府の屋敷は、それをきつかけに一層怪しくなつて來ました。折も折、京都を中心として起つた尊王派の人々は、時こそ至れりと、幕主攘夷の大旗を押し立て、その勢は日一日と盛んになつて行きました。かうして明治維新の大業へと一歩は一步と近づいて行つたのです。(本書内、容身本御入用の方は御一報下さいませ)(次刊—新選組)

一代の英雄ナポレオンも敗軍の將となつては眞にまい、なものです。ナポレオンを捕へろと獨逸軍の精銳の中から特に探られた九人の騎士の爲に、あはれ袋の鼠とならうとした時、膝下の身代りに立つたジェニール大佐の活躍こそ誠に目撃しいものでした。(次刊—前世界物語)

日常生活に必要欠く事のできない金・銀・銅・鐵を始めとして金剛石、紅玉等の寶石類に至るまで、その形や性質は無論の事、どうして地中から掘り出されどうして實用化されるか、例によつて興味深く記した本書こそ、必ずや多大の御満足を與へる事と信じます。(次刊—兒童電氣學)

ドンキホーテを讀んでもお分りになるやうに、スペインの童話には軽い滑稽の内にも昔ながらの騎士道的仁侠と正義に對する、然ゆるやうな熱情とが到る所に現はれてゐます。そして又此の國の童話位明るい気持ちで、讀む事のできるものは他にないでせう。(次刊—日本童話集)

# 金の星の月三



母を尋ねて三千里の  
さすらひの少年マルコ

(通巻第百號)

東 京 市 外 東 振 社 蘭 金 京 東 振 東 東 東 東  
八 二 込 駒 上 鴨 巢  
番一〇七六一六京東替振  
番五六五六川石小話電

天神さまはお手習ひ

作詞 野口雨情

作曲 本居長世

Andante

かみもなければ ふでもなければ すなにかくじは

ちうといふじと すなにかくじは きみといふじと

ちうとさみとを すなにかきかき つくしのくーにの

すなはらで てんじんさーきは ちてならじ

昭和三年一月二十三日



天神さまは

お手習ひ

野口雨情

紙もなければ  
筆もなければ。

砂に書く字は

「忠」といふ字と

砂に書く字は

「君」といふ字と

「忠」と「君」とを  
砂に書き書き

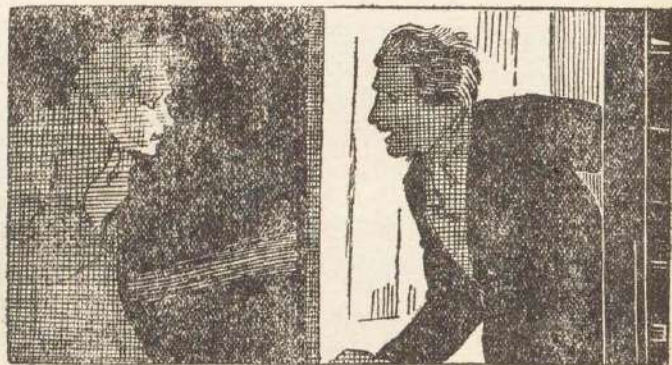
筑紫の國の  
砂原で。

天神さまは

お手習ひ

(自註) 天神さまは菅原道實公のこと  
であります。忠無二のお方で、文學  
の神とされてをります。前説に引續き  
天神さまの語を書いたのは、昔さま方  
に「天神祭」を復興させて、敬神の心を  
養つて戴きたい希望からであります。

岡本歸一畫



へ飛び降りて、また戸口のところへ歸つて来た。さうしてドアを明けずにドアの向ふから、

「一たい君は何だね。」と尋ねた。さう云ふ彼の聲は、何か興奮に顔へてゐるやうに僕には思はれた。

「僕は旅人です。路に迷つてしまつて……。」

が、彼は返事をせずに、どうしたらいいか考へてゐる様子だつたが、

「こゝは君を泊めるやうな場所ぢやない。」

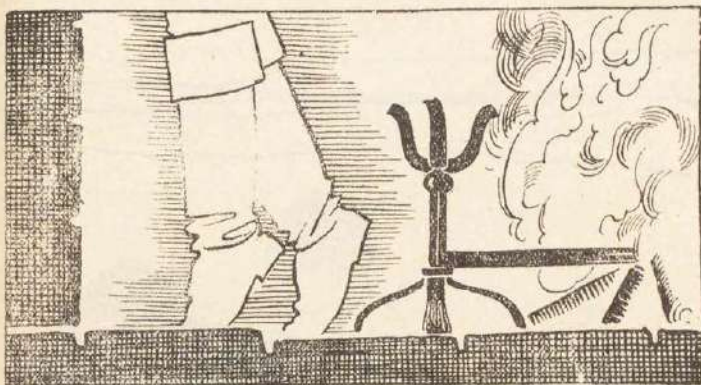
「でも、僕はもう疲れ切つてゐます。唯雨露を被らせて下さるだけで結構です。僕はこの邊の、路の悪いところを一時間の上もほつつき歩いてしまつたのです。」

「その間に君は誰にも逢はなかつたか。」

「え、誰にも逢ひませんでした。」

「ぢやあ兎に角、五六歩この戸口から離れてくれ給へ。何を云ふにも、こゝは寂しい場所だ。その上、今は物騒な時代だから、注意の上にも注意が肝心だからね。」

云はれるまゝに僕は五六歩あとへ下つた。すると、彼はそつと、ドアを細目に明けて頭だけを突き出した。さうして何も云はずに、じろくくと僕の様子を窺ふのだつた。



さて、この小屋が修繕の様がないくらゐまで荒廢してゐることは前にも云つた。で、板と板の接目や裂け目が澤山ある。その中でも扉の蝶番のところ添つて、ずつと縦に裂けてゐる裂け目が一番大きい。そこから中を覗くと部屋突き當りに爐があつて、火が燃えてゐるのが見えた。僕はそこからちつと中を覗いてゐた。すると、いきなり僕を突き飛ばして小屋の中へ姿を隠した例の男が、爐の前へ姿を現した。見てゐると、両手でしきりにチョッキのポケットを探してゐる。と、いきなり體を彈ませたかと思ふと、煙突の中へ身を隠した。だから、僕のところからは、爐の前の煉瓦を一つ二つ重ねた上へ載つてゐる彼の靴と、服腰とが見えるだけだつた。が、一瞬間と經たないうちに、彼はヒラリと床

ナボレオ  
ン奇譚

秘密の路

小島政二郎

岡本歸一畫



「君の名は何と云ふのかね。」やつと彼が口を開いた。  
「ルイ・ラヴァルと云ひます。」僕はわざと「ド」と云ふ貴族の稱號を取つて云つた。その方が、無事だと考へたからである。  
「どこへ行かうと云ふのかね。」  
「兎に角、今夜泊まれるところへ行かうとしてゐたのです。」  
「君は英吉利から来たのかね。」  
「いえ、海岸から来たのです。」  
聞きながら、彼は僕の答へが腑に落ち兼ねると云ふやうに靜かに頭を振つて見せた。さうして云つた。  
「君をこゝへ入れて上げることは出来ないよ。」  
「しかし、あなたは……。」  
「いや、いや、何と云つてもそりや出来ないよ。」  
「おやあ、路を教へて下さい。」  
「そりやお易い御用だ。こつちの方角に二三百歩行けば、君は村の灯を目にすることが出来るだらう。」  
かう云ひながら彼は、僕に路を指し示すために一二歩戸口から出て来た。さうしてそれが済むと、すぐクルリとらしろを向いてしまつた。その時僕は既に一足二足大膽に教へられた方角へ歩き出してゐた。すると



突然、  
「ちよいと、ラヴァル君。」と呼び留める聲が聞えた。不思議なことに、聲の響が以前のそれとは全く違つてゐた。  
「考へて見ると、僕はこんな風模様の晩に、そのまゝ君を出してやるに忍びない。まあ、はひつて爐で暖まつて、ブランドーの一杯も飲んでから行き給へ。さうしたら元氣も出て、路も拂が行くだらう。」  
諸君、僕がこの場合彼の申出を受け入れずにおられるとは思ふまい。が、なぜ急に彼がこんな變つた態度を執るやうになつたかと云ふことにまでは僕は考へ及ばなかつたのだ。唯喜んで、  
「御親切有り難う。」と、彼のあとに従つて小屋の中へはひつて行つた。

## 四

すると、彼は僕の泥にまみれた濡れそびれた風體を見て頻に勢はりながら、箱を引き寄せてパンとハムを切つて御馳走してくれた。さうして「ラヴァル君、初め僕が冷淡だつたことは許してくれ給へ。實は僕は貿易商なんだが、ナポレオン皇帝が貿易を禁じられて以來、僕等の商賣は表向き外國と取り引きすることが出来なくなつたので、かうして夜こつそりと、取り引きをしなければならなくなつたのです。それと知つて



10  
政府でも探偵を放つて僕等を警戒してゐる。ね、ラヴァル君、これで最初僕が君によそ／＼しくした心持も分つて貰へるでせう。第一、君の服装と顔容が僕に用心をさせたのですよ。實際、君はこんな場所にこんな時間に現れるべき人物ぢやありませんからね。」  
彼はこんな言譯見たいなことを云つた。僕は、彼がまだ幾分僕を疑つてゐるなと思つたので、

「いゝえ、僕は本當に路に迷つた旅人ですから、御安心なさい。お蔭で元氣も取り戻しましたし、十分休ませて貰ひましたし、もうこの上御親切に甘えるのも何ですから、失禮したいと思ひます。唯一番近い村へ行く路だけ教へて下さい。」

すると、どうしたのか彼は、

「いや、今夜はこゝへ泊まられたが、見給へ、刻々に天氣が悪くなつて來てゐる。」

彼がさう云つた時、一陣の風が煙突へ吹き込んで激しい唸り聲を上げた。まるで、このおんぼろ小屋が頭の上へ押し潰れて來るのかと思はれるくらゐ、それは激しいものだつた。彼は床を横切つて窓のところへ歩いて行つたと思ふと、ちつと外を覗いて見た。と、やがてこつちを振り返りながら、



「實はラヴァル君、こゝに三十分間ほど留守居をしてゐてくれると、大變助かるのだが……。」

さう云はれて、僕は疑ひながらも好奇心に驅られて、

「どうしてですか？」

と聞かすにはゐられなかつた。

「君にはすべて打ち明けてお話しした方がいゝ。實は僕はこゝで、さつきから或人達の來るのを待つてゐるのです。その譯は、さつき僕の話でほど推察の附いたことと思ひますが……。ところが、どうしたのか、その人達がまだ來ない。君の話聞いて、その人達も路に迷つてゐるのぢやないかと思ふので、これからちよいと途中まで迎へに行つて見ようと考へたのです。と云つて、留守番なしで僕が出懸けて行つて、その間にその人達にこゝへ來られて、僕が歸つてしまつたのだと思ひ間違へられて、今夜逢へないと商賣の上で僕は大損をしなければならぬ。そんな次第ですが、どうでせう。三十分ほど留守番をしてゐてくれませんか。」  
さう云はれて見れば尤もだ。それに、彼の話を聞いてゐるうちに、僕はさつきなぜ彼が煙突の中へ姿を隠したのか、その秘密が探つて見たくつて堪らなくなつて來た。で、しかし表面は厭だけれど仕方なくと云つた調子で、承諾の旨を答へた。すると、彼は、



「それでは……。」  
と、急いで帽子を被ると、ドアの方へ走つて行つた。ドアが彼のうしろで締まつたと思ふと、暫くバシヤ／＼と云ふ靴音が聞えてゐたが、それも間もなく風の音に消えてしまつた。

さあ、この不思議の小屋の秘密を探るのは今だ。僕は最初に机の上に置いてある本を取り上げて見た。表紙を一枚めくると、そこに「ルシアン・ルサージ」と書かれてゐた。ははあ、これがあの不思議な人物の名だな。

次に僕は煙突の中へ體を突ッ込んで見た。煙突は古風に出来てゐて大きいので、體を奥の方へピッタリくっつけてゐると、熱くも煙くもなかつた。下からの焔の光で、僕の探さうとしてゐるものはすぐ見出された。奥の方の側に、一ヶ所石が落ちたのか、或はどけたのか、兎に角凹んだところがあつた。そこに、小さな包みが載つてゐた。僕は早速それを手に取つて、煙突の中に立つたまゝ、下からの光に照らして見てみた。

それは、白い紐でグル／＼巻きに縛つた、艶のある、黄い布の四角な小さな包みだつた。解くと、バラ／＼と手紙が出て來た。外に、小さく疊んだ大きな一枚の紙があつた。手紙の宛名を見ると、タレイランを始め、フーシェ、ストルト、當時有名な人達ばかりだつた。さつきの説明に



従ふと、その手紙の隠し主は貿易商——と云ふよりも、もつと悪い密輸入商である筈だ。政府の目を忍んで商賣をしてゐる人間が、どうして總理大臣や陸軍大臣や外務大臣や、ナポレオン帝國の柱石たるこれ等の高官に、手紙を出す資格があるのだらう。この不思議な謎を解くものは小さく疊まれてあるもう一つの方の紙に違ひない。さう思つた私は、幾つかの手紙を例の凹みへ置くと、もう一つの方の紙を擴げて見た。

お喜び下さい。ナポレオン帝國をぶつつぶすのもさう遠い將來のことではありません。

こゝまで讀んで來た時、僕は餘りの驚きに手から紙の落ちるものも知らなかつた。ふと氣が附いてみると、僕の兩方の蹠の上を、ギョツと鐵の輪のやうなものが締め附けてゐた。下を見ると、爐の火の光で二本の手が見えた。ギョツとしながらも、僕はその手に眞黒な毛が一杯に生えてゐるのを見逃さなかつた。第一に、その手は非常な大きなものであつた。

「あゝ、留守番。」と、雷のやうな聲が叫んだ。「お氣の毒だが大勢で歸つて來たぞ。」

# 太吉と白猿

立石 美和  
岩岡とも枝畫



あんまりひどい貧乏なので、太吉の事を、村の人達は、貧乏太吉といひました。  
太吉の貧乏は、それ程有名でしたが、この人はまた、たいへん正直で、その上評判の孝行者だったので、人達が「貧乏太吉」といへば、外の人達が、「はあ、あの孝行太吉か」とも、「正直太吉か」とも云つて、すぐ分る位有名でした。  
ある秋の末、太吉のお母さんが、はつだけのあつゆが喰べたいと云ひ出しました。

で、孝行な太吉は、さつそく山へ、はつ茸取りに出かけました。たくさん取つて、お母さんに、うんと喰べさせようと思つたのでせう。太吉はだん／＼と、深い山の奥へ入つて行きました。

だか、どうしたものか、仲々いゝはつだけが見つかりません。

おひ／＼徑も細くなつて、もうどのくらゐ来たのか、どう来たのか、方角もわからないくらゐ歩きました。うす暗い大木のしげみから、ひよいと空をすかして見ますと、いつの間にか天気が悪くなつたと見えて、空は眞黒く、氣味の悪い風が雲を動かしてゐます。

『はあ、これは困つた事になつた!』  
さう思つて居る間に、ざあツ! と、ひどい音をたて、雨が降つて來ました。木のしげみから、ポタ／＼と落ちて來る雨しづくの爲に、たちまち太吉はぬれ鼠になつてしまひました。

方角を失つた、こんな深い山の奥では、どうする事も出来ません。ちよつとでも、雨休みの出来さうな所を見つけようと思つて、太吉は足にまかせて、歩き續けました。

すると、どうでせう!  
太吉はいつの間にか、峻しい山あひの、谷の様になつた所へ來て居るのでした。

『仕方がない、この谷を下つて行けば、どこか平地へ出られるかも知れない』  
さう思つて、その谷間を歩いて居る間にも、にわか雨は、さんざ／＼と音をたて、降つて居る。大變! たちまち、谷に水が出て、瀧の様な勢ひで流れはじめました。

『あゝあ、大變な事になつた!』  
云つて見ても、もうどうする事も出来ません。雨方は峻しい山。水に抗つて登つて行く事が出来なければ、出来るだけ早く、谷を下るより外仕方があり



ません。

しかし、むかうの山あひからも、こちらの山あひからも、次第に水が流れ寄つて来て、勢ひが強くなるばかりです。

「あッ！」

いふ間に、太吉は足をすくはれてしまひました。そして、それからは、もう二度と立ち上る事が出来なくて、強い水の勢ひに押され／＼と、だん／＼水量を増して、だん／＼深く廣くなつて行く、下の方へ流されて行きました。

谷川が、いつの間にか、山あひの大きな流れ川になつて居ました。そして、矢の様な早さで、何里も何里も太吉を押し流して行きました。

何度も水をのんで、方々身体を打ちつけて、いまにも死にさうに苦しみ乍ら、太吉は村へ残して来た親達の事や、子供達の事を心配して、一生けんめいに、もがいて居ました。



急に、川幅が廣くなつて来ました。

ふと向ふを見ると、川が大きく、くの字に曲つて居ます。そしてその曲り角には、大きな／＼岩が、岬の様に突き出て居て、そこからは、急に激しい瀧つ瀬になると見えて、水が渦を巻いて、白い水煙を立て、居ます。

「もう駄目だ！」

さう思つて、太吉は眼をつぶりました。

が、その時、太吉はひよいと、不思議なものを見たのでした。

それは、そのつき出した大きな岩のとつさきに、人間でも、犬でも、狐でもない、真白い不思議なものが、石で彫りつけたやうに、ちいつと、身動きもせずに、坐つて居るのでした。

「オヤ！ なんだらう？」

太吉は心の中でさう思ひました。けれど、さう思つて、も一度眼を開けて見る間もなく、スウツツと

激しい渦に巻き込まれて、そのまゝ、なんにも判らなくなつてしまひました。

太吉は、もう自分が死んでしまつたのだと思ひました。さう考へながら、氣がついて、あたりを見廻すと、どうでせう。自分は、さつき、巻き込まれたうづ巻のすぐ上の、岩の上で、真白なものに抱かれて居るのでした。

真白なもの！

それは一體なんでせう？

猿です。千年も、千五百年も、この山奥で生きて居た猿だつたのです。そして、猿といふものは、千年以上も長生きすると、白猿と云つて、真白な毛になつてしまふのださうです。

この白猿は、いつもかうして、この岩角に坐つて居るのですが、すぐ眼の下へ、太吉が流されて来た時、ひよいと手をのばして、そして、太吉を救ひあげて呉れたのでした。

「ありがたう！ ありがたう！」

太吉は、手を合せて、白猿に御禮を云ひました。すると、白猿は、さみしさうに、笑ひながら首を振つて、云ひました。

「いゝえ、實を云ふと、私は貴方を殺してしまひたかつたのです。まだほんとうに、助ける氣にはなりません」

「どうしてです！ そんな恐ろしい事を云はないで後生ですから、助けて下さう」

「え、助けてあげたいのです。貴方は評判の高い親孝行で、正直な方ですから、助けてあげたいと思つたのです。けれど、若し助けて上げたら、貴方はさつと國へ歸つて、この事をみんなに話すでせうね。そしたら人間達は、私の真白い皮を欲しがつて、きつと私を殺しにやつて來ます」

「とんでもない！ あなたは私の命の親です。自分の生命を救つてもらつて、その人を殺していいもの

で、喰べさせて呉れるのです。

六日目の朝。

太吉を背中から下すと、白猿は悲しさうに云ひました。

「さあ、もつ此處でも別れです！ これから先は、人眼にかゝり易いので、私がお供する事は出来ません。もうすぐ人里へ出ますから、眞直この道を歩いていらつしやい！」

「ありがたう！」

「あの事は、きつと御願ひしましたよ！」

「死んでも云ひませぬ！」

「お大事に！」

いざ分れるとなると、白猿も太吉も、お互ひに、兄弟が親子のやうに、親しい氣がして來て、悲しくて、悲しくて、堪らなくなりました。太吉も泣くし白猿も、振り返り、振り返りして、眼をこすつて居ましたが、思ひ切つたやうにぢぎぎをして、姿をか

でせうか！」

「ほんとうですか？ ほんとうに、私に會つた事を誰にも話さずに居てくれますか？」

「云ひませぬ！ 生命にかけてお約束します！」

「きつとですね！」

「きつとです！」

「よろしい！ さあいらつしやう！」

白猿は、さう云つたかと思ふと、疲れてへと／＼になつて居る太吉を、軽々とおぶつて、輕業師の様に、身輕に岩を飛び越え、川にそつて、川下の方へ走り出しました。

それからといふもの、まる五日の間、ひるの間は二人は、大きな樹の上の、誰にも見えない茂みの間にかくれて休んでは、夜になると、白猿が太吉を負ぶつて、川下へ川下へと、歩きました。

太吉が、うと／＼と、疲れて寝て居る間に、いつも白猿が、何處からか、木の實や、果物を取つて來

くしてしまひました。

里へ出て、いろ／＼訪ねて見ますと、其處は、太吉の村とは、百里も離れた所でした。

で、訪ね／＼、太吉が自分の村へ歸つたのは、丁度一月目だつたと云ひます。

いつの間にやら、もう二十年経つてしまひました。

猿のお蔭で、太吉はまた親孝行をする事も出来たし、可愛い子供達と、一緒に暮らす事も出来ました。

太吉は約束を守つて、親にも子にも、猿の事は一ことも話しませんでした。

二十年経つて、両親も死ぬし、子供達も大きくなつて、自分も、もう大分年よりになりましたが、やつぱり貧乏で、昔の通りに「貧乏太吉、貧乏太吉」と、村の人達に云はれました。

ある時、突然お殿様から布令が出て、それには、「今度殿様が、都へ御上りになるに就ては、是非と

も、白猿の皮でこしらへた刀の鞘袋が入用である。皮を献上するか、白猿の居所を教へたものには、澤山のごほうびをやるし、家來に取り立て、大事にする」

と書いてありました。

それを見て、太吉は、昨日の事の様に、二十年前の出来事と、その時の固い約束を思ひ出しました。考へて見れば、太吉は正直な爲に、ずの分いろいろ損をして来ました。生れてこの方、ずの分永い間貧乏をしつゝけて、ほと／＼貧乏ぐらしにも飽きてしまひました。

これからさき、いつまでも、こんな貧乏がつづくのかと思ふと、子供もかわいさうだし、つく／＼情なくなりました。

白猿の居所は、自分が確かに知つて居る。ちよつと教へさへすれば、自分が侍になる事が出来て、子供達もどんなにか任せになるかも知れない！

「けれど、あんなに固く約束したのだから」

太吉はためいきをつきながら、獨り言を云ひました。

「いや／＼、猿の事だから、もう私の事は忘れて居るかも知れない！」

毎日々々、太吉はこの事を考へて、獨りでくるしみました。

「決心した！ たつた一度だ！ 一生の中でたつた一度位、うそをついてもいいだらう。それで、みんなが任せになるのだから！」

とう／＼太吉は、そんな風に思ひついて、その事を殿様へ申出しました。

殿様は非常にお歡びになりました。

すぐに白猿狩の人数を集めて、鐵砲組だの、槍組だの、いろ／＼に手分をして、太吉を先に立て、百人ばかりの大勢で、繰り出す事になりました。

百里離れた人里へ、それから、二十年前の事を思

ひ出しながら、太吉は、あの川を、昔とは逆に山の方へさかのぼつて行きました。

「あつ！」

太吉は急に、向ふを指して、恐ろしさうに叫びました。

見ると、其處は、二十年前に、太吉がたすけられた、あの川の曲り角の岩でした。二十年前と寸分異はない岩の先へ、二十年前と、寸分異はない容子を、して、あの白猿がぢいつと坐つて居ます。

渦を巻いて居た淵は、今日は靜かに、紫色に澄んで、岩と白猿の影をすつかりそのまゝ、鏡のやうに映してゐます。

「それッ！」

うしろ向きになつて、氣がつかないらしいのを幸ひに、狩人達は、足音を忍ばして、近づきながら、ぐるりと、まわりを取り巻いてしまひました。

太吉は、人達の後にかくれて小さくなつてゐまし



# 組二十女と男



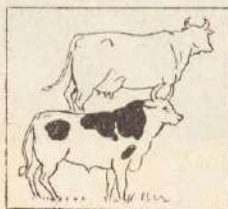
娘と若者



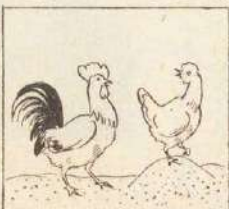
主母のそと食む女



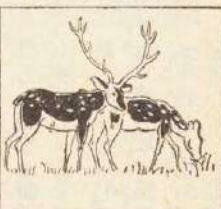
翁と人姫貴



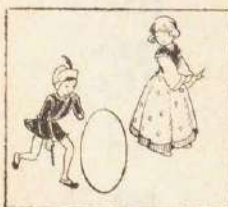
しうをとしうめ



りどんをとりどんめ



かじととかじめ



娘少と年少



王女と様王



妹と兄



んさ坊とんさ尼



んさ母おとんさ父お



女魔と師術魔

たが、それでも、どうなる事かと思つて、ついでに行きました。

十間ばかりの、近間に進んで行つた時です。先登の槍組は、さを拂ふし、矢組は弓を張るし、鐵砲組も、火玉をこめました。

その時、白猿がふいと後ろを振りかへりました。「それッ！」も一度隊長が叫びました。

みんな、ハツとして身構へをしました。しかし、白猿は、意外にも落ちつき返つて、ニコニコ笑ひ乍ら、

「一寸まつて下さい！ 貴方方の御用は知つて居ます。たゞ一人、ちよつと會ひたい人がありますから……」

さう云つて、太吉の方をちいつと見ました。太吉は、耻かしさで、眞赤になつて、ガタ／＼震えながら、小さくなつてうつむいてゐました。

「太吉さん！ 太吉さん！」

白猿はやさしい聲で呼びました。

「太吉さん！ あなたは、一生の中、たつた一度しか嘘をつきませんでした。正直な人です。けれど、たつた一度、一番大きな嘘をつきましたね」

太吉は返事が出来ませんでした。

「ちがひますか!!」

太吉の頭の上で、雷の様な大聲がひびきました。ハツとして顔をあげると、白猿は、大きな口を開けて、ぐつと太吉をにらみつけてゐます。

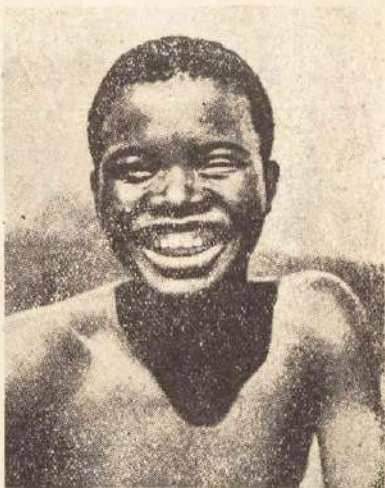
その恐ろしい顔！ 稻妻の様に眼が光りました。火をはく様に眞赤な舌が震へて居ました。

太吉の顔色は、見る／＼中に眞青に變つて、「うむ」と云つてそのまゝ、氣を失つて終ひました。

その時、ズドン！ と、鐵砲の音がして、白猿は頭を射抜かれて死んでしまひました。

可哀さうに、どんなに手當をしても、太吉も二度と生き返りませんでした。

(をばり)



# 世界一周物語

久米元一

## アフリカの巻

この前は、雪と氷につままれた  
エスキモーのお話をしましたが、  
こんどは一つ方面をかへて、暑い  
く、アフリカのお話をいたしまし  
う。

あります。日の光りをとほさぬ深  
い森があるかと思ふと、焼砂が百  
里も二百里も續いてゐる廣いく  
沙漠があります。百獸の王といは  
れる獅子をはじめ、象、麒麟、河  
馬、鱉、犀、縞馬、毒蛇などとい  
ふ生物が、森の中や、草原や、沼  
の岸などを、我物顔に歩きまはつ

てゐます。  
この世の中は、文明とかいふも  
の、お蔭で、ずるぶん住心地よく  
なつて來ました。併し、私はアフ  
リカへ渡つて考へました事は、こ  
の世の中に一つぐらゐはかうした  
自然そのまゝの國があつてもいい  
なと云ふ事でした。私はまる五年

アフリカ土人の家



の間、アフリカの國々を旅行して  
來ましたが、あとになつて考へて  
見ますと、なんといつても、アフ  
リカの自然の美しさが、一番頭に  
こびりついてをります。又、この  
土地に昔から住んで  
ゐる土人達の生活の  
有様が一番懐かしく  
思はれるのです。  
まあこの寫眞を一  
つ見て下さい。下手  
なお話よりも、もつ  
とよく、アフリカの  
自然なり、住んでゐる土人の様子  
なりがお分りになりますでせう。  
私はアフリカへ渡つて、暫くす  
ると、まづどうやら土人の言葉が  
分るやうになりました。で、土人



サイ子ん

の村を訪問して見ようと思ひまし  
て、まづ二人の案内人を雇ひ入れ  
ました。案内人といふと大さうで  
すが、まだ子供なのです。一人は  
リイムワーチと云ふりの子で、も  
う一人は、その妹でイリと云ひ  
ます。二人とも寫眞がありますか  
ら御覽下さい。なんと愉快さうな  
顔をしてゐるぢやありませんか。  
リイムワーチは、眞裸で、たゞ

切草の舞台



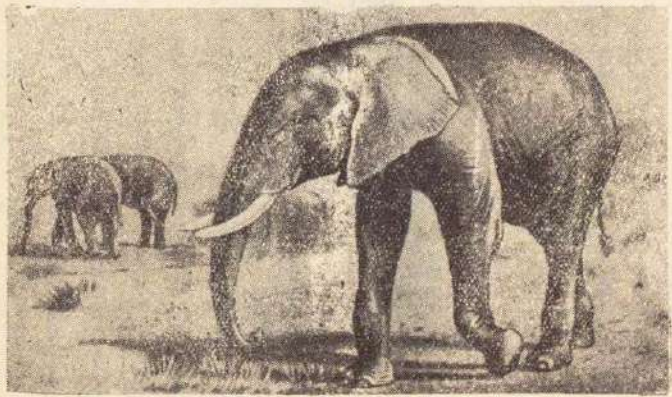
頭の毛は、ちようどラシヤのやうに縮れてゐます。妹のイサも、胸のあたりから膝までしかない着物一枚です。頭の毛は、繩のやうにヨレ／＼になつて、たれさがつてゐます。リイムワーチは、よく笑ふ男の

腰の周りに小さな布を巻きつけたばかりです。その色の黒いこと！ さア、なんと云ひませうか、靴のやうだとも申しませうか。たゞ、齒の色だけが極だつて白いのです

まづ第一番に、二人のお家へ行って見ました。お家と云ふのは、日本の國の田舎でよく見る、積藁のやうな恰好をしてゐます。小さな入口から這入つて見ますと、中は薄暗くて、よくは分りませんが、床は粘土を踏み固めたやうになつて、その上に、二三枚の敷物が敷いてありました。これは、土人達の寢床でした。この上へ横になつて、掛蒲團もなんにもなしで眠るのです。

やがて外から、お父さんとお母さんが歸つて來ました。お母さんは、子供達から、私が此處へ訪ね

象はおとなしい獣です



て來たわけを聞くと、大さうよろこんで、

「今日はずい私達と一緒に御飯を

りました。お母さんは、この上へ粘土で作つた鍋をかけた。御馳走が出來ると、リイムワーチ



食へて行つて下さい。』と、云ひました。部屋の真中には、ちやうど日本の圍爐裡のやうなものが切つてあ

のでした。お父さんは、玉蜀黍を煮てお粥のやうにしたものを、一塊づつ、めい／＼の葉っぱの上へ載せました。又、お母さんは、

「さアどうか召上つて下さい。」と云ひました。私は、ナイフやホークが出るのを待つてゐましたが何時まで経つても出ないので、そつとお父さんの方を見ると、お父さんは手づかみで食へてゐるのでした。

まづ、玉蜀黍のお粥を手でつかんで、ギユツと握りしめると、丸いタマのやうになります。それをお碗の中の汁に浸して、ひよいと口の中へ入れるのでした。私も真似してやつて見ますと、なか／＼味のいいものでした。私は食へながらリイムワーチに向つて、



「を食べるのかね。」と訊いてみますと、リムワーチはこゝろしなから、

「いろんなものを食べますよ。バナナだの、オレンヂだの、芋だの、落花生だの、豆だの、象の肉だの、バッタの焼いたのだの、芋蟲だの……。数へ切れないくらいです。その中でも、象の肉が一番

美味しいです。」

と云つて、舌鼓を打ちました。すると、妹のイサが横から口を出して、

「あら、象の肉より、猿の方がよつぽと美味しいわ。」と云ひました。兄さんは、黙つてニコニコ笑つてゐました。

暑い國では肉類よりも、野菜や果物を多く食べます。日本の國の我々でも、夏になると、肉よりも野菜が食べたくなりませす。それと同じ理窟でした。

御飯のあとで、リムワーチは腰に巻いた布の中から何かしら白い塊を出して、私に嘗めてみるよと云ひました。嘗めてみると、大へん鹽辛かつたので、それが鹽の

塊だといふ事がわかりました。私がいやな顔をしてゐるのを見ると、リムワーチはからく聲をだして笑ひながら、私から鹽を受けとつて、べろりと嘗めました。そのあとで、妹のイサも嘗めました。

この國の人達は、ちやうど私達が菓子を食べるやうに鹽を嘗めるのでした。これも身體が自然に要求するのです。

やがて三人は、打ちつれあつて外へ出ました。外には、熱帯の午後の太陽が、さんざんと輝いてゐました。私達は日蔭をくぐと選つて歩きました。ちやうど、オレンヂが熟れる頃で、水のしたよりさらなやつが、枝もたわむになつて

ひきました。イサは、私に向つて、「欲しいだけ召上れ。」と云ひました。

リムワーチは、圖で御覽の通り、帯を使つて、スル〜と椰子

お山の大将、われ一人



の木へ上つて行きました。そして私のために、緑色の椰子の實を二つ三つ取つて来てくれました。イサは、ナイフで、椰子の實の頭へ、一錠銅貨くらゐの穴をあけま

した。中には、冷たくて美味しい椰子乳が入つてゐました。この冷たい飲料は、暑い國の人々にどんなに深い喜びと慰めを與へることでせう！ 土人達にとつては

どんなに手のかゝつた御馳走よりも、この椰子乳の方がずつと有難いのでした。

夕がた、日が暮れて涼しくなると、方々の家から大勢の子供たちがワイワイと出て來

て、隠れんぼだのを始めました。この國では、かくれんぼの事を「鼻と狼」と云ひます。鼻が隠れてゐる所へ、狼が忍びよつて、いきなり捕へるのです。捕へられた鼻は



サイの子の形人

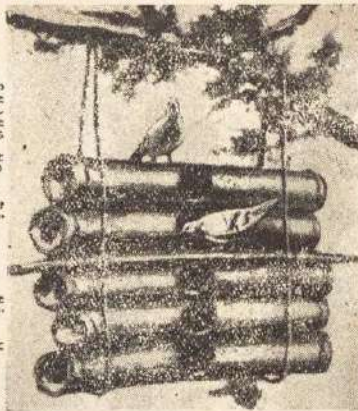
われるやうな聲で、

「狼だよオ。狼だよオ！」と叫びます。とても面白いので

私は何時までも見てゐました。また、中には、圖で御覽の通り馬乗り遊びをやつてゐる者もありまし

た。私は、自分の子供の頃の事を思ひ出しました。野原の真中には、圖に示した通りの、頭の尖つた小山があつて、二三人の男の子がそれに匍ひあがつてゐました。一番上にゐる子供

鳩のお家



は、私達の方へ向つて、高く手をあげて見せました。  
この小山は、白蟻のお家でした。白蟻が一啣へづつ粘土をくはへて来て、こんな大きな山を作るのでした。子供達は、この粘土を使つて、いろんな玩具を作ります。牛や羊の形をしたものだの、人形だ

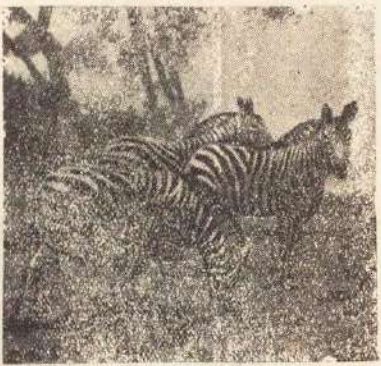
の、人形の家だの、なんでも器用に作りました。ですから、子供達のお母さんは、わざ／＼お金を出して玩具を買つてやる必要がありませんでした。

お金といへば、この國では、銀貨や紙幣の代りに、小さな貝殻を使つてゐました。アフリカでは、所によつては貨幣を使ふ所がありますが、大部分は、貝殻だの、珠數玉だのを使つてゐます。

イサは、家へ歸つて、自分のお人形を持つて来て私に見せました。これは、玉蜀黍の蕊です。珠數玉で眼を作り、頭の手は草です。腰のまはりの布は、袴のつもりでせう。イサは、このお人形が可愛くて堪らないといふやうに、ほ、

づりをしてゐました。  
イサは又、自分が飼つてゐる鳩を見せてくれました。鳩のお家は、圖で御覧の通り、五本の青竹を並べたもので、一つ／＼に穴があいてゐました。イサが、玉蜀黍を撒いてやると、竹の中からバラ／＼と飛び出して來ました。中には、イサの肩に止つて、イサの掌から食べるものもありました。  
イサは又、一匹の小羊を見せました。この羊は、大さうよく馴れて、イサの行くところへは何處へでもくつついて行つて、め／＼と啼きたてるのでした。  
私共から見れば、アフリカの土人達の生活は、實にみじめな物に見えます。併し、土人達にとつて

は、みじめでもなんでもなかつた。雨が降れば家があり、お腹が空けば有りあまる食物があります。又子供達にとつても、美しい繪本や價の高い玩具こそなければ、毎日を愉快に楽しく暮す上に於て、少しも不自由な事はなかつたのです。  
美しい、しまうま



そこには一人も不平らしい顔をした者はありませんでした。もしあるとすれば、それは文明のせいいたくに撞れる者だつたでせう。  
獅子や、象や、毒蛇、棲むアフリカ、太古のまゝなる森林と、見はてのつかぬ沙漠を持つたアフリカ！私はこのアフリカが未だ自然の姿を失はない内に、もう一度行つて見たいと思つてをります。アフリカは今、文明の流れをうけて、昔の面影を失はうとしてゐます。それは芽出たい事かも知れません。併し、なんとなく名残り惜しいやうな氣がするのは、おそろしく私一人ばかりではないだらうと思ひます。  
(カーペンターの地理讀本より)

象牙の牙がこんなに取れました







仇

討

大木雄三

岩岡とも枝畫

「源六、源六はをらぬか。」

新太郎は呼んでみましたが、返事がありません。もう暮れかけた家の内は、薄氣味悪く静まりかへつてをります。

新太郎は、うゝと唸つて下腹を抑へました。痛くてたまらないのです。さつきも痛みのためにひどく苦しんだ末、いつか眠つてしまつたのですが、眠つても樂ではありませんでした。次から次へ、怖ろし

—

い夢を見つゞけて、やうやく目が覺めたのでした。

新太郎は汗ばんだ兩掌を打つて、

「源六。」

と、も一度呼びました。

「はい、若旦那様。」

やつと返事がありました。

「何をしてゐたのぢや、灯をもつてまゐつたらよいではないか。」

いらいらと、叱るやうにいふ新太郎。源六は、さるさる灯をもつて這入つてまゐりましたが、

「御免下さいませ。さきほどお客様がお見えになりまして、そこまで私に參れとのこと、つひ表まで……。」

かう言ひかけるのを、

「たわけ。」と、新太郎は噛みつくやうに怒鳴りつけました。ぶるぶる震へる聲です。

「誰の許しを得てまゐつた。病氣の主人を置いて、氣儘な真似をしてよいものか。源六、其方は病人と思ひ拙者をあなどるか。」

「とんでもない。」

源六は小さくなつて、

「そんなわけではございません。が不思議なのはその武家でございます。御主人折戸新太郎殿へ失禮ながら……と仰言いまして、この通り小判を下されました。」

「小判。拙者にと申したのぢやな。そちはその武家を存じてるか。」

「いえ、これまでたゞの一度もま目にかゝつたこともない方でございますが……。」

「ふむ。」

新太郎はちつと何かを見詰めるやうに、天井の一角に目を奪はれてをりました。

「世の中といふものは、な、源六。」

と、しみじみした調子になつたのでした。

「はい。」

「世間に鬼ばかりはゐない。拙者がかう落ぶれたのを知つて、救つて下さるお心持だ。せめて御姓名はさいてまゐつたらうな。」

「いえ、御姓名を伺ひましたところ、武士は相身互ひぢやと仰言つて、ずんずん行つてしまひになりました。」

「なるほどな。心床しい御武家。」

新太郎は威服しないではゐられなかつたのです。そして、源六を叱りつけた自分のはしたないことを

後悔しました。

「源六。そちにも苦勞をかけるのう。しかし我慢ぢや、笑つて國へ戻る時も来よう。それまでは頼むぞ。そちだけが拙者の味方ぢや。」

「勿體ない。」

源六の目に涙が光りました。新太郎も、熱いものが臉のなかに湧いてきました。

二

新太郎の病氣は、仲々よくなりませんでした。よくならないばかりか、日に日に瘦せて行くのです。

「残念ぢや。このまゝは死なぬぞ。」

さういふ主人を見るのが、源六には怖いやうにさへ思はれました。

新太郎が國を出てから、もう三年たつてをります。

新太郎は仇討ちに出たのです。その時から源六はづつと一緒に旅をつゞけて来たのでした。



苦しいことを、二人は半分づゝに分けて、この北の國の港町に着いたのが秋の末でした。急な時候の變り目に負けたのでせうか。新太郎がたうとう倒れてしまつたのでした。明日はよくなるだらう、明後日はまた旅に出られやう、と言つてゐるうちに、新太郎は悪くなるばかり、路用の金は一文なしになりました。米も薬も買ふことができなかったのです。

源六は町々を歩いて、乞食のやうなことをして、少しづつお金を作つてをりました。そこへ不思議な武士が現はれて、新太郎を救つてくれたのです。何度も救つてくれるのです。

「誰であらう。今度はぜひ姓名を承つてまわれよ。」その度に新太郎は言ひました。けれども源六の返事も、その度に同じだつたのです。

「武士は相身互ひ、と申して、ずんずん行つておしまひになりました。」

と、判で押したやうなのです。

をかしたことだ、と新太郎は思ひました。初めのうちは、たゞ親切な武士だとあまり氣にもしませんでしたけれど、度重なると、それではどうしても氣がすまなくなつたのであります。

今日も、源六は、門口から聲をかけた武家に連れ出されて、小判を貰つて戻りました。

「源六、拙者はもうこのまゝでは濟まされなくなつた。これほどの親切をして呉れるには、何か理由がなくてはならない。そちは、こんどこそ、はつきりと聞き訊して呉れ。」

と、新太郎が言ひました。

「はう、はう。」

源六は答へました。

新太郎の病氣は、さうする間にも、いよいよ悪くなつて、いまはもう床の上に起きることすらできません。鉛のやうな目を光らして、大儀らしい溜息を吐くばかりです。

「口惜しい、残念だ。」

新太郎はとどきこんな言葉を洩らします。これ  
を聞く源六の辛さ。

「も一度よくなつて下さいませやう。この源六奴の  
命は、たとへ明日終へてもかまひませんから。弓矢  
八幡の神様、下郎のお願ひをお聞き届け下さい。」

源六はかう言つて祈るのであります。

ほんとに新太郎は氣の毒です。父が討たれたのは  
三年前の夏祭の宵で、それからこつち、たゞ一心に  
その仇を訪ねてゐるのです。しかもまだ仇に會はぬ  
うち、立つこともできない病氣になつてしまつたの  
ですもの。

「残念だ、口惜しい。」

かう叫ぶのも無理はありません。

三

ある日、門口から源六を呼ぶ者がありました。ふ

といふ言葉が耳についたからです。親切な人にも似  
合はぬ亂暴な言葉ををかしいと思つたからです。

「いや、とんだ失禮。つひうつかり申したことぢや、  
お氣にされるな。」

武士は詫びました。

「いへえ、いへえ。」

と、源六は言葉を濁してしまひました。いつもお  
金を貰つてゐるので、怒ることもできなかつたから  
です。でも、ちつと唇を噛みしめてをりました。  
やがて武士は財布を開けて、小判の音をちやらり  
と鳴らしました。

「これは僅でござるが……。」

さう言つて小判を出したのです。しかし源六は頭  
を横に振りました。取らうともしないのです。

「いかがなされた。御不用か。」

と、武士は不審さうに訊きました。

「小判はいりませぬ。若旦那様はあなた様の御姓名

と新太郎は聞きつけて、

「源六、今日こそ聞いておくれ、必ず。」

と、目で知らせました。

「はい、かしこまりました。」

と、源六も目で答へました。

表にたづねたのは、いつもの親切な武士でありま  
した。

「これにお武家様。」

源六は叮嚀に頭を下げました。武士ははつこり合

點いて、

「新太郎殿の御容體はいかがでござるな。」

「はい。」

源六は悲しげに目を伏せました。武士はちよつと  
眉をひそめて呟くやうに言ふのでした。

「もういかなか？ 哀れな奴。」

「えつ。」

ひつくりして源六は顔を上げました。「哀れな奴。」

を承りたいと申してをります。お氣の毒な若旦那様  
です。もう幾日のお命でもありますまい。どうぞ御  
姓名だけなりとお教へ下さいませ。それが伺へませ  
んと、下郎奴も若旦那様に申譯け下さいません。」

「成程。」

と、武士は合點きました。それからはつこりと微  
笑しましたが、

「如何にも拙者は、新太郎殿とはよく存じた者ぢ  
や。よろしい、それほど迄に申すならば、改めて明  
日お目にかゝらう。」

と、言ひました。

「えつ。」

源六は嘘ではないかと驚いてしまひました。武士  
は言ひました。

「では明日だ。拙者からお訪ね申すぞ。それまでは  
姓名もわざと名乗るまい。」

そして、ずんずんと、呆れた源六を振り返りもせ

ずに行つてしまいました。

四



三八  
新太郎は痛む身体を源六に手傳はせて、取つて置き  
の紋服に着換えました。伸びて蓬のやうになつて  
ゐた月代を撫でつけました。今日はいろいろ患んで  
くれた武士が訪ねてくるといふので、たとへ病氣し  
てゐても、無禮な有様を見せまいといふ武士らしい  
心懸けからです。

『もう見えられさうなものぢやのう。』  
晝過ぎの陽が黄く障子にあたるのを見た新太郎は  
待ちくたびれてゐる様子でした。

『はい。けれどもそれまで横におなりなすつてお休  
みになつては如何です。お疲れでございませう。』

『いや、これですよ。』  
と、新太郎は答へたのです。

『先さが情を知つた武士だ。こちらも武士の作法に  
背くわけには參るまい。たとへ新太郎斃れても武士  
の名は汚したくないぞ。』

『はう。』

源六はさう答へるよりしかたありませんでした。

『御免下さい。』

表で聲がしました。

『ちいでぢや。』

『はい。唯今。』源六が、支關へ出てみると、約束  
通り武士が訪ねて來たのでした。

『どうぞお上り下さいまし。若旦那様、お待ち兼ね  
でございます。』

武士はにやりとした儘、グツと入つてまゐりまし  
た。そして敷居に立つて、おつと新太郎を見下した  
のです。

『お、貴様は。』

肝走つた聲が新太郎の口から出ました。源六は二  
尺ばかり飛び上りました。

『父の仇！』

新太郎は、つと蒲團の下の刀に手を掛けました。  
スラリと走つた銀蛇。



「仇、柳川九兵衛勝負。」

「あは、い、い、い。」武士は大声に笑ひました。

「仇呼ばはりか。新太郎考へてみい。貴様に薬の代を與へたのはみんな拙者だぞ。貴様は拙者を思人と言つたさうではないか。思人に刃を向けるのか。」

新太郎の刀はがたがた震へました。

「口惜しいか、しかしあは、い、い、い、思人に向ける刃はあるまいなあ。」

武士はまたしても高笑ひします。

「卑怯者ッ。思は思、仇は仇だ。汚れた金は拙者の身體で返してやる。」

言ひながら新太郎は立ち上りました。が足が利きません。ふらふらと倒れかゝるのです。

武士はまたにたりと笑つて、これも刀の鞘を拂つて、づいと新太郎の前に突きつけました。

「言つたな、新太郎。貴様の身體で返すならその身體を買はう。」



### 三つの寶

内藤辰雄

平澤文吉書

昔、或る村に南條龍之介と言ふ至つて正直の浪人者がすんでゐました。龍之介は、浪人になる時に殿様に頂いた僅かのお金を持つてぶら／＼と遊び暮してゐましたが、諺にもあるとほり「座して喰へば山をも盡す」で、次第に持つてゐる金をすくなくしてしまひました。が、何故かお百姓をするのが嫌ひでしたから、妻子を連れて近くの小さな町に移轉し

四〇

「やつ。」と振りかぶつて「えいつ。」と一聲。

「あつ。」

肩光きを斬られた新太郎は、倒れながらも柳生流の極意。

「やつ。」と、刀を投げつけたのでした。その狙ひは外れず、武士の咽喉を突き刺してしまつたのです。

「仇柳川九兵衛、思ひ知れ。」

新太郎は刀を持つて、仇の止めを刺さうとしましたが、もう身體の力が足りませんでした。立たうとした儘、がつくりと前へ打伏して呼吸絶えてしまつたのです。

「若旦那、若旦那様。」

走りよつた源六は、やがて正氣を落した人のやうに呆然と立ち、ふらふらと歩き出しました。

「仇を討つたのに、仇を討つたのに……俺は何うしたらいいのだ。」

そして、わつと泣きました。（をばり）

て、家を建てる材木を買ふ商人になつてしまひました。が、この龍之介と言ふ浪人者は莫迦正直で、お客に訊かれると、材木の元値を言つてしまひますので、お客は皆龍之介の賣る材木を高い／＼と言つて他の材木屋に行つてしまひます。別に龍之介の賣る材木は高い譯ではないので、むしろ、他の店の材木よりも安い位なのですが、そんなことにはお客は莫迦な者で嘘を言ふ商人に欺されても平氣な者です。嘘を言ふ商人はよく「それでは元一杯です」とか「損

四一

をします」とか言ひながら、倉を建てて行きます。それに引較べて、龍之介の方はさつぱり駄目でした。龍之介の家では門に立て掛けた材木に雀が来て巢を掛けさうになる程賣れませんでした。流石の龍之介もこれには困つてしまつて、頭を左右に傾けてみましたが、よい智慧が出ません。そこで、材木屋をやめて、こんどは餅屋になつてみましたが、やはり元値を話してしまふものですからお客が來なくなつてしまふのです。この商賣も駄目だとあつてこんどは呉服屋さんになつてみましたが、これも駄目。たうとうあんなに嘘を言つて商賣をしなくては暮して行けないこんな町にゐるよりは、一そのこと元の田舎で百姓をしてゐた方がやはり自分の性に合つてゐるのだと後悔して、また、妻子を連れて元自分たちのすんでゐた片田舎に歸りましたが、不仕合せなことには、百姓にならない中に、龍之介はきつと長い間嘘を言はないで暮して行けない町に、ん

でゐて苦勞をしたせいでせう。——病氣になつて死んでしまひました。さて、杖とも柱ともたのむ父親に死なれたので、後に残つた者は困つてしまひました。

その時分、息子の虎之助は十三歳で、親に似てやはり顔の長い子供でした。が、至つて丈夫で親孝行の子供でしたから涙を出して泣いてゐる母親の前に膝をさちんと折つて、やはり、握拳で眼をこすりながら云ひました。

「お母さん、泣かなくともいいです。ちつとも心配することはいらぬです。僕明日から小鳥を捕りに行きますから。そしてそれを町に賣りに行けば二人が食つて行く位のことなんでもありません」母親は、百舌鳥のやうな頭を強く振つて、答へました。

「虎之助、とんでもないことをお言ひでない。お前小鳥を捕りに行つて蛇にでも足を噛まれてご覽、ま

た、熊や狼にでも逢つて喰ひ殺されたらどうする。お父様に亡くなられて、またお前に亡くなられて私がどうして生きてゐられるかえ」

虎之助は、訊くのでした。

「ちや虎は出るかい、お母さん」

「虎は日本にはすんでゐないが、あの大鷲山にはお前位の子供は苦もなく攫つて行く大きな驚がすんでゐる」

「虎が出なきや大丈夫だ。俺は虎之助だから」

かう云つたものゝ、孝行者の虎之助は、小鳥捕りにはならないことにして、村の百姓たちの使ひ走りになりました。そして、僅かの駄賃を買つて歸つては、乞食のやうに貧しく暮してをりました。が、足が早い上に、正直なので村人に重寶がられるのも事實でした。

が、間もなく、母親が眼をわづらつて、その薬代にたくさんお金がかゝりますので、二人は前にも増

して貧乏になりました。或る日、虎之助は、百姓の權六にたのまれたので町に鐵を買ひに行つてゐました。

夏の空には太陽が大地を睨み付けるやうに光つてゐました。向ふの峰の上には白い雲がもくもくと浮いてゐました。そちらこちらの田の中には、そちらに三人。こちらに五人と田の草を取つてゐました。虎之助は、その峠を昇り切つて路がちよつと平かになつたところで、その路傍の岩の上に網代の三度笠を冠つて、黒い衣を着た一人の坊さんが腰を掛けてゐるのに出逢ひました。

虎之助は、始め、すこし遠くからその坊さんを眺めた時には、その坊さんが屈んでゐたせいでせうがなんの變哲もない坊さんのやうに思はれましたが、傍へ来てその坊さんの上げた顔を見た時には、思はず立止つて、今迄泣き出しさうな詰らない顔をしてゐた者が、今度は眼を睜つてちよつと坊さんを瞞めま



した。  
虎之助は、生れてこの方、こんなに白い長い髯を生やした坊さんを見たこともなければ、こんなにギラ／＼と光る、それでゐてもつとも恐ろしくない眼を持つた坊さんをも見たことがありませんでした。その眼はまるで、洋服の釦程あるダイヤモンドの玉を二つ附けたやうでした。眉は蛾のやうでした。  
その坊さんは、自分の前に来て立止つた虎之助を見て「小僧、何處へ行くのぢや」と訊きました。  
その物言ひは本當に横柄でしたか、然し、それがまたなんとも言へず優しい響きを持つた聲でした。そこで、虎之助もつい釣り込まれて「町へ鐵を買ひに行く」と答へました。すると、その坊さんは白い花が風に揺れるやうに笑ひ出して「苦は買はんでもえ、樂を買へ。…何、これは冗談ぢやがのう」と云つて、虎之助になんでそんなに泣き面をしてゐると訊くのでした。虎之助は、身の上話をして「だ

から日に十遍も町に行つて歸らなければ自家でご飯を炊くことが出来ないのです。お隣りのおばさんや向ひのおちさんにお握飯を貰ふのです。然し、お隣りのおばさんや向ひのおちさんの家がお仕事に出てゐる時には、僕の家のお母さんは喰はずにゐるので」と云ひました。すると、その坊さんが「お前、今日はどこでお晝飯を食べるのかね」と訊きますので、虎之助は腰に結び付けてゐる握飯の包を見せるやうにして、自分を使ひに出す百姓に握飯を貰つて食ふことを話して、今にも眼か、涙を落しさうにしますと、その坊さんは、いきなり大きな聲で云ひました「小僧、泣くな。お前の親父は正直者ぢやつた。正直は人間の美德ぢや。お前の親父はその美德のために死んだのぢや。そのお禮に私がこの三度笠をやる。これは世界でも不思議な笠で、これに乗ればどんな遠くへでも瞬く間に行ける。村から町へ使ひに行くにもこれに乗ればお前の願ひは日に十遍どころ

ではない、百遍も千遍も萬遍も行ける」と云つて、自分の冠つてゐた笠を脱いで、虎之助に呉れました。そして、その坊さんは、時を虎之助の来た方へ降つて、何處ともなく去つてしまひました。  
その笠を脱いだ坊さんの背中が岩陰に隠れてしまふ迄見送つてゐた虎之助は、不思議なことがあるものだと思つて、試しにその笠の上に乗つて「町へ行け」と云つてみますと、なんと不思議ではありませんが、笠は忽ち地べたを離れたかと思つた間に、次第に虎之助を乗せた儘空高く舞ひ上つて、花火のやうに町の方へ流れて行きました。花火、言へば遅いやうですが、その早さは大人が息氣を切らして休まずに駆るよりも早いのです。  
その笠がお城近くに來た時に、虎之助は「これはいけない」と思ひました。若しも侍にも見付かつた際には矢を射られないとも限らないし、商人に見付かつてもまたことが面倒だと思つたので、虎之

助は、笠に「誰も見てゐない野原」と云ひますと、笠はお城近くの野原に降りました。その野原は草が脛を隠す程でありました。それから、虎之助は、その笠を持つて、町の鍛冶屋に行きますと、タドンか人間の顔なのか分らない様な顔をした鍛冶屋は驚いて訊きました。「虎之助さん、君其笠は拾つたのかい」虎之助は、それがあの不思議な笠さんに貰つた不思議な笠であることを話しました。「鍛冶屋のおぢさん、こんな不思議な笠がまたとあらうかい。まあ見てゐ玉へ」かう云つて、鍛冶屋の担いで笠の上に乗つて「左様なら」と云つたかと思ふと、不思議な笠は見る／＼空中に舞ひ上つて見えなくなつてしまひました。

二

不思議な笠を貰つてからは、虎之助は一日に三度許りではない、何百遍でも何千遍でも行けるやうに

なりましたので、従つて、村人の買物の使ひばかりでなく、もつと遠方へゆくやうになりました。例へて言ひますと、お嫁さんを採りに他の國へ行つたり何かお百姓の家に不幸があつた時に急いで他の國の、そのお百姓の親戚に知らしに行つたりするのでした。勿論、お百姓たちは、使ひ先の遠い近いで駄賃をたくさん拂つたりすくなく拂つたりしました。

その噂は大變なものでした。殿様の耳にまで入つたので、村の庄屋の家に、明日虎之助を連れて出頭せよと言ふ布令がありました。そこで庄屋許りではなくて、村の人は皆んな喜んで明日になるのを待つてゐました。ところが、不幸なことには、その夜になつて何者にかその笠を盗まれてしまつたのです。夜が明けてそのことを知つた虎之助とそのお母さんとは眞蒼な顔をして抱合つて泣きました。そこへ庄屋が来たので、兎に角、そのことを殿様に申上げることにして、母親はまだ眼病を患つてゐますので、



恵比壽様のやうに肥つてゐる庄屋とまだ眼を

泣き腫らしてゐる虎之助とが出掛けることになりました。二人は、その峠の例のところ、また例の坊さんに逢ひました。



その坊さんは、虎之助にかう云ひました。

「小僧、何を泣く」

庄屋は、虎之助に代つて、殿様からお招きがあつたことや、その笠を昨夜の中に何者にか盗まれた話をしました。すると、崇高く光る眼を睜つてその話を聞いてゐた坊さんは云ひました。

「さやうか。心配することはない。お前の親父は正直者ぢやつた。正直は人間の美德ぢや。お前の親父はその美德のために死んだのぢや。そのお禮に私は今こゝに持つてゐる不思議な眼鏡をやる。これは見たところでは普通の天眼鏡のやうだが、不思議な眼



鏡で、これを覗けば世界の隅々までも見える。天の上から地の底迄見えなところは無い」と云つて、懐中から天眼鏡を取出して、虎之助に呉れました。虎之助は、それを覗いてみますと、天には神様や天女が園遊會を開いてゐましたし、地の底を見ますと惡魔や鬼が踊りを踊つてゐました。そして、町から五里許り離れたところにあつて、逆も強い山賊がすんでゐると言ふので有名な小法師山の岩窟の中の、その山賊部屋に自分の笠がちやんと掛つてゐるのではありませんか。それを庄屋も見てびっくりして、その坊さんと別れて、殿様にお目通りをして、そのことを話しましたので、早速、その山賊は滅ぼされてしまひました。そして、笠は元のとほりに虎之助のものになりました。ところが、こゝにまた一つ不幸なことが起つたのです。と言ふのは、虎之助が侍になる年に悪い流行病が流行つて、虎之助の母親もそれに罹つて、明日は愈々殿様にお目通りをする

言ふ前々日にはもう死に掛かつてゐたのです。そこで十六歳になつた虎之助は、残念で耐りませんでした。どうか一目でいゝから自分の、お父様のやうに紋付を着て刀を差してゐる姿をお母さんに見せて上げたいものだと思ひながら、町に薬を買ひに行くために例の峠に差掛かつて來ますと、また、虎之助は例のところでも例の坊さんが腰を掛けてゐるのに出逢ひました。尤も、虎之助が何故急ぎの使ひにあの不思議な笠を使はなかつたかと言ふに、ここでまた坊さんに逢つて何かよい智慧を貸して貰へはしないかと思つたからでもあります。

坊さんは、云ひました。

「小僧、心配することはない。お前の親父は正直者ぢやつた。正直は人間の美德ぢや。お前の親父はその美德のために死んだのぢや。そのお禮に私がこゝに持つてゐるこの不思議な印籠をお前にやる。こゝは世界でも不思議な印籠でこれで病人の額を撫でれば

ばどんな難病でも癒らないことはない」  
 かう云つて、その坊さんは黒い衣の裾を捲つて、腰に下げてゐた印籠を虎之助に渡しました。そして



峠を下つて、町の方へ行つてしまひました。

虎之助は、自家に歸つて、その坊さんに教へられたとほりにしますと、一時は死に掛かつてゐた母親の病氣もけろりと癒つてしまひましたので、その翌日、母親と庄屋に連れられて行つて、殿様にお目通りをして侍として召抱へられる事になりました。

それから、虎之助と母親とは、正直者の父親を殺した町にすむやうになりました。

虎之助は、その後その坊さんに逢つてお禮を言はうと思つて、毎日のやうにその峠に行つてみたり、随分根氣よく隣國迄も探し歩きました。たが、たうとうそのお坊さんは見付ゐた石だけが、なんでも知つてゐる魔物のやうに据ゑつけられてゐる許りでした。

(をばり)



一、母の面影、子の面影

ちようど國王の宮殿の玻璃鏡に、舜天丸と、そして、鶴と龜兄弟とが、琉球流と日本流との武術の稽古をしてゐる有様が、あり／＼と映つた頃：不思議にも、毛鼎國の館の庭で、三人が、その通り、武術の稽古をしてゐました。さうして、毛鼎國が、利勇の大きな圖體を、もんどり打たせて投げつけて、宮殿

舜天丸王子

三島 霜川  
寺内萬治郎畫

ちうが、ひつくり返るやうな大騒ぎになつた頃も、まだ、やつてゐました。もちろん、三人ともに、宮殿内に、そんな「大變」が起つてゐようとは、夢にも知りませんでした。  
「唐手」は、右の拳を固めて、右の脇の帯の邊に構へ半身をひらいて、敵に向ふのでした。そして、敵が劍、刀で斬つて来るのを、かいくぐり、くぐりぬけて、敵を拳で衝くのでした——衝かれたら、敵は、

きつと殺されて了ひます。それほどに、たん練された其の拳には、恐ろしい力がありました。

「これは、亂軍の組討には可いが、互に陣を張つて戦ふ時には、ちと、まだるいぞ。それに、十人廿人の敵が、太刀、薙刀で向つて来る時は、やはり、日本流の打物業が可いな。わしが稽古をしてあげる。やつて見るが可い…… それから、弓と」

一と休みしたところで、舜天丸は、さう云つて、日本流の「武術」の話をしました。

鶴と龜とは、大そう、悦んで、その話を聞いてゐましたが、「ア、弓ですか。弓なら、わたくし等も、少し稽古をしました」

「いや、こちらの弓とは違ふ。あれは、唐式の半弓だが、日本ののは、弓も矢も、ぐつと大きい。もちろん、十三東とか十五東とか云つて、いくら強いと弱いとはあるが、大が、四五町から六七町まで矢が飛ぶのだ」

鶴も龜も眼を丸くして、「ホウ、矢が、五町も六町も飛ぶのですか」

「ム、普通、その位だ」と、舜天丸は、うなづいて「わたしの父、爲朝公は、八町先きの船を射て、顛覆したこともある」

「ホウ、船を顛覆しになつたのでござりまするか」と、鶴と龜とは、いよ／＼、驚きました。

と、その時、どこか、そこらの物蔭で、クツ／＼、クツ／＼と、氣味の悪い笑聲がしました——大きな蛙でも鳴くやうな不思議な笑聲でした。

「誰だ」  
と、鶴と龜とは、きつと、その方を見ました。

「わたしですよ。阿公です」

「ア、魔女の阿公……」  
鶴も龜も、さつと顔色を變へました——恰ど、悪い前兆でも見たといふやうに……

おんぼろ、ぼろ／＼の乞食のやうな阿公が、腰をこ

ごめて、圓々しく、三人の方へ近よって來ました。やはり、くツ／＼、くツ／＼、笑ひながら——それが、あついで、やうのやうでもあり、また、三人に對して、何か嘲つてゐるやうにも思はれました。

「嫌な婆々だ!……」

と、舜天丸も、さう思ひました。

阿公は、づつと以前、國王の「御信任」を得て、宮殿に入りこむでゐた妖婆でした。それが、寧王女を咒殺さうとして、毛鼎國に、やつつけられました。そして、宮殿から逐出されて、何年も／＼、どこへか姿を隠してゐたのでした。

「お前さんがた、のんきだネ。今、宮殿で、どんな恐ろしい騒動が起つてゐるか知らないで、くツ、くツ、くツ」

阿公は、さう云つて、喉を鳴らして、笑ひました。

「ナニ、騒動が起つてゐる?……」

鶴は、うツかり、その口に乗りました。

「眞んとか嘘か、直さに解ります。ナニ、もう、直さに……」

「嘘か、眞んとか、宮殿へ行つて見れば解るではないか。二人ともに行きなさい、わたしも行く……」

馬がゐますか」

と、舜天丸は、テキバキと云ひました——鋭敏な頭で、とにかく、駈けつけて見なければならぬと判断して。

「馬は居ますが……」

と、鶴は、オロ／＼して、こたへました。

「はやく鞍をお置きなさい」

と、舜天丸は、急立てました。

鶴と龜とは、燕のやうに身を翻して、概の方へ駈けて行きました。

「くツ／＼、くツ／＼。毛鼎國は、わたしを、やつつけようとした奴ですが、今度は、自分が、やつつけられます。馬鹿です、あれは、大馬鹿です。あの

「さうだよ。お前さんの阿父さんの命が危い……」

たぶん、もう、駄目かも知れない。まア、確なことは、王女が斬られて、宮殿が血に穢されて了つたよ。そこで、あの曠雲の術が破れて……くツ、くツ、くツ、ア、あいつの術が破れて、「禍」も出て來ら

れなくなつて了つたよ。いや、あいつが、あんまり高まんだから、とても、好い氣味ですよ、くツ、くツ、くツ。だが、あの馬鹿國王が、スツカリ憤つてお前さんの阿父さんを、殺させようとしてゐるのだよ。ア、けんのん／＼、追つつけ、こゝへも、國王の討手が向つて來るだらう。そして、この館が焼拂はれて了ふだらう」

阿公は、さう云つて、大きな黄い齒を露出して、くツ／＼、くツ／＼と笑ひました。そして、ジロ／＼舜天丸の方を見ました。

「それは、眞んとのことか」

と、鶴と龜とは、顔を見合はせて、青くなりました。

國王に、忠義なんかつくしたつて、何んにもなりません」

阿公は、舜天丸の顔を見い／＼、さう云つて、またくツ／＼と笑ひました。

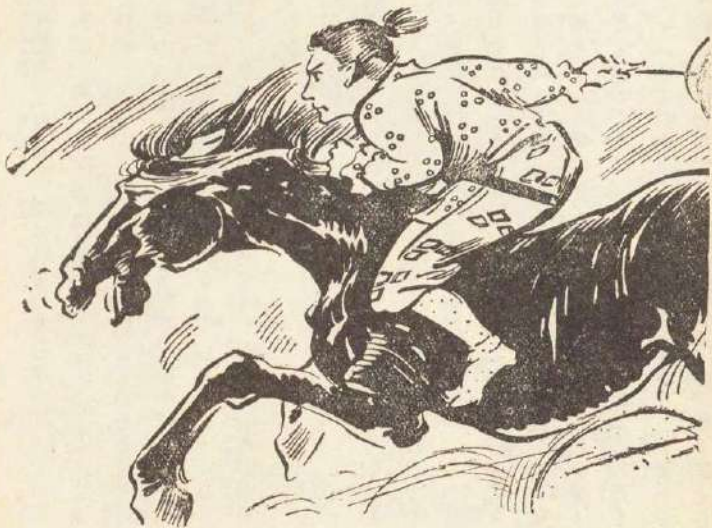
舜天丸は、きつと、その顔を睨みつけました。そして、くるりと後ろを向けて、鶴と龜との後を追つて行かうとしました。

「お待ち下さい、若君。あなたは、爲朝公の若君でございませう」

と、阿公は、實に、ハッキリとした日本語で云ひました。

舜天丸は、ビックリして、振りかへりました。

「あなたは、おえらい。眞んとに、おえらい方です。お生まれつき、貴い方です、わたくしは、あなたの……」と、云ひかけて、阿公は、慌て、言葉を變へした。「わたくしは、大事の／＼この國の秘密をあなたにお知らせしようと思ふのですが」



「なひません」  
「お前も幻術をつかふのか」  
「はい。でも、わたしの方は、お祈禱を主にやりま  
す」  
「お祈禱か。わしは、正しい力で、やッてやるぞ。  
正しい者は、さッと勝つ」  
と、舜天丸は、ささくに云ひました。  
阿公は、嫌な顔をして、「それが、あなたのお考通  
りに参れば宜しうございますが……」ですから、わ  
たくしは、この國の秘密と、あの噂雲のやつを、征  
伐なさる秘術をお教へ申上げようと存じますので」  
「要らん。わしは、お前の祈禱や邪道の術で、噂雲  
をやッつけようとは思はんぞ。わしは、わしの力で  
勝つ」  
「いま、それが、危いのです。わたくしは、決  
して、あなた様には、悪いことは申しません」  
と、阿公は、一生懸命に云ひました。その顔にも、



「ナニ、この國の秘密……」  
「はい。この國には、今、悪人だの悪神が蔓ッて、  
滅茶々々でございます」  
「ム、悪神、来れり、海水、清からず……」その悪  
神といふのは、噂雲のことか」  
「はい。よく御存知でゐらッしやいます。だが、あ  
の噂雲は、若君のことを悪神だと申して居ります」  
「わしのことを？」  
「はい。そして、あなたが此の國へおいでになつた  
から、海の潮が赤くなつたのだと申して居ります。  
あいつこそ、禍といふ恐ろしい獣をつかつて、この  
國を盗まうとしてゐるのでございますが」  
「ム、わしは、その禍を征伐してやる」  
と、舜天丸は、固く、さう信じてゐるやうに云ひま  
した。  
「いま、あいつには、恐ろしい幻術があるので  
ございます。わたくしも、とても、あいつには、か



毛鼎國の館へ押寄せるところでした。  
 「國王の御沙汰だ。兄弟ともに、いさぎよく繩にかかれ」と、呼ばはって、陶松壽は、兄弟を召捕らうとしました。  
 「お父上の身の上が、いよ／＼、心配だぞ」  
 兄弟は、さう思つて、馬を、さつと乗入れて、人數を蹴散らして通らうとしました。  
 それと見て、舜天丸は、ヒラリと飛下りました……飛下りながら、馬の耳へ、ピシリと一鞭。馬は驚いて憤りました。そして、狂つたやうになつて、人數のなかへ暴込むで行きました。  
 「うわッ——」  
 裸馬に暴込まれて、人數は、バツと、左右へ逃げて道をひらきました。  
 舜天丸は、太刀を引抜いて斬込みながら、「あんた等は、館へ引返して、館を守るが宜しい。わしが、宮

「一生懸命」「眞實」も現はれてゐました。  
 しかし、舜天丸は、それを耳にもかけませんでした。それは、決して、阿公が、汚い乞食であることを嫌つたのではありません。その心に動いてゐる悪い考が、舜天丸に見て取れたのでした。  
 恰ど、その時、館の門を出て行く馬の蹄の音が聞えました。  
 「ア、出て行つたな」  
 舜天丸は、さう思ふと直ぐに、すがりついて引止めようとする阿公を振りはらつて、厩へ駆けつけました。そこにはまだ、二頭の馬がゐました。  
 舜天丸は、そこにあつた鞭を取ると、その一頭にヒラリと跨かりました。むろん、裸馬でした。が「鶴の仙人」から乗馬の「術」も授けられて、裸馬を乗りこなす位のことば、平氣でした。それに、戦に行くといふのではありません。馬を飛ばせて、宮殿へさへ行けば可いのです。鞍を置くよりも、鶴と龜とに

五六  
 追ひつく心が、先に立ちました。  
 舜天丸は、鞭をあげて、ピシリと、一と當。燥りさつた馬は、一度、躍上すると其のまゝ、流れるやうに、さつと、門の外へ飛出しました。舜天丸は、腰のヒネリ方一ツで、思ふやうに馬を飛ばして行きました。  
 何事が起つたのかと、城下の民は、皆な外に出て、眼を丸くして、馬を飛ばして行く舜天丸を見送りました。そして、その風俗の異つた姿を怪しみました。  
 「あれは、人間業ではない。悪神の使ではないか」と、さういふ者もありました。それほどに、舜天丸は、猛烈に、馬を飛ばせて行きました。  
 舜天丸の馬は、もう一町ほどで、鶴と龜との馬に追ひつきさうになりました。と、ふいに、行方に當つて、一手の人數が現はれて來ました。それは、國王の討手でした。  
 陶松壽を大將として、百人あまりの討手の人數は、

殿へ行ッてあげる……父上の身の上は、わしが引受けた。館へ……」

と、兄弟に命令するやうに云ひました。鶴も龜も、馬の首を回して、館へ取ッて返しました。

「その怪しい奴を召捕ッて了へ」

と、云ッて、陶松壽は、何故か、わざと、兄弟の後を追駈けようとしませんでした。

裸馬に蹴散らされて、一度、バツと散ッた討手は、また、集マッて来て、舜天丸に、むらがりかゝッて來ました。舜天丸は、こゝにゐるかと思ふと、かしこに現はれ、かしこにゐるかと思ふと、こゝに現はれて、神變不思議な働で、討手を切りまくりました。

「ア、悪神だ。そいつが、悪神に逢ひない」と、陶松壽は、さう云ッて叫びました。そして、自分が真ッ先に、馬に鞭ッて逃出しました。「悪神だ」とよ。悪神が來たぞ」

た。背は裂け、髪は振亂して、兩手に、廷臣から奪ッた劍を持ッてゐました。さうして、それを、ふるッて、近づく者を、片ばしから、突倒し切伏せました。二ツの劍から、血がボタ／＼、滴りました——王女は、毛鼎國と一緒に、宮殿の外へ逃出さう／＼として、ふん闘したのでした。

「その氣違を外へ出してはならぬぞ」

と、國王は、さう、嚴命しました。で、利勇を始め多くの廷臣が、入替り立替ッて、王女に向ひました。しかし、王女は、不思議にも、勇猛な戰士に變ッてゐました。亂闘、また亂闘——毛鼎國が亂刃のうち倒れて了ッても、王女は、あくまでも亂闘しました。

舜天丸が駈けつけた時、王城の門の扉が、ビタリと閉めてありました。いくら舜天丸でも、鐵の扉は打破ることは出來ません。そこで、高い扉を、猿のやうに攀上ッて、向へ、ヒラリと飛下りました——そ

討手の人數も、口々に、さう云ッて、標上がッて逃出しました。

五八

その頃、宮殿の方でも、恐ろしい劍の「大亂舞」が始マッてゐました。廷臣といふ廷臣は、劍を抜きつれて、喚き叫んで、暴狂ッてゐました。そして、そこには、多くの廷臣が血みどろになつて倒れてゐました。ある者は呻き、ある者は息が斷えて——そのなかに、毛鼎國が、むざんに體ぢふを刺されて、鮮血淋漓として倒れてゐました。

「ア、まだ、氣違女を討取らぬのか。はやくせえ、はやくせえ。王女だとして、容赦をすることはないぞ」と、國王は、さながら血に狂ッたやうになつて、いく度か叫びました。そして、眞ッ青になつて、ブル／＼慄へてゐました。

マッたく、王女は、今、氣が狂ッたやうになつてゐました。そして、不思議な「武力」を現はしてゐました。それが、曠雲の幻術で、玻璃鏡のなかに現はれ、姿と同じでした。

「ア、あの日本人……」

それと見て、廷臣のある者は、「あッ」と、驚いて逃出しました。

舜天丸は、宮殿の階を駈上がりました。と、隙を得て、階を駈下りようとした王女と、出會頭……

「オ、舜天丸……」

と、王女は、さながら、母が、我が子を呼びかけるやうに呼びかけました——王女が、どうして、舜天丸の名を知ッてゐるか不思議でした。

しかし、舜天丸は、格別、それを不思議に思ひませんでした。そして、いつも、幻に描いて見てゐる母の倅に、よく似た人だと思ひました——二人の瞳と瞳は、今、ビタリと合ッて、そこに、不思議な愛着の影が、からみ合ひました。

(つゞく)

五九

# えてるてる坊主の話



武野藤介  
神谷貴一畫

昔、昔、エデンと言ふ國がありました。  
花園のエデンと言ひ、葦の匂ふエデンと言ひ、紅  
雀の啼くエデンと言ひ傳へられてゐるのは、この國  
の美しさをうたつた讚め言葉です。お日様も、まだ  
このやうな美しい國を見たことがないと仰言つてゐ  
ます。年が年中、この國には、暑い夏もなければ、  
寒い冬もなく、寂しい秋もめつたに訪れては來ませ  
んでした。

エデンの國はいつも春でございました――  
國が春なら、そこに住む人の心も春のやうにおだ  
やかでした。この國には争ひごと一つ起らなかつた  
のです。王様はいつも人民達の仲のいゝお友達でし  
た。王子様は村の牧羊者の若者と一緒に角笛を吹く  
のがお好きでした。たいしたお金持もゐなかつたか  
はりに、乞食する人もゐなかつた程、みんな満足し  
て幸福に暮してゐました。

が、一つこの國に大きな不幸があつたのです。そ  
の不幸は、きまつて、十三年目毎にやつて來ました。



その年に限つて、ひんやりした秋の風が北の方から  
吹いて來るのです。と、今まで咲き誇つてゐる葦の

花も散つてしまひ、今まで楽しさうに唄つてゐた紅  
雀も、森の中へその姿をかくしてしまふのでした。  
そして、日一日と、木の葉は黄色になつて……黄色  
になつたかと思ふと、みんな、南の方へ飛んでゆく  
のです……  
「木の葉は何處へ飛んでゆくんだらう？」  
子供達は、毎日、毎日、母親にさう言つて聞くの  
です。が、南の方へ飛んでゆく木の葉が、一體、何  
處へ行くのか、誰も知つてはゐなかつたのでした。  
「秋が來た、秋が來た！」  
母親達は空を見上げて、しつかりと子供を抱きし  
めて、悲しさうに咳くばかりでした。  
花園のエデンは見る影もなく寂しくなつてゆきま  
した。王様のお城の窓のガラス戸は固く閉ざれて、  
黒いカーテンが深く垂れさがつてゐます。何處の家  
からも笑ひ聲一つ聞えては來ません。皆な、死んで  
ゐるやうに静かで、たゞ、木の葉を吹き飛ばす風の

音ばかりでした。

風は、幾日もく吹き続きます。エデンには一枚の木の葉もなく、みな枯木のやうになつてしまひます。と、風は罷んで、今度は雨が降り出すのです。その雨がまた、幾日もく降り續くのです。

——そしてしまひには洪水になるのです。

エデンの園はすつかり海のやうになつてしまひます。人々は、お城の丘へ集まつて、そこで、また春の來るのを待つのでした。

この洪水の時に、人々が澤山死ぬのです。犬も鶏も死ぬのです。罪のない人々や、犬や鶏の死ぬるこんな不幸が、さうして十三年目にやつて來ました。王様は神々にお祈りをなさいました。が、矢張り十三年たつと、また、この洪水の不幸が起つて來るのです。

或る秋のことでした——王様はお庭にお立ちになつて、悲しさに、黄色になつて南の方へ飛んでゆ

く木の葉を眺めてをられました。

「もう、おほかた、黄色な葉もなくつた。明日あたりから雨になるだらう。罪のないわしの友達が生んでゆく」

王様は獨言を仰言つて、つひ、ほろりと一滴涙をお落しになりました。涙は王様の頬を流れて足もとの黒い土の上に落ちました。恰度、その足もとに小さい一本の南天の樹があつたのです。黒い土の上に落ちた涙は、地にしみとほつて、南天の樹の根を濡らしました。……と、南天の樹は、たちまち、十五六の可愛いらしい女の兒になつてしまひました。緑の着物を着て、恰度、南天の、あの小さい赤い實のやうなものを、澤山着物へちりばめてゐるのです。

「お前は誰だ？」

王様は吃驚りしておたづねになりました。

「私は南天の精でございます。王様が人民達の不幸をお歎きになつて、ほろりとひとしづく、お落しに

なつた涙が、私の足を濡らしました」

かう言つてその女の兒も泣くのでした。

「お前も悲しいのか。お前ははどうして泣くのか」と、王様は重ねてお訊ねになりました。

「私、人形さんが欲しいのでございます。王様の一番末のお姫様が持つていらつしやる、あの人形さんが欲しいのでございます」

「だがお前、あの人形は姫が着物よりもだじにしてゐるものだから、お前にあげることは出来なす」

「その人形さんが欲しいのでございます」



南天の精は、さう言つて、また、しみくと泣きました。あはれみ深い王様は、この女の兒を可哀さ

うにお思ひになつたのです。

「なら、一つ姫に私から頼んで見よう」



丸太の舟から大汽船まで (人の智慧が  
どう進んだか)



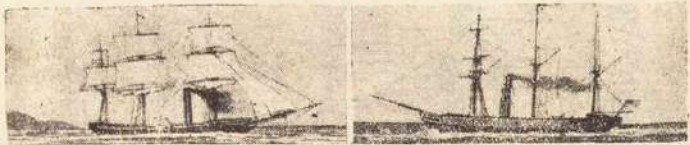
1. 一本の丸太 2. 丸太を組みあはせる 3. 初めて丸木舟を造る



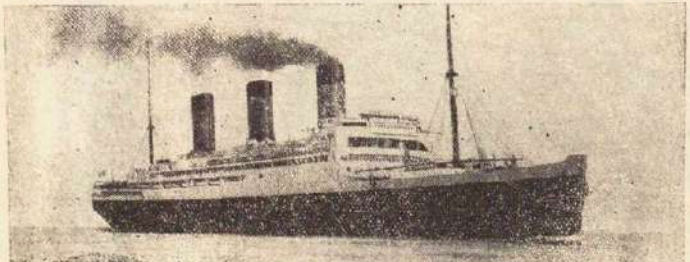
4. 柳の枝のボート 5. 大勢のれる木のボート 6. 大進歩 帆の發明



7. コロンブスの船(1492年) 8. ヘルソンの軍艦(1800年) 9. 最初の汽船(1802年)



10. 水車のついた汽船で初めて大西洋を渡る 11. 水車のかはりに推進器を使ふ



12. 五萬六千トンの浮城のやうな大汽船。石炭のかはりに重油をたく

大電

と言つて、王様はそのお庭へ、一番末のお姫様をお呼びになりました。お姫様は夜お休みになる時もお放しにならないそのだいな人形を抱きしめて、父君の所へいらつしたのです。

「ね、姫や、この可愛い子供が、お前のその人形が欲しいと言ふんだけど…… どうだね、姫や、可哀さうぢやないか」

このお姫様も、また、王様に似て、あはれみ深い方でしたから、すぐとその人形をこの女の目にやつておしまひになつたのでした。

——その翌朝、いよく、黄色な木の葉もなくなつて、風も罷み、今日から雨が降るのだと思つてゐたのに、不思議と、一滴の雨も落ちなかつたのです。王様はお姫様と一緒に昨日のお庭へお立ちになりました。そこにはもう昨日の女の兒もゐませんでした。南天の樹の枝には昨日の人形がつりさげてありました。そして南の方から、暖い風が吹いて來ました。

そして見る／＼うちに、エデンの園には、また、春が廻つて來たのでした。華の花も匂ひ出しました。紅雀も啼き出しました。

それから十三年、エデンは、いつも春の花園でした。

人民達はお姫様のおやさしいお心を悦んで、その時、立派な／＼人形さんを贈り物にいたしました。

この國は今も春です。十三年目に秋の風が吹き出すと、急いで、人々は南天の樹の枝に人形をつるすのでした。それは雨の降らないおまじないでした。

今日、皆様が「てるてる坊主」と言つてゐるのは、このエデンの國に始まつた事なのです。たまの日曜を戶外で面白く遊ばうとなさる時や、楽しい遠足などの、その前の夜には、忘れないやうに、人形を南天の樹の枝につりさげて下さい。さうすると、その翌日は、きつといゝお天気なのでございます。雨が降らないのでございます。

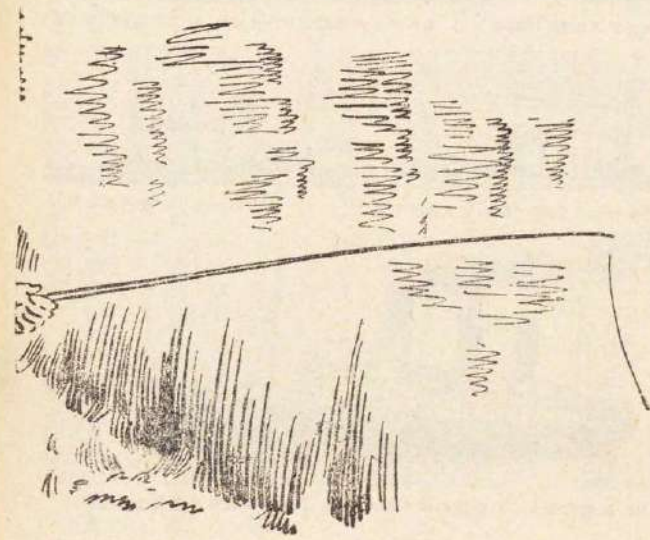
(を は り)

大電

川べりの春

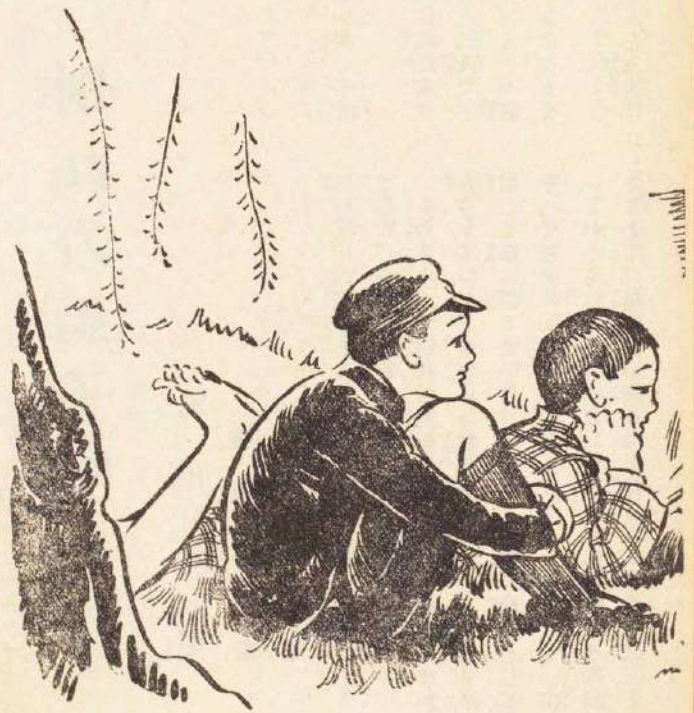
達崎 龍

はこべに白い  
花が咲く  
すこしくづれた  
川べりの  
青いタナゴは  
芹のかけ



ちきまた見えなく  
なるころは

たゞ陽炎が  
ゆらゆらと  
水にうつつて  
をりました



寺内萬治郎畫



## 別れの馬子唄

西川喜平  
羽鳥古山畫

六八

馬子の三吉は、年が十三で、可愛らしい男の子でした。

お父さんは、伊達の興作と云つて、元は立派な武士でしたが、浪人してお母さんと、三吉と三人で、楽しくくらしつてゐましたのも僅の間で、だん／＼貧乏になつて、その日のくらしにも困るやうになりました。

それで、相談の上お母さんは、お父さんと三吉に

云ひかかせて、泣く／＼家を出て行つたのでした。

これは三吉が、お父さんの興作から、後で聞かされたお話でした。

それから三吉は子供心にも、

「なんでお母さんは、お父さんとわたしを置いて行つてしまつたの。」と、お父さんになづねる度に、

お父さんは、

「お母さんのゐなくなつたのは、お父さんや、お前の身のためなのだ。」と云つては、ホロ／＼と涙をこぼされるので、三吉も悲しくなつて、だまつてしまふのでした。

それで三吉は、お母さんのことをあきらめて、おとなしくお父さんと、二人でくらしつてゐました。

お父さんは、それから馬子になつて、旅人を馬に乗せたり馬で荷物を運んだりして稼いでゐました。

その中に、三吉も十三になつたので、お父さんが稼ぎに出る時に、一緒について歩いたので、だんだ

別れて、西國のあるお大名のお姫さまの乳母に上りました。それは三吉の五つの年でした。

お母さんは、別れて乳母に上る時に、お姫さまが大きくなつて、自分にお暇が出るまでは、何年も辛抱して家へ歸るまいと、お父さんと堅い約束をして、そして可愛い、三吉を抱き上げて、

「これからは、お父さんに世話をやかせぬやうにおとなしく、母さんの歸るのを待つておくれよ。」と

ん馴れて、お父さんと同じやうに馬子になりました。

この小さい馬子の三吉は、方々で三吉／＼と可愛がられて、毎日ごちさうになつたり、いろ／＼の物をもらふので、今では稼ぎに出るのが楽しみに、面白くその日／＼をおくりました。

時は丁度春になつて、川の氷もとけて、梅の花が咲く頃になりました。

ある日、お大名のお姫さまが、大勢のお供をつれて、この宿の本陣（お大名の泊る宿屋）へお泊りになりました。

その人達の本陣へお着きになる時に、三吉は、十ばかりになる美しいお姫さまと、その側についてゐる、乳母らしい人を見ると、フト自分の五つの時に別れた、お母さんのことを思ひ出しました。

「お母さんの顔はよく覚えてゐないが、お大名のお姫さまへ、乳母に上つたと聞いてゐるから、やつぱりあ

六九

のやうな姿をしてゐるのだらう、して見ると、もしやあの人がお母さんではないかな。」と思ひました。

サアから思ひますと、たまりません。

「ほんたうのお母さんかどうか、お父さんへ知らせて。」と思ひましたが、あいにくお父さんは、荷物を馬へつけて、遠くへ雇はれて行つたので、二三日は歸りません。三吉は獨りで、そのことばかり思つて夜を明かしました。

翌る朝はお姫さまがお立ちになると云ふので、馬子の三吉も雇はれたのを幸に、昨日逢つた、お母さんらしい人のそばへ行つて、よく顔を見たいと、早くから本陣へ来ました。

お姫さまがお立ちになるので、本陣の内はゴタゴタして、お供の大勢は支度をしてゐると、お姫さまが急に、

「これから江戸へ行くのはいやぢや、京へ歸りたい」と云ひ出しました。

「これは面白さうなものぢや、お姫さまも御覽遊ばせ、サアこの双六をして、お目にかけてや。」と云ひました。

三吉は、また懐から一とつのサイを出して、双六の上へ投げますと、サイはコロ／＼と轉げて、一とつが出ました。

また投げると、六つが出ました。



口々に、

「マアこの繪にある富士のお山は、眞つ

お供の人達は、ビツクリして、途中でこんなことを云ひ出されては大變と、かはる／＼、お姫さまをなだめても、すかしても、中々聞き入れません。はてはどうしても、京へ歸る／＼と泣き出しました。

お供の人達の困つてゐる所へ、ヒョックリ、顔を出したのは、馬子の三吉でした。

三吉は、お母さんらしい人の顔を見に、本陣の庭先へ、オツ／＼入つて來たのですが、泣いてゐるお姫さまと、こまつてゐるお供の人達のやうすに、何事が起つたのかと、縁先へ近よりました。

すると乳母は、三吉を見つけて、

「オ、可愛らしい馬子の子がまゐりました。その子や、面白い唄でも唄ふておき／＼に入れや。」と云ひました。

三吉は、丁度懐に道中双六を持つてゐたので、それを出して縁先へひろげました。

お供の女中達は、三吉の來たのを幸と、

それから、投げる度に、二つ、五つ、三つ四つと出ました。

三吉は手を拍つて、

「あ、もうお富士さまの畫のある所へきました。もうぢきに吾妻の花のお江戸へ着きます」と云ひますと、女中達は

白で綺麗なこと。またお江戸の日本橋の見事なことは、ソレ／＼お江戸のお花見は、大さう賑はふて面白いの話、早く、お江戸のお花見をしたいものぢや。」とはやし立てられて、お姫さまも、

「富士のお山と、江戸のお花見を見たい。」と、さげんがなをつたので、お供の大勢は喜んで、

「ごさげんがなをつた、サア／＼早くお支度。」と、お姫さまをつれて、奥へ行きました。

あとに一人残つた三吉は、お母さんらしい乳母のもう一度出た時に、お母さんと呼んで見ようか、もし間違ひで叱られては大へんと、考へてゐる所へ、丁度乳母が一人で出て來ました。

「オ、馬子の子や、よくお姫さまの、ごさげんをなをしてくれた、ごほうびを上げやう。」と美しいお菓子を紙にのせてくれました。

三吉は、  
「お母さんと一言呼びたいが。」と、モチ／＼し

てゐますと、  
「可愛らしい子ぢや、歳はいくつぢや。」と訊ねられ、

「ハイ十三になります。」と答へました。

乳母は、三吉の顔をデツとながめてゐましたが、椽端へ出て、

「お前の名は何と云ふぞ。」

「ハイ三吉と申す。」

「エツ三吉。」ハツト驚いた乳母は、三吉の手を取り引寄せましたが、涙をハラ／＼とこぼしたのが、三吉の顔にかゝりました。

三吉も、

「お母さん。」と呼んで膝へよりますと、乳母は三吉の手を放して、立ち上つて、四邊を見廻しました。

そして目をつむつて、デツト考へてゐましたが、

「コリヤ、お母さんなど、そそを云つてはなりません。わたしはお姫さまの乳母、お前は馬子の子

ぢや。」

三吉は思はずカツとなつて、

「お姫さまの乳母でも、お母さんはお母さん、馬子の子でも子は子ぢや。」と母の顔を見上げて云ひました。

乳母は、三吉の背へ手をかけて、抱くやうにして小聲になり、

「お姫さまを江戸へおつれ申して、歸りには母さんと云ふてやる。それまでは、お大名のお姫さまの乳母馬子の子と親子の名のりは出來ぬ。」と云ひました

が、  
「お父さんはおかはりないか、何所にかいでになるぞ。」とやさしく訊ねますと、三吉は、

「お父さんは、たつしやでわたしと一所にゐるけれど、おさんと名のらぬ人に逢はすことは出來ぬのぢや。」

これを聞いた乳母はうなづいて、

「お目にかゝる時がくれば、わたしから逢ひにくる。

おかはりもないと聞いて安心した。このごほうびのお菓子はお前に。」

と云つて、懐からピカ／＼光る小判(昔の金貨)を出して、お菓子と一所に紙に包み、渡さうとしますと、三吉はカブリを振つて、

「イヤ／＼お母さんでもない人に、物をもらうのはいやぢや。」

と云ひながら立ち上つてスゴ／＼と、庭から外へ出て行く、後姿を見送つた乳母は、兩袖を顔にあって、そのまゝ其所へ泣き伏しました。

遠くで三吉の唄ふ馬子唄が聞えて來ました。

「坂はてる／＼、鈴鹿はくもる、あいの、あいの土山雨がふる。」

(をはり)

# 白鳥姫物語

高橋 里江  
岩岡とも枝畫



## 一、白鳥姫の婚約

ながい間、エスピンは、この可愛らしい光景に見惚れて居ました。もし、聲でも立てたら、可愛い鳥達は、驚いてにげてしまふだらうと思つて、息を殺して、かくれておました。が、娘達は、踊りに夢中

しまつたのは？」

「あゝ、これですか？」

エスピンは、すまして、くもの巢のやうな白衣を振つて見せました。

「それは、それです。後生ですから返して下さい。それがなければ、あゝ！ 妾達はどうすればいいのでせう！」

「どんなお神でもしますわ！ その着物さへ返して下されば、金貨を山程あげますわ！」

口々に、娘達は頼みました。かあいさうに、眼に一杯涙をためて、一生懸命におじぎをします。

のそり／＼と木から下りて来たエスピンは、それでも、白衣は返さうとせずに、云ひました。

「嫌だ。だつて、これを返せば、あなた達は、また飛んで行つてしまふんでせう。嫌だ嫌だ！ いつまでも此處にゐて下さい！」

「そんなことは出来ませんわ！ どうか、返して下さい

になつて、だん／＼木の根元を離れて行きましたので、エスピンは、そり／＼と木を下りて、根元へ脱ぎすて、あつた、石の上のペールを掴みとると、また、氣づかれないやうに、そり／＼とよち登つて、知らん顔をして居ました。三人の白鳥姫は、自分の着物を盗まれたとは知りませんから、それから二時間も三時間も、夜明け近くなるまで、歌ひつゞけ、踊りつゞけておました。

やがて、娘達は、踊りつかれて、木の根元へ歸つて來ました。そして、着物を着ようとして、初めて驚きました。大變です！ 着物は何時の間にかなくなつておました。娘達は氣狂の様になつて、其處ら中を探し初めました。どこにもありません。見ると樹の上に、若い男の人が、ちよこんと坐つて下を見て居ます。

「あッ、あの人です。きつとあの人です。」

「返して下さい。貴方でせう。妾達の着物を取つて

「さう！」

「御願ひです！」

「後生です！」

「ちや返します。その代り、誰か一人残つて下さい。そして僕の奥さんになつて下さい。」

「駄目だわ！ そんな事！」

最初の娘が、怒つたやうに云ひました。

「妾もいやよ！」

その次の娘も云ひました。併し、三番目の、一番美しい、一番小さい娘さんが云ひました。

「いゝわ、妾、あなたの奥様になるわ。だから、一まづ着物は返して頂戴！」

「嘘だ！ そんな事を云つて飛んで行つてしまふんだらう！」

「いゝえ、妾達は、決して嘘なんか云はないのです。でも、今日は、一度歸らなければなりません。來年の今日、妾はさつと、あなたの所へ來ます。それ迄

エスピンは心配して、泣き出しさうな顔になりました。

「あなたの登つて居た、樫の木の小枝を折つて、この畑にある、一番大きな石を叩いて御覽なさい。」「スウデルバンドの御姫様、レナが叩くと云ひました。」さう云つて叩いて御覽なさい。石が動いて、その下にはお父様の寶物倉がありますから。お金も、欲しいものも、何も彼も其處にあります。用がすんだら同じ事を云つて、また石を叩くのよ。そしたら、石が動いて、また蓋になるのですから。支度をして置いて頂戴！ お客様もうんと呼んでね。けれど、けれど、この國の今の王様だけは駄目よ！ では、その時まで、さようなら！」

自分で、レナと呼んだ、白鳥姫は、さう云つて、蜘蛛の巣の様な白衣を被りました。衣は、見る／＼大きく擴がつて、白鳥の羽根の様に翼を張りました。三人の娘達は、さつと舞ひ上ると、やがて、遠く遠く

に、妾達の結婚式の支度をして置いて下さい。」白鳥姫はさう云つて、エスピンの手を取りました。そして、自分の、可愛い指から外した金の指輪を、エスピンの指にはめて呉れました。

「これが證據です。妾達三人は、姉妹なの、そしてこの國の王様の姫だつたの。ずつと、ずつと以前、悪い魔法つかひの女に、お城から掠はれて行つたのよ。魔女は、妾達をとりこにして、此處から、一萬里も離れた所にかくしてあるの。年に一度、六月廿四日の晩だけ、かうして、妾達は、昔の家へ歸つてくる事が出来るのよ！」

「昔の家つて？」

「え、こゝに、この畑に、妾達のお父様のお城が建つてゐたのよ。ですから、あなたも、來年までに此處へ、立派なお城を建て、妾の來るのを待つて下さい。」

「お城つて？ 僕に建てられるか知ら？」

く北の空へ飛びつゞけて、間もなく見えなくなつてしまひました。

それと、同時に、夜が明けて、朝の光が、さつと東の空から流れ初めました。

エスピンは、夢心地で、長い間其處に立つて、もう見えなくなつた北の空を見送り乍ら、見たり聞いたりした事を、何度も／＼も心の中で繰り返してゐました。やがて身を起すと、樫の小枝を折つて、根元の大石を叩きながら云ひました。

「スウデルバンドの御姫様、レナが叩くと云ひました！」

忽ち、大きな石が、ゴロリと右に轉がりました。その下の寶物倉には、金銀財寶、凡そ王様の暮しに要る程のものは、何も彼も備つて、まばゆいばかりに輝いて見えました。

エスピンは、持てるだけの金貨と銀貨とを取り出して置いて、また「スウデルバンドのお姫様、レ

ナが叩けと云ひました」と云ひながら、石を叩きました。すると、大石は、また元の所に轉がつて、すつかり寶物倉をかくしてしまひました。

エスピンが、家へ歸つたのを見て、誰も、エスピンだとは思ひませんでした。それ程エスピンは、以前とは變つてゐたのでした。眠さうな、夢を見て居るやうだつた眼は、華々しく、賢さうに輝いて、房やかな金髪が、長々と、肩の所まで垂れ下り、なんとも云へない程上品で、氣高く見えたのです。

「お父さん、やうやく分りましたよ。やはり、あの煙は麥や麻を造る所ではなかつたのです。あすこへは、立派なお城を建てなければならなかつたのです。そして、僕は來年の六月、夏至の日は、その城で結婚式をあげるのです！」

お父様も見さん達もそれを聞いて、エスピンは氣狂になつたのだと思ひました。併し、エスピンが持つて來た金貨と銀貨とを見て、



「ほんとうだ！ これなら、なんでも思ふ事がやれる筈だ！」

と云つて、驚きました。

早速、エスピンは、大工や、石屋や、彫刻師や美術師や、ありとあらゆる職人達を呼び集め、それを支配する人を決めて、城を建てにかゝりました。金槌の音、鑿の音、勇ましい人足のかげ聲、地車の響、夜も晝も、休みなしに人々は働き通して、六月に入る前に、立派なお城が出来上りました。白い壁、金色の尖塔、三重の風見、大理石の彫刻、緑の庭！ エスピンの友人は云ふに及ばず、村中の人々は、一人残らず招待されて、不思議な婚禮の祝宴に、つらなる事になりました。

## 二、王様に知れる

いふまでもない事ですが、この城の建築の事や、やがて、この城で催される筈の、盛大な婚禮式のう

わさは國中へ擴まつて、人々は、明けても、暮れても、その話にばかりふけてゐました。わけても、その、白鳥みたいな花嫁さんのうわさが大變でした。誰一人として、顔を見た者もなければ、名前だつて知らないのですから、いろ／＼な想像をして、さわぐのも、無理のない事でした。

ある日、その國の王様が、お城を出て、狩りに出た序に、評判の高いお城の前を御通りになつて、エスピンのお父さんを、御呼び出しになりました。百姓は、恐れ入つて、地面へすれ／＼になる程丁寧に帽子を取つて御辭儀をしました。王様は、ニコ／＼と御笑ひになつて、

「いや、其方の息子の話は、衆々聞いて居るぞ。芽出たい／＼。俺も是非、婚禮の席につらなつて、花嫁花婿を見たいものぢや」

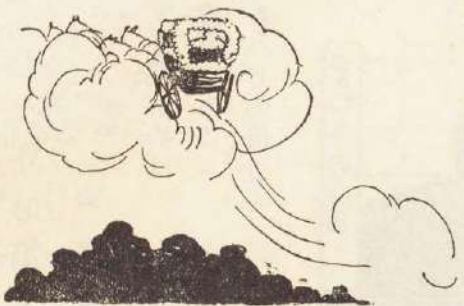
とおつしやいました。で、お父さんの百姓は、王様が、御自身で御出で下さるのがほんたうなら、一





家族にとつて、こんな名譽な事はないと思つて、王様を御招きしました。王様は、よろこんで、きつと来ると云つて、御自分の城へ歸つて行きました。とうとう結婚式の當日になりましたと、王様を初めとして、招待を受けた國中の御客様達が、續々とつかけて来ました。併し、いくら待つても待つても、花嫁の白鳥は来ませんので、そろそろお客様達は、悪口を云ひ初めました。

「へへつ！ 花嫁さんは天から降つて来るのかな」  
「さうさ、大方そんな事だらう。今に見てろ、彼奴の帽子の中から、みつ蜂でも飛び出すといふ仕懸だらう」  
「なんだ、蜜蜂の花嫁は大笑ひだ！」  
口の悪い御客さん達は、しきりなしにしゃべつて居ます。併し、エスピンは、一ことも、口をきかしてませんでした。



間もなく、北の空から、眞白なものが近づいて来るのが見えました。さうして、またいゝ間に、五匹の白い馬に引かせた、黄金造りの、きらびやかな花車が、お城の前へ、舞ひ下りて来ました。エスピンは喜んで迎へて、自分で、花車の扉を開くと、中には、まぎれもないあつた美しい白鳥姫が、花嫁姿で坐つてゐました。けれども、姫の、最初に云つた言葉は、意外にも、  
「王様がゐらして下さう！」  
といふ、問ひだつたのです。  
「来てます。けれど」

ど僕の方でお招きしたではありません。王様が御自分で御ゐでになつたのです」  
「どちらだつて同じ事です。若しも妾が、けふこの花嫁姿で、このお城の中へ入つたら、花婿さんには王様になるでせう。そして、あなたは、殺されて終ひます。私はあなたのものですから、王様の花嫁さんにはなれません。仕方がありませんから、今度はあなたが私の所へ来て下さい。一年以内に、きつと私を訪ねて来て下さい。一年過ぎてしまつては、来て下さつても、もう遅すぎて、なんの役にも立ちません。きつとですよ。私は、こゝから、一萬里離れたお城の中に住んでゐます。お城は、お日様からは北の方、お月様からは西の方、そして世界のまん真中に建つてゐます」  
なんといふ急がしい花嫁さんでせう。これだけ云つて終ふと同時に、五匹の白い馬は、風の様に花車を引いて、大空へ舞ひ上りました。(つづく)

まつりの笛(推薦)

大阪 圓山 夢路

やき栗かめば  
故郷にゐる  
あろりの母さん



まつりの笛

おもひます

ひとり留守居の

炬燵なか

つけたばかりの

まめランブ

遠くで しば笛

聞いてると

まつりの笛を

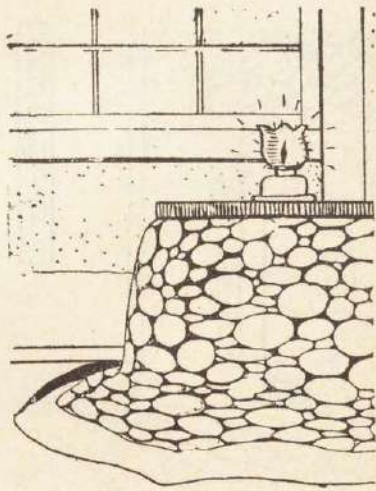
さくやうだ

お山のゆきが

とけたなら

父さん墓しよへ

詣りましよ



だらだら坂(推薦)

東京 狩野 忠信

だらだら坂に  
子牛が来たよ  
夕日がつめたい

チンミリ チンミリ

だらだら坂は

お道が悪い

車に泥が

ポツトリ ポツトリ

二月のばんげ(推薦)

大阪 古村 徹三

二月の ばんげの

えんがわは

すあしに ひいやり

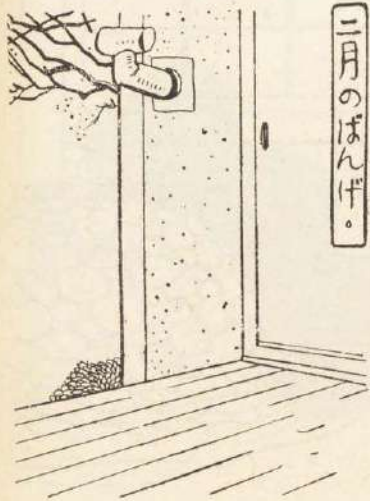
つめたいな

ゆあがり おかほは

ほんのりと  
ねえさん おかみを  
すいてます

二月の ばんげは  
うすさむく

二月のばんげ。



はるが きたよな  
こぬやうな

露 草 (推 薦)

大 阪 中 村 正 義

つゆ草の花を  
びんに活けました  
美しいでせう  
お姉さま  
川のそばに  
咲いてゐるのを  
取つて来て  
活けたのですよ  
お姉さま



小 湊 誕 生 寺 (推 薦)

茨 城 内 田 み わ 路

どんづく どんづく  
どんどんづく  
こゝは日蓮誕生地

波もどんどと  
よせてゐる

どんづく どんづく

どんどんづく

こゝは小湊誕生寺

風もどんどと

吹いてゐる

どんづく どんづく

どんどんづく

日蓮行者が五六人

白い姿で

歩いてる



# 大空高く

權藤 はな代  
寺内萬治郎畫

寄せ算や、引き算のところは造作もなく、ずんずん進みましたが、割り算のところへ来てから、なかなか、はかどりません。びつたり割り切れてしまはねばならないのが、余りが出来たりして――。

「あ、あ――」

文夫さんは、大きなお口を開けて、欠伸をしました。鉛筆を右手に持ったまゝ、両手を高く伸ばして。其の時、突然、後から呼ぶものがありました。誰も

わない筈ですのに。

「坊ちゃん！」

「誰だい！」

文夫さんが、振り向いて見ますと、本箱の横に置いてある風が笑ひながら、

「僕です、坊ちゃん、風です。」

と云ひました。何だ、風の奴、又人を誘ひ出さうと言ふんだらう――と思ふと、文夫さんは、にっこりともせず机に向き直つて算術をやり出しました

「坊ちゃん！ 今日はいゝお天気ね。」

「……………」

「坊ちゃん！ 今日はいゝお天気ですね、そよ〜と風が吹いて――」

「そんなこと云はなくたつて分つてるよ。」

文夫さんは、俯向いたまゝで、うるささうに云ひました。

「そよ〜と、いゝ具合に風が吹いてる。……坊ち

ちゃん！ 今日なら僕うんと高く上るんだけどなあ。」

文夫さんは、返事をしようともせず、机にのしかかつて、鉛筆を動かしてゐます。風は広い青い空を夢見ながら、恨めしさうに文夫さんの後姿を眺めて居ねばなりません。

間もなく、表の通りの方から「グーン〜」と風の唸りが響いて参りました。風は、自分がお空に上つた時のやうな愉快な氣持になつて、思はず小躍をしました。ばさばさッ！ と音がしました。文夫さんは俯向いたまゝ振り向きませんでした。風はすかさず、

「坊ちゃん!!」と力をこめて叫びました。その眼は輝いてゐました。

「坊ちゃん！ 外へ行きませう。」

續けて早口にかう云ひました。少し甘へた調子で、そして文夫さんの心を見ぬかうとするやうに、じつと顔をみつめました。

「未だ宿題の割算が、みんな出来てしまはないんだ

よ、遊びになんぞ行くもんか。」

「坊ちやんは朝から算術ばかりしてるんでせう。」

「さうさ、それでもしきれないんだよ。割算は六ヶ敷いからな。」

文夫さんは机に向き直つて、投げ捨てるやうな調子で、かう云ひました。

「ちつとも坊ちやんは休まないんだもの、六ヶ敷いさ、僕と一緒に表へ出て、あの青空の下で少し遊んで来れば、そんな割算位、とん／＼としてしまへるのに。横道の方で風上げをしてゐるのは、皆坊ちやんのお友達でせう。障子を開けて御覧なさいよ、きつと三ちやん達ですよ。」

文夫さんは、黙つて聞いてゐましたが、成程、風の云ふこともあたつてる——と思ひましたので、障子を開けて見ました。

ぽか／＼と暖かい日がお庭にも、縁にも一杯あたつてゐます。前のお家の、木小屋の向ふの空に、

春とは云つても、まだ／＼風は暖かではありません。それが文夫さんには何とも云へない肌ざはりです。今造室の中にはかりゐて、のぼせてゐましたか



ら。文夫さんは風に向つて、お顔や、胸のあたりを存分吹かせながら歩きました。そして道幅が少し狭くなつたところで止まりました。風に背を向けて、糸を繰りながら云ひました。

「さあ、上るんだよ。」

さつさから上りたくつて、長い足をひらひら

大きいのと、小さいのと、二つの風が上つてゐます。

「随分高く上つてるな——。」

獨り言を云ひながら、文夫さんが仰ぎ見てゐますと、堪らなくなつた風は、ばさばさばさッ！と壁の上を躍りながら、座敷の真中まで出て来ました。障子が開いて、風が吹き込むのですもの、どうしてじつとして居られませう。文夫さんは、それを見ると、障子を閉めて立ち上りました。

「一寸の間、遊んで来よう。」

「え！一寸の間？嬉しい／＼、坊ちやん！僕

誰よりも一番高く、雲の上まで上る!!」

長い足を、ばさ／＼言はせて、喜んでゐる風を抱へて、文夫さんは外に出ました。そして、みんなの居る表へは出ず、お家の裏から、ずつと遠くの山の麓まで續いてゐる畑の中の道に出ました。道傍の芝生は未だ枯れ葉ですが、畑の小麥は青々として、そよ風に頭をそよがせてゐます。

風に舞はせてゐた風は、糸を繰る文夫さんの手に、「もつと早く、もつと早く」と催促しながら上ります。何度も／＼宙返りをして、見る見るうちに、一

本杉の頭より高く上りました。

「坊ちやん、愉快々々、もつと糸を繰つて下さい。もつと／＼、そしてね、僕が遠くのいろんな様子を話しますから、坊ちやんは、その糸篋を耳につけてゐて下さい。さうしないとよく聞えませんから……」

さう云ふ風の聲は、かなり小さく、丁度お電話のやうに聞えました。

「よし、わかつた。」

文夫さんは、糸に口がさはるやうにして云ひました。風はぐんぐん糸を引つ張ります。糸篋は大忙しで廻されます。とうとう糸のありつたけを繰りほどいてしまひました。文夫さんは、篋に結びついてゐる糸のところを耳につけました。

「よし、坊ちゃん、電話ですよ。」

文夫さんは、高いお空の風を仰ぎ見ながら答へました。

「もし、横道で風上げしてるのはね、三ちゃんに、正ちゃん。僕の方がずつと高いところにあるの。こんな高いところは少し寒いですよ。でも、そこらがよく見えて、嬉しくて何ともないの。」

「學校は見える？」

いに見えるの。だんだんこつちへ来るやうよ。もし坊ちゃん、聞えるの？」

風の話は、風の具合で、小さくなり、大きくなりして聞えて来ます。

「聞えるさ、よく聞えるよ。とても聞いて、愉快だ。今度は八幡様のお森の方を御覧よ。鳥居の下で誰か遊んでゐるだらう。」

「い、え、あ！居る。何だか黒いものが動い



「學校？えい、見えます。庭の高いボブラの木に鳥がとまつてゐるのまで見えるんですよ。」

「庭に誰かゐる？」

「い、え誰も。教室の窓もみんな閉めてあるの。もし坊ちゃん。もつと遠くのお話をしますよ。村はづれの方の、あの水車小屋ね。あの後の橋の上を今、馬車が通つてゐるの。小さく、まるで玩具みた

てゐるの。遠いからよくわからないけど、社の中へ入つて行くやうです。もし坊ちゃん、もう少し高くして下さい。そしたらあの森の向ふまで見えますですよ。」

さう云ひながら、風はぐんぐん引つ張ります。

「駄目々々、いくら引つ張つたつて駄目だよ。もう糸がないんだから。」

「糸がないの？つまらないなあ。坊ちゃん、もう少しでいゝんだのに。じゃね、坊ちゃん、うんと背伸びをして、それから、手を伸せるだけ伸して見てね、坊ちゃん。」

文夫さんは、爪先で立つて、手も伸せるだけ高く伸しました。

「もう少し、もう少し。」

お空からは、まだ引つ張ります。

「もう伸びないよ。いくら引つ張つたつて、……もう下りて来い。又明日にしよう。」

文夫さんの云ふことなんか聞かないやうに、風はぐんぐん引つ張ります。その力の強いことぐんぐん。篋をとられてしまひさうです。両手で確つかり握つてゐますと、文夫さんの體が引き上げられさうになります。

「これぐんぐん、下りて来いつたら、僕の云ふことが聞えないのか。糸が切れてしまふよ。」

それでも風は尙も、ぐんぐん引つ張つて止めませぬ。

「あつー！」

大變です。文夫さんの足はとうとう地から離れてしまひました。いくら踏みつけようとしても、何のこたへもありませぬ。

「坊ちゃん！ 坊ちゃん！」

「下りて来いよつたら、危いぢやないか。」

文夫さんの聲は、とげとげして、目は怒つてゐました。

「坊ちゃん、大丈夫よ。しつかり握つていらつしやい。今ね、一寸上の方を見たら、白い雲の奥の方にそれはすばらしいものが見えたんですよ。」

文夫さんは何うすることも出来ません。風はと見ると、もう白い雲にとどくかと思はれる程上つてゐます。高くなるにつれて、文夫さんは、體が軽くなるのを感じました。風がぐんぐん、具合に吹いて、大變樂になりました。急に愉快になつて来ました。

「すばらしいものつて、どんなものなんだい、どこに見えてるのかえ？」

「上の方ですよ、高いぐんぐん、一寸見るとね、すぐに目が眩んでしまふんですよ。素的に光つてるんで――」

文夫さんは、前より以上の速さでぐんぐんと引上げられて行きます。風の云ふすばらしいものとは、一體どんなものなんでせう。

(をほり)



## 不思議な瓢箪

原田謙次

羽鳥古山書

ひかし、豊臣秀吉が、まだ藤吉郎といつて軽い身分であつた頃、なるべくよい大將の家來になつて身を立てようと思つて、あちこちと諸國を廻つて居つた時のことでした。

ある秋の夕ぐれ、藤吉郎はある村のはづれにやつて来ますと、多勢の人が集つて聲高に叫びながら何

か大騒ぎをして居りますので急いで近づいて見ますと、一人の支那人を取り巻いて、村の人達がいぢめてゐるのでした。

支那人は、しきりに何か辯解してゐるのですけれど、村の人達は一向にそれを聞きいれず、棒などを持つて突ついたり罵つたりしてゐました。

藤吉郎は、しばらく様子を見てゐましたが、その支那人を氣の毒に思ひまして、

「まあ皆さん待つて下さい。これは一體どうしたわけなんです。」と、たづねました。

すると、村の人達は交る／＼言ひますには、この支那人は日本國を滅ぼさうとする支那の問者に違ひない。實に不思議な術を知つてゐる。そして、その術の種はあの瓢箪にあるのだと、傍の松の木の枝に引懸つてゐる瓢箪を指しました。

それから、その瓢箪をだまして取つたために、もう術が使へなくなつたから、今みんな責めてゐるのだといふことでした。

藤吉郎は、亦、その支那人に向つてたづねました。支那人は藤吉郎に答へて言ひますには、自分は決して怪しいものではない。魔術を職業にしてゐるものである。此處で、皆に魔術を使つて見せた所が、はじめのうちは皆非常に感心して喝采してくれましたが、しまひには自分を疑ひはじめたらしいのである。自分はそれを氣づかなかつたので、魔術の種

不思議な瓢箪を一寸見せてくれと言はれるので何氣なく渡すと、すぐにそれを放り上げてあの松の木の枝に引懸けてしまつて、自分がもう術が使へなくなつたのを知つてこのやうにいちめてゐるのである。あの瓢箪さへ持つてゐたら、たとひ何百人に取り巻かれても恐るゝことはないけれども、あれを手放したのは一生の不覺であつた。

どうか後生だからあの瓢箪を自分に返してくれ。さうしたらどのやうな御禮でもするから、と言つて只管に頭をさげて藤吉郎に頼みました。

藤吉郎は、その瓢箪の魔術がどんなものか見たいものと考へましたので、村の人達をなだめて、『とにかく、その瓢箪の魔術を私も見たいと思ふ。その上で、この支那人が怪しいといふことがわかれば皆さんの力を借りないでも私一人でも彼を生け捕つて、お上へ差し出すから……』と、言ひすてゝ、皆が何か言はうとするのも待た





ずは、松の木へするくと登つて、枝に引懸つてゐる瓢箪を取つて、再び地面へ降りて來ました。

それを見た村の人達は、瓢箪を支那人に渡すまいと遮りましたが、もう、支那人の右の手の指先は瓢箪の口に觸れてゐました。

そして、その魔術師が何か呪文のやうなものを唱へますと、瓢箪に手を觸れてゐる藤吉郎と魔術師との身體がふわ／＼と空中に浮んで、松の木の頂上まで上りました。

これを見てゐた村の人達は、さあ大變だと大さわぎをはじめ、石を投げたりなんかするものさへありました。

そこで魔術師は、また、瓢箪の口を指先で二三度なでまはして、その瓢箪をうちふりますと、櫻の花びらのやうなものが、はら／＼とふりかゝつて、大さわぎをしてゐる人達の口の中に這入つて、息をつくことができなくなりました。

皆は、苦しくて上を見るのが出來ないで、うつむいて胸をなでながら、口の中から花びらを吐き出しますと、それが白米になつて地面に一ぱいになりました。

あまりの不思議さに、村の人達はもう魔術師を攻撃する勇氣もなく、恐る／＼松の木の上を見上げますと、瓢箪を持つた魔術師の姿は、いつのまにか、大黒様に變つてゐるのでした。

村の人達は思はず手を合せて拜みました。すると、大黒様はにっこりと笑つて、打手の小槌をうち振りうち振り、村の人達の頭の上に小判を蒔き散らしながら、そのまゝどこかへ見えなくなつてしまひました。

二

おどろき呆れてゐる村人達の頭の上に小判を蒔き散らして姿をかくした魔術師は、藤吉郎と一緒に、

誰も人のゐない所で一飛びに飛んだのでした。

そこで、魔術師は藤吉郎にむかひ、

『あなたのおかげでこの瓢箪を取り戻したために、私の命が助つたのですから、どうかして御禮をしたと思ひます。』と言ひました。

藤吉郎は『いや、御禮などはいりません。さつきから見せてもらつた不思議な魔術がこの上もないお禮である。』と言ひました。

けれども、魔術師は、しきりに首をひねつて考へてゐましたが、やがてぼんと膝をたゝいて、

『御禮にはこの瓢箪をあげませう。』と言ひました。

『いや／＼。』と藤吉郎は言ひました。『その瓢箪は君の大切なものだから、私にくれたら困るだらう。ほんとに御禮なんかいらぬさ。』と、ことわりました。

しかし魔術師は『あなたに瓢箪を取り返してもらはなかつたならば私の命はなかつたのです。さうしたら、この瓢箪は、誰もその使ひ方を知らないで、

たゞの瓢箪として残つたでせう。それは残念なことです。しかし、あなたに助けて頂きましたから、この瓢箪を御禮に差上げて、その術もお傳へいたしませう。』と言つて、瓢箪の口を三度なでまはして呪文を唱へますと眼の前の一つの立派な門が出來ました。

魔術師は、その門の扉に向つて何か念じますと、魔術師と藤吉郎との身體はもう門の中に這入つて居りました。門の中には、きれいな庭園と莊嚴な家とがありま

した。『此處は何處だらう?』と、藤吉郎は呟やましました。

『これはあなたがずつと後に住はれるお邸です。あなたはさつと偉い方におなりなさいませう。しかしその間にはいろ／＼と苦しいこともありませう。その艱難を切りぬけるために瓢箪の術が役に立つことがあるかも知れませぬ。』と、魔術師は言ひながら藤吉郎を導いてその家の中に入りました。

長い廊下を通つて、やがて、うす暗い室に入った。魔術師は、無言のまま、遠眼鏡のやうなものを藤吉郎に示しました。

その眼鏡は、筒になつてゐて、眞黒な箱に附着いてゐました。

藤吉郎は、魔術師の指圖に従つて、その眼鏡を覗



きますと、山や川や田や畑や、さうしたものゝ間に在る人家や城などが、空から見下ろしたかのやうに見え、それが少しづつ、動いて變つて行くのでした。

魔術師はそれからまた他の室に藤吉郎をつれて行つて、其處で、瓢箪の魔術を教へました。

そして、藤吉郎がその術を覚えてしまひますと、魔術師は眼を閉ちて、また咒文を唱へました。

すると、いつのまにか、家も庭もなくなつて、二人は物寂しい山あひの路に立つてゐました。

『それではこの瓢箪をお持ちなさい。私はこれでお別れします。』

と、言つたかと思ふと、魔術師は身を躍らして、瓢箪の口から中へ飛びこんでしまひました。

藤吉郎は驚いて、瓢箪の口から覗いて見ましたが中は眞暗で何にも見えませんでした。

それから、瓢箪を振つて見ましたけれども、何の音も聞えませんでした。



三

藤吉郎は、瓢箪の魔術を教はつてから、いろいろの場合にそれを應用して、いろいろの成功をして、だん／＼と出世をしました。

藤吉郎は戦場に出る時も、例の瓢箪を自分の腰に

く／＼つけ、澤山の瓢箪を集めた「千なり瓢箪」を馬印として出陣しました。

そして、敵は、この「千なり瓢箪」の馬印を見ると、恐れて逃げる位でありましたが、實はその恐ろしいのは馬印ではなくして、魔術の瓢箪であることは、誰も知りませんでした。

藤吉郎は、豊臣秀吉となつてから、前に瓢箪の術を授けられた時に見たのと同じやうな莊嚴な館に住みました。そして、あの時に見た不思議な遠眼鏡で日本國中の形勢を眺めて世を治め、また亂に備へました。

すべての人は、秀吉の偉いことを知つてゐますが不思議な瓢箪のことを知つてゐるものはありません。瓢箪の魔術のことを知つてゐるのは、このお話を書いた私と、これを讀まれる皆さんとよりほかにはないのです。だと言つて、私が、その魔術師ではありませぬよ。

(おしまひ)

## 前歯を賣る少女

大戸喜一郎

岩岡とも枝 畫



世界一金持の多いアメリカには、また世界一と言つて好い位の貧しい人たちがをります。その人々は寒い冬が来ても部屋を暖める薪さへ持つてをりません。それどころか暗いじめ／＼した地下室に、短くなつた燃え残りの蠟燭を唯一つの財産として、お腹をすかしきつて、大ぜいで住んでゐるのです。

千七百八十三年の冬のニューヨークは近年にない寒さでした。まい日のやうに風を交へた雪が降りつづいて、もはや永久に春が来ないのではあるまいかと思はれるほどでした。

さうした雪のふつてゐるある日のこと、汚い身な

りをした一人の少女が、ある齒醫者の戸口をコツコツと叩きました。けれども出て来た人は、少女があんまり汚い風をしてゐるものですから、ボタンと扉をしめようとした。すると少女はいきなり扉を押へて、

「お願いでございます。どうぞ先生にお目にかかりたいでございます。」と言ひました。

その人はちつと少女の顔を見つめてゐましたが、やがて途方もない大聲で笑ひ出しました。

「アハハハ。先生はお前のやうな乞食に、知り合ひはなす。」

さう言つて、トンと少女のからだを突き飛ばしました。が、その時、一人の立派な紳士が出て来て、

「これ／＼。そんな亂暴をするものではない。」  
危く倒れやうとする少女のからだを支へて、さう言ひました。そして少女に向つて、

「何かご用ですか。」と優しくたづねました。

「ハイ、少々お願いがありまして上がりました。」

少女はさう言ひました。

出て来た人は齒醫者さんでした。齒醫者さんは、この寒空に外套も着てゐず、まだ薄い汚い秋服を着て顔へてゐる少女を見ると、

「こゝでは寒くて話も出来ません。こちらへいらつしやい。」

さう言ひました。そして破れ靴を氣にして上がらうともしない少女を、手に取るやうにして一室へ連れ込みました。そこには暖爐があつて、赤々と火が燃えてゐました。

「さ、その椅子へ腰を下ろしなさい。して、ご用といふのは？」

「ハイ、實は先生のところで前歯を買つて下さるといふ事を聞いて上がりました。どうぞ幾本でもお買取り下さいませ。」

この齒醫者さんは「前歯を抜かしてくれれば、一



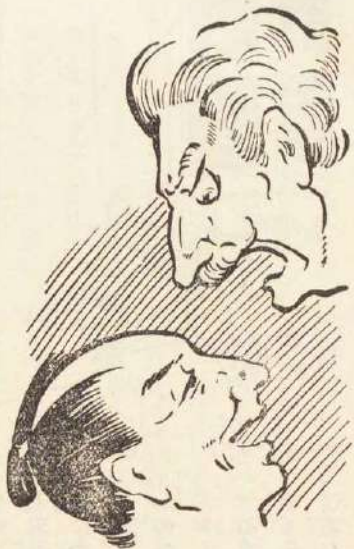
思ひ出したのは、お宅で前歯を買ふといふ事でした。私の歯は小さくて役に立たないかしれませんが、二つ合すれば一本の値打はあらうと思ひます。どうぞ買ひ取つて下さいませ。」少女は眼に涙さへ浮べて熱心に願ふのでした。その有様を見たお医者さんは、どんなに感心したか知れませんでした。「いや好く分りました。あなたの孝心の深いには、私まで思はずホロリとしました。よろしい。如何にも仰しやるとほり、歯を買ひませう。けど、あなたのやうな親孝行の方の歯をぬくことは、神さまの思召にも背くことです。さあこゝに十五圓あります。歯もいりません。早くお家へかへつてご両親に孝行して上げなさい。」少女は情深い歯医者さんの言葉を聞いて、どんなに喜んだか知れませんが、ちやうど夢でも見てゐるやうな氣持で、いくどもくお禮をいふと、外へ出ました。まだ雪は降りつづいてゐます。けれども少女はお金で、久しぶりに温かい焼き立てのパンが買へる、薪も買へる、さう思ふと寒いことなどは忘れて、吹雪の中を駆け出しました。(をはり)

本十五圓で買ひます。」といふ廣告をしたのでした。けれどもどうしてこんな小さな少女の歯を抜くことが出来ませう。少女はまだこれから大きくなつて立派な女の人にならなければならぬのです。その時前歯が一本なかつたら、少女の顔はどんなに醜いものとなるでせう。お医者さんはかう思ふと、氣の毒で抜くこともできませんでした。

「前歯を抜くといふことは、大人の人でさへ厭がることです。それを賣らうとするからには、きつとわけがあることとせう。差支へなかつたら聞かしてくれませんか。」

お医者さんの言葉を聞いた少女はちつと眼を伏せてゐましたが、静かに顔を上げて語り出しました。「私は決してむだ使ひするため、お金欲しいのではありません。家には年とつて働くことも出来ぬ父母がをります。私は一生懸命働いて、今までどうやら饑しい日に會はせずに来ました。けど私た

ち貧乏人にとつて恐ろしい冬が来ますと、私の仕事はめつさりへつてしまひました。一日お腹をすかして、何か仕事をさして下さい、さう言つてお願ひして歩いて、めつたに仕事を頂くことはできなくなつたのです。それにこの大雪では、外へ出る事もできません。もう私たちは、いく度ご飯を頂かないこととせう。今日も私はちつと火の氣のない部屋に坐つてをりました。窓枠には大分雪がつもつてをり、まだどん／＼降りつづいてゐます。お腹がすいて、口もきけなくなつた父さんお母さんは、干からびた手で身體を摩つて、いくらかでも暖かくならうとしてゐます。そして時々ホーツと溜息をつくののです。私はその溜息を聞くと、あゝと片れでもパンが差上げた、薪一本でもいいから焚いて、あのまつ赤な火にあたらして上げたい。そしたら二人はどんなに喜ぶだらう。さう思ふと、もう一刻も家にちつとしてゐることは出来なくなりました。その時ふと



## 笑ひがもと

田中宇一郎

寺内萬治郎畫

明治維新にならない少し前のことです。その頃、横濱にタフトと云ふ外國の商人が許されて、外國の珍しい品物を買る店を開きました。

タフトは日本に始めて来たのですから、どうも、日本語がよくわかりません。店に這入つて来るお客さんに、少し、こみいつたことを話されると、わからないので、全く、よはつてしまひました。

「どうも、これぢや、せつかく、店を出したのに、

良いお客をみんな、にがしてやるやうなものだ。さて、日本人を一人やとつて日本語を稽古しなけりやなるまい」と思つたので、さつそく、店の前に「日本人一名至急入用」と書いた紙を貼りつけました。それは日本語の稽古ばかりではない、店の仕事を手傳はせるにもいいと思ひましたので。

それから二日ばかりたつて、一人の日本人が、つかつかとタフトの店へはいつて来て云ふのには、

「私はお店の前の貼紙を見ておたづねいたしましたので。どうぞ、お氣に召したら、おかへ下さい」見ると、年のかつこう五十ばかりと思はれる、チヨンマゲ姿の立派な武士で、腰には、大小の刀二本までも差してゐました。

「おや、いかめしいサムライがやつて來かな。でもまじめさうな人間だから、かへてやらう」と、タフトは思ひました。

「なに、日本語を少し教へてもらひたいので。それに、忙しい時には、ちと、店の手傳もたのみたいんです」

「えい、おやさしい御用でございます。何なりとも、仰せつけて下さい」

「では、さつそく、今日から、願ひしますよ」

かたことまじりで、あやしい日本語のタフトと武士は、どうやら、言葉が通じたと思えて、こんなふちに相談がまとまりました。

いよいよ、その日からタフトにやとはれた武士はタフトの思つたとほり、たいへん、まじめにふるまひました。タフトも、ひどく喜びながら日本語を稽古したので、めき／＼と上手になりました。しかし悲しいことでも、腹を立て、怒ることでも、やさしく笑ひながら聞いたり話したりする武士を、タフトはへんに思ひました。

「日本人はみな、こんなものかしら。何でもかんでも、笑つてしまふ。おかしな人間だなあ」と、武士の顔をつく／＼見つめることもありました。

さて、ある日、武士はタフトの前に丁寧にさじぎしながら、

「どうも、甚だ申しにくいお願ひでございますが、ちよつと、俄かの用だてに金五兩だけお貸し頂きたいものです。長くごめいわくは相かけません。じきお返しいたしますから」

タフトは、しばらく考へてゐましたが、

「うむ、君のことだから貸してはやるが、なにか、そのかはり、君が金を返すまで、俺にあづけておいてくれ」と云ひました。

「へえ、そんなら、これを差し上げておくことにしませう。では、どうぞ」と、云ふなり、武士は腰に差してあつた長い方の刀を思ひ切りよく、鞘ごと抜いてタフトにわたしてやりました。

その刀は、まことに立派なもので、もしも鞘をはらへば、首の二三つは、瞬く間に、とんでしまひます。武士は、暫くでも、大切な刀を手ばなすのがたまらなく惜しいと思つたが、今更、どうすることも出来ません。

「ほう、これは、なか／＼、立派なものだ。」

タフトも、かう云ひながら、腹の中で、もし、金を返してくれない時には、この刀で十分、うめあはせがつくわいと思ひました。

「よし、君の願はき、いれた」と、タフトは、すぐ

に、五兩の金を武士に貸してやりました。  
しかし、武士は正直な男でしたから、半月後には五兩の金をタフトに返して、あづけた刀を、また、とり返したのです。

「武士の魂とも云ふべき刀を取られてなるものか」と、その時、武士は、迷つたわが子にめぐりあつたかのやうに喜びました。

それから、暫くたつてからのことです。武士は、あやまつて、店の品物の一つこはしました。さあ、たいへんなことをしたと思つて、さつそく、タフトにおわびをしました。

「やあ、これは、そ／＼つかしいことをしてくれたなあ。だいたい品物を。しやうがない」とタフトは、ブン／＼怒りだしました。

「どうも、まつたく、すまないことをいたしまして。どうぞ、ごかんべんを」

わざと顔をやはらげニコ／＼笑ひながら、武士は

頭をさげて平あやまりにあやまりました。

「な、なんだ。ひ、人が怒つてるのに笑ふとは何事だッ。この馬鹿め」

今度、タフトは、まつかになつて怒り、あらゆる亂暴な言葉を吐き散らしました。

「いや、なに、その、それは、べつに」

かう、説きあかさうと、うろたへながらも、やはり、武士の顔には、つゝましやかなほ／＼えみが浮んでゐました。

「まだ、せ／＼ら笑つてるのか。君のやうな無禮な人間は今日限り出て行けッ」と、また雷のやうな怒り聲がしたのです。

それでも、武士は出て行くやうすもなく、やはり、笑ひながら、おわびに頭をビョ／＼さげるばかりでした。

「こんなに怒られても、まだ、せ／＼ら笑つてるとは」と思つたタフトは、もう、がまんが出来ません。怒



りでワナ／＼震へる拳が上げられたかと思ふと、武士の肩をりきなりなぐりつけました。

と、今まで、うなだれてゐた武士は夢から醒めたやうに、ハツと首をふり上げてタフトをにらめつけるが早いから、サツと腰の刀を抜きかざしました。

「あッ」と悲鳴をあげながら、二三歩あとずさつたタフトの首が飛んだかと思ひのほか、また、電のやうに、す早く、ガチャリと刀が鞘におさまつたのです。その早わざ、電光石火とはこの事せう。

その時、今の今まで、仁王のやうに、いばり散らしたタフトは、急に、びつくり青ざめ、身體をブルブル震はしました。それにひきかへて、今の今まで、猫にねらはれた鼠のやうに小さくなつてゐた武士は急にその目は、いき／＼と輝き、仁王のやうに突つ立ちました。

「では、これで、さよなら」  
かう武士は吐き捨てるやうに云ひながら、さつさ

はしつくれた。いはれなく、なくられて、がまんが出来るものか。で、刀を抜いて切りかゝつたが、そのとたん、俺はハツと思つて、また、すぐ、刀を鞘におさめてしまつたのだ。なあに、若い時、みがいだこの腕、一太刀でバツサリと相手の首を落してしまふのは、わけはない。それなのに、切り捨てなかつたのはなぜか。それは、この刀を一時、相手にあづけて、そのかはり、金を貸してもらつたのだ。その時、俺は、やつと、たすかつた思ひがした。たとへ、ちよつとでも、そんな、いんねんのある刀で相手を切り捨てるのは、しのびないと思つたのだ。そこで、すぐ、刀をひっこめてしまつた。まつたく、あぶないところだつたよ。それにハツと気がつかなければ、どんなことになつたらう。云はずも知れたことだ。こんなわけで相手を斬れなかつた俺は、さうかと云つて、おめ／＼、恥ざらしに生きてゐることは出来ない。俺は、獨りで死んで行く。武士の最

とタフトの家を出て行きました。  
「ま、ま、まあ、待つて下さい」とタフトは呼びとめたが、振り向きもしませんでした。

タフトは暫くぼんやりしてゐましたが、  
「あの男は、親切で、まじめだつた。わるい人間じゃない。惜しいことをした」と、くやんでは見たものゝ、でも、人が怒つてゐる時にせゝら笑ふとは、けしからん。」と、自分で自分に云ひわけをしました。

だが、やはり武士に氣の毒だつたので、いつか、仲なほりの機会が来るのを待つてゐました。

さて、立ち去つた武士は、その後どうなつたでせう。武士は自分に對するタフトの亂暴な仕打ちが、くやしくてくやしくてたまりません。もう、じいッとしてゐるわけにはいかなかつたのです。何かしら顔にたゞならぬ決心の色が浮んだかと思ふと、筆をとり上げて、  
「俺は今こそ老いぼれはてたが、とにかく、武士の

後に恥ぢないやう立派に。では、これでおわかれだ」と、すら／＼と、美しく、遺言状をしたゝめてから立派に自害してしまひました。

この噂がバツと町の中にひろがつて行きました。人々は、その美しい心根を感服しない者とはありませんでした。やがて、それが、タフトの耳へもはりました。

「あッ、これは、とりかへしのつかないことになつた。まことに、氣の毒千鳥だ。俺がわるかつた。あんまり、短氣を出しすぎたもんで」と、タフトは、どんなに、その時、悔ひ悲しんだことでしたらう。

それから、タフトは、親しく武士の家族を訪ねていろ／＼の金品を興へ、武士の靈を厚く弔ひ慰めてやつたと云ふ話です。

昔、外國人にはわからない日本人の笑ひ顔が、こゝうした、たいへんなことになるとは、驚くではありませんか。



# 大佛運び

小山勝清

羽鳥古山畫

「繁太郎や、有難いおぼし召しぢや、しつかりやつてくれ！」  
 「村の名譽ぢやぞ！」  
 「いや播磨の國のほこりぢや、あやまちないやうに務めてくれ！」  
 「さやうなら〜。」  
 村の人達は、口々にかう叫んで

春霞の中に消えて行く、繁太郎と白い牛を見送り出した。  
 繁太郎は、時の帝聖武天皇に、牛と共に召し出され、東大寺の建立に奉仕する名譽の少年でした。  
 繁太郎は、まだやつと十三の子供、その上両親に死別れた貧しいみなし兒にすぎませんでした。しかし生れつき牛使ひの名人で、父親が

残してくれた世にめづらしい大牛と共に、生れた村はおろかなこと播磨の國中ばかりでなく、奈良の都にむす帝のお耳に達するほどの天晴れな牛使ひだつたのです。  
 繁太郎は、大きな象のやうな牛の脊に腰をかけ、聲を張りあげ、木やり音頭をうたつて別れを惜しむ村人へ應へました。

この木生れはどこぢやいの深山に生れたけやきの木生れが良ふて氣が良ふて今日はお寺へ嫁入り  
 ほらさ精出せエンヤラヤ  
 ほらさ精出せヨイトナア  
 しかし、歌ひ終つた繁太郎の目からは、熱い涙がこぼれ落ちました。今日の名譽を思ふにつけ亡くなつた両親の事が悲しく思ひ出されたのです。  
 播磨國から奈良の都まで、それはずいぶん長いさびしい道中でした。けれども大牛の脊にのつた繁太郎は、一人の悪者にもおびやかされず、無事に都に着きました。

都に集つた數百頭の牛は、さすが全國からえらばれただけあつてどれもこれも強さうな大牛揃ひでした。又牛使ひも老巧の者や屈強な若者ばかりでした。それに、このたびの大工事で一番働のあつた牛使ひには、望み通りの御褒美を下さるといふおふれが出てゐたので、最初から猛烈な牛の競争となつてしまつたのです。  
 しかし繁太郎の「白」は決して、どの牛にも負けませんでした。そして又繁太郎の使ひ振りも、誰にだつて劣りませんでした。がその上にも、都の人氣を集めるやうになつたのは牛使ひが可愛い、少年で、木やり音頭が誰よりも上手で、牛が白銀のやうに白く、まるで繪

に書いた白象のやうに美しく威厳がある、とでした。  
 大佛殿の大柱を運ぶため、一つの材木に數十頭の牛ががつながれた時、都の人達は、手をうつつて白と繁太郎をほめそやしました。  
 「うむ、これこそ牛の王ぢや」  
 「いや、これでこそ日本一の牛使ぢや」  
 「今に、日本一の果報者にならうぞ」  
 ところが、望み通りの御褒美を下さることばかりをあてにして、最初から繁太郎の名があがるのをいやしい目でにらんでゐる一人の牛使ひがありました。その男は、近江から奉仕した、權三といふ者で、うるしをぬつたやうな眞黒な





牛を使つてゐました。その黒牛は全く白に劣らぬほどの體格と力があり、

又評判も大したもので、都の人氣は「白」とこの牛で占めてゐると言つてもよい位でした。

すべて、澤山の牛で一つの物を運ぶには、一番強い牛が一等、物に近くつながられることになつてゐます。この牛の任務は非常に重く、この牛の力と氣合で、はじめて物が動き出すのです。最初の程は權三の黒が、この一番牛でした。しかし「白」の人氣が次第にあがつて、今では白が一番になつた。ながれ、黒は二番に廻されました。で權三は益々繁太郎を憎むやうになりました。そのうちに東大寺の本堂も出來上り、大佛殿の

大柱も運び終りました。そしていよいよ大佛を、鑄物場から運ぶことになりました。この日は牛使ひの最後の奉仕であり、牛の優劣を定める最終の大試験で、天子さまも、お出ましになり、この有様を御覧になるといふことでした。

ところが、どうしたことか、その前日になつて人氣もの、白が、急に元氣がなくなり、横になつたまゝ起き上がることが出來なくなつてしまひました。

三

繁太郎は、御褒美をいたゞきたいとは思ひませんでした。しかし今まで無事につとめて來て、今一息といふところで奉仕の群から離



れることが残念でたまりませんでした。で、人にも聞き自分でも智慧をしぼつて看病しましたが、「白」の容體はますます悪くな

るばかりです。

もう、手を盡す術もなく、がつかりして、定められた牛使ひの小屋に入つたのは、夜も大分更けてゐました。が「白」の病氣のこと、明日の日のことを思ふと、目はさ

えるばかりで、まんじりともすることが出來ません。繁太郎は、またそつと起き上りをして、そして氣になるまゝに牛小屋に行つて白の様子を覗きました。白は、苦しさを荒い息を吐いてもがいてゐます。繁太郎は中に入つて、白の脊を撫でました。

「白や」繁太郎は悲し氣に話しかけました。

「ほんとは前、どうしたと

言ふのかい。あと一日といふ時に  
なつて、病氣にかゝるなんて……  
私運ア、何と言つて村に歸つたら  
よいだらうねえ。でも可哀さうに  
お前苦しさをだね。私は、決して  
お前を責めはしないよ……だつて  
お前は今までずるぶん働いてくれ  
たんだもの」

「白」は、首をまはして、熱い息  
を吐きながら主人の手をなめまし  
た。繁太郎は泣き出したいのをし  
つと堪えて、しつかと「白」の首を  
抱きました。

と、この時でした。牛小屋の外  
から思ひがけない足音が聞えて來  
ました。繁太郎は、思はず手をは  
なして、大きな「白」のかげに身を  
ひそませました。やがて足音は、

「白」の前に来てはたりと止まりま  
した。見ると、それは牛使ひの權  
三です。權三は白の苦しむ様子を  
見て心地よげに笑ひました。

「ヘツヘツヘツ……野郎くたば  
つておやがる。繁太郎の奴、おれ  
が毒草を食はしたとは夢にも氣が  
つくめえ。ふつふつふつ、これ  
いよ／＼楓の局が手に入るんだ。  
何しろ望み通りの褒美を下さるつ  
てことだから、俺が局を下さいと  
言つても、御布令は反古にはなる  
まい。へつへつ楓の局、今こそ  
観念するが宜いぞ。そなたの父の  
少將が、俺の仲間を召し捕つて打  
首にした、そのうらみを、そなた  
で晴らすたくらみだ。ふん……こ  
の牛使ひに化けこんだ俺がよ、大

盗賊のお頭、夜刃丸三太だあ、大  
佛さまでも御存じあるめえ」  
權三は憎らし氣にかう毒づいて  
悠々と立ち去りました。聞いてゐ  
た繁太郎の血は、にはかに熱くた  
ざり始めました。

#### 四

いよ／＼、その日となりました。  
今日の盛んな有様を見ようとして  
都の人ばかりでなく近國の人達ま  
でが朝早くから道の兩側につめか  
けました。ほどよいところに、天  
子さまの御座所も設けられました  
牛使ひ達は、今日を暗れと、牛の  
衣装もはなげなく、鑄物場へと  
乗りこみました。  
大佛は、既に大きな牛車に乗せ

られ、宰領の指圖で、二百頭の強  
い牛は、順々に牛車につながれま  
した。牛の兩側には、數百人の人  
夫達が、紅白の引き綱をとつて群  
がりました。丁度蟻がたかつたや  
うに。先頭に立つたのは、これ又  
數百人の坊さん達です。もし「白」  
が来てゐたなら、きつと一番牛に  
なるところですが、今日は「白」が  
ゐないために、權三の「黒」が一番  
牛です。權三は大得意でした。  
やがて木やりの音も勇ましく、  
二百頭の牛は、足をふみしめ、力  
におどる胴體を前に傾けました。  
一度二度三度……力綱は、切れる  
ほどびんと張りつめました。牛  
車は一分も動かうとはいたしませ  
ん。

その時分、繁太郎は、牛小屋の  
中にうづくまつて、力ない吐息を  
もらしてゐました。繁太郎は昨夜、  
權三の獨り言を聞いて、始めて權  
三の悪たくみを知り、楓の局を救  
はうと、一晩「白」につきはり、  
一生懸命手當をしたのですが、そ  
の効もなく「白」は相變らず寝たま  
まです。

そのうちに牛車は、やつと動き  
出したらしく、勇ましい木やりの  
歌、鋭いかけ聲が次第に近づいて  
參りました。思へば、生れて間も  
ない頃から、この歌で育てられ、  
このかけ聲で暮して來た「白」でし  
た。これが聞え始めた頃から、白  
は起き上らうと、しきりにもがき  
出しました。

そして、いよ／＼近くなつた時  
「白」は必死の力をこめて動き出し  
大きな岩のやうに猛然と跳起きま  
した。と同時に、腹の底からこみ  
あけてくる、苦しいうめきと一し  
よに「白」の口からは、黄ろい液  
體が、どつとほとばしり出ました。  
「白、どうした？」ぼんやりして  
ゐた繁太郎も驚いて立ち上りまし  
た。

「うらうら！」吐くだけのものを吐  
いてしまつた「白」は、したゝる液  
體をうちふるひながら、いつもに  
倍する凄まじい聲でうそぶきまし  
た。「白」は立つてゐるのです。し  
かも、元氣と力を張り切らせなが  
ら起き上らうとがいた拍子に、  
腹にあつた毒草を吐き出したので

す。

「おう、白が起つた。お前病氣がよくなつたのか！」繁太郎は夢のやうに叫びました。

「うおう！」白は、も一度、勇氣漲々、主人をせき立てるやうに吠えました。繁太郎は驚喜して「白」の脊に新調のくらを置き、自分も新調の烏帽子、直垂をつけました。そして都大路の方へと「白」の手綱を握り、まつしぐらに駆け出しました。

五

繁太郎が、牛車の一隊に追いついたのは、おそれ多くも、恰度天子さまの御座所の前でした。しかも牛車はこの所で、わだちを深く

大地にくひこませて、ぼつたりと進行をとめてゐるのでした。幸領は、あはて、牛使ひ共をしかりつけ、牛使ひは、聲を暖らして音頭をとりますが、牛の力にも限りがあつて、牛車はみじろぎもいたしません。見物の群集はざはめき始めました。天子さまのお傍にいてゐた人達も、不安な目を交してゐます。

群集の後にゐてこの有さまを見た繁太郎は、きとなつて「白」へさゝやきました。

「おう白！今こそ、天子さまに御奉公申し上げる時が来た！白よ、命のかぎり働いてくれッ！楓の局を救ふのもこの時だッ！」そして「白」を引いたまゝ、大

勢の人の垣をわつて前に出て、文武百官を従へられた天子さまの御座所に一禮して、幸領の前に進み出しました。

「幸領さま、おそくなつて面目ありません」繁太郎は何氣ない顔で言ひました。幸領は、にはかに喜びの色を浮べて聲をばづませました。

「おう繁太郎か、よく来てくれた。牛はもう丈夫になつたか。」

「え、もうすつかり、御覽の通りで御座います。」

「うむ、見事々々、では早速、牛をつけてくれ。」

「一番牛でございませうねえ。」

繁太郎は念を押しました。

「もとより、さうぢや。」幸領は

うなづいて權三に命じて黒を列の外に取りはづさせました。繁太郎は、にらみつける權三を尻目にかげ「白」を引綱につなぎました。そして心に村の氏神様を念じ、必死

の聲をふりしぼつて、進めの音頭をかけた時、さしもの牛車も、大きな山がゆらぐやうに、ゆら／＼と前へさしり始め、御座所の方から両側の見物人の間

からも破れるやうな歡びの聲が都



の空にとろろきました。

六

美事大佛を東大寺まで運んだのは、繁太郎の働きでした。又工事中第一の功勞者といふので、繁太郎は、おそれ多くも宮中に召され、簾をへだて、天子様のお傍近くひれ伏してゐました。

「これ繁太郎とやら、今日までの働き見事であつた。お上のおぼし召しぢや、そちの欲しいもの何なりと望むがよいぞ。」高貴のお側の人か、やさしく問ひたゞしました。繁太郎は、ひれ伏したまゝお答へ申し上げました。

「わたくしが一番欲しいものは、お母さままでございます。」

さらに美しく神々しいのに、今更、自分の申し出をおそろしく思ひました。

しかし、女官は嬉しげに、おのゝく繁太郎の手をとり、あつけにとられた殿上人のさゝやきをおとに、静々と、自分の部屋に入りました。あまりの勿體なさに、夢に夢見る心地して、ぼう然と局に手を引かれた繁太郎は、部屋に入ると、にはかに我れに歸り、飛び下つて叫びました。

「局さま、どうか先程の無禮なお願いをお許し下さいませ。」  
そして、半使ひに化けこんだ夜刃丸三太が局を敵とねらうてゐることを話し、たゞ、これを告げるために、局さまを所望したんだと

「ほう、お母さまとな。」その方は、あどけない繁太郎の答へにほほ笑みました。  
「その方は、母上を持つてをらぬか。」

「はい、父も母も亡くなりました」「しかし、その望みは叶ふまいぞ。いかにお上の御威光でも、亡くなつた者と呼び返す事は出来ない。」  
「いえ、新しいお母さんを……」  
「うむ。」

「楓の局を所望いたします。」  
「楓の局！」居ならんだ殿上人はこの意外な大それた申し出に、互に顔を見合せました。お側の方もすぐに返答が出来ません。すると簾の内から天子様のお言葉が下りました。

せきこんで打明けました。これを聞くと局の顔は、一層明るく輝きました。

「まあ、ではあなたは、妻の命の恩人、それでこそ、大事な妻の子供です。繁太郎さん、約束通り、妾を、お母さんに貰つて下さいませ。」  
局は、かう言つてひたとにじり寄り、繁太郎の顔を覗きこみました。

「でも私は百姓の子供でございます。」  
「いえ、百姓も厭ひません。繁太郎さん、妾の両親も、もうお亡くなりになりました。妾は、あなたのやうな賢い子の母になつて、楽しく暮したいと思ひます。」

一八

「いぢらしし願ひぢや、叶へさせてやるが宜い。」  
「はつ」お側の方は平伏しました。

七

やがて、薫り高い衣づれの音がして、美しい女官が、簾にむかつて一體して繁太郎の前に座りました。

「お聞きの通りぢや。この事御承諾下さるか。」お側の方は氣の毒さうに女官に言ひました。

「はい、不束ながら、この子の母にしていただきます。」女官は、淀みなくかう答へて、ニツコリして繁太郎を見やりました。繁太郎は、はつとして顔をあげました。そして女官の姿を仰ぎ見た時、あ

「え、では、ほんとうに……」繁太郎は、今こそ全く夢心地で、暖かい母の愛をこめた局の眸に、顔をうづめて泣き伏しました。

それから十幾日たつた或日、警護の武士にまもられ、あまたの美しい荷物を黒塗りの牛車に積んで、悠々と都を出た見事な白牛がありました。その白牛の脊には、美しく一組の母と子が腰をかけて、奈良の都の山々を、名残り惜し氣に眺めてゐました。

この親子この白牛、それが何者であるかはみなさまよく御存じのことと思ひます。

(をはり)

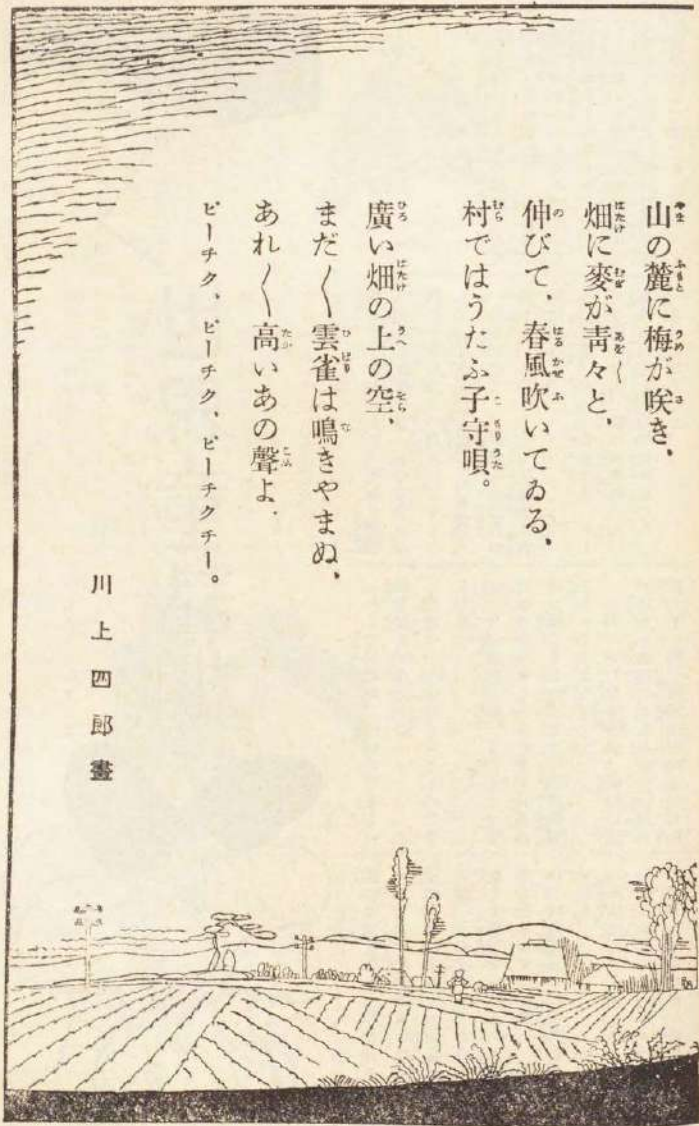
雲雀

三木露風

遠いお山の雪が消え、  
毎日お天気青い空、  
仰げば高く雲雀鳴く、  
ピーチク、ピーチク、チクチクチー。  
雲雀よ雲雀、よい聲で、  
お前は鳴いて舞ひ上る、  
唄が上手で羽根強く、  
雲の上まで舞ひ上る。



山の麓に梅が咲き、  
畑に麥が青々と、  
伸びて、春風吹いてゐる、  
村ではうたふ子守唄。  
廣い畑の上の空、  
まだく雲雀は鳴きやまぬ、  
あれく高いあの聲よ、  
ピーチク、ピーチク、ピーチクチー。



川上四郎畫

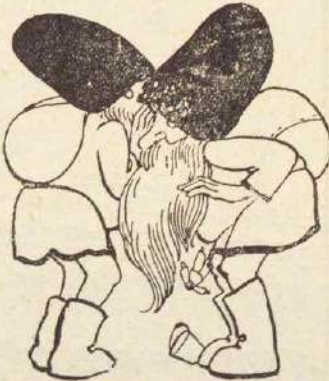


# 初音の鼓

むかし都にひとりの殿様がゐました。もうその頃は世の中が泰平で、戦争がなかつたもので、馬鹿殿様が多くゐました。この殿様もその一人で、何にもする事がないので、古い道具を深山に買い込んで、それを列べて

「あゝ吉兵衛か、何かめづらしい物を探して来たか。」殿様は、さつそくおきまになりました。「ハイ、初音の鼓」と申します。實に世にめづらしいものを手に入れて参りました。どうぞ是非御覧下さいませう。」

「折紙はありませんでも、全くたしかな品でございます。」といつて、でたらめな鼓の説明をはじめ



# 世界童話欄

「そも、初音の鼓のいはれを申上げますと、桓武天皇の御代



「それは實に不思議な鼓だ。しかし、もう、外に何か不思議はないか。」と、ききました。「ございませうとも、それをお打ちになると、傍にゐる者に狐のり参ります。」

「吉兵衛さんか、久しく見えなかつたが、大和めぐりをされたさうだから、何か殿様へめづらしい品



「折紙はありませんでも、全くたしかな品でございます。」といつて、でたらめな鼓の説明をはじめ

てみた處ですから、すぐさま彼を  
とりあげてポンポンとたゝきまし  
た。三太夫は忽ちそこへ倒れて、



「コン、コン……」となきま  
した。殿様は愈々ニコニコして、  
「三太夫どうした。」ときくと、  
「向夢中でした。狐が、狐が  
のり移つたものと見えます。」と、  
答へたので、殿様はすっかり面白  
くなつて、ポン／＼ポン／＼ポン  
／＼と、つゞきさまに鳴しました  
から三太夫は聲をからして、  
「コン／＼コン／＼コン／＼」と

夢中でききました。

その後で殿様は大勢の家來をあ  
つめ、みんなに狐をのり移して面  
白がらうと思つて、鼓をたゝきま  
したが、誰一人として狐の乗りう  
つたものがありせん。殿様は  
初めて欺された事に気がついて、  
大變に立腹され、どうかして吉兵  
衛衛をいぢめてやらなければなら  
ないと考へました。

翌日、吉兵衛が百圓のお金を受  
けとりやつて來ました。そこで  
殿様は待ち兼ねてゐたやうに、  
「吉兵衛、あの鼓は實に不思議な  
鼓だ。しかし子に少々まだ分ら  
ぬ事があるから、お前子に代つて  
二つ三つ鳴して見てくれないか。」  
と、いひました。吉兵衛は嘘があ  
らはれさうになつたので、もちも  
ぢして、  
「へい、實はその……、鳴物は一  
向にやつた事がございませんので

どうぞそればかりはおゆるし下さ  
いますやう。」とたのみました。が  
殿様の方では、  
「巧い拙いをいつてゐるのぢやな  
い。是非一つ鳴らせ。」と、切り  
にせめられるので、吉兵衛は困り  
切つてしまひ、その場合鳴らさな  
い譯にも行かないので、たうとう  
仕方なく鼓をとりあげて一つ「ポ  
ン……」とたゝきました。すると



殿様が「コン……」といつて、  
そこへ倒れてしまひました。それ  
から暫くして起き上つた殿様は、

「吉兵衛、その鼓は實に不思議な  
鼓だ。約束通りの金をやるぞ」と  
いつて、懐中から奉書に包んだ金  
包を出して渡しました。吉兵衛  
は穴へでも入りたいたやうな氣持  
で、金の包をもちかへると、こそ／＼  
と逃げるやうに歸つてしまひまし  
た。さて、屋敷を出た吉兵衛は、  
その足で三太夫の家へ行つて百圓  
の金をお互ひに分けあはうとしま  
したが、奉書の包をとくと申から  
お金の代りに一枚の木の葉が出ま  
した。それと一緒に、こんな文句  
を書いた紙切れが出て來ました。

この木の葉は大和の山奥の千年  
の年をへたお狐様から貰つた  
ものだ。何處へ持つて行つても  
金百圓に通用する。

吉兵衛も三太夫も開いた口が塞  
がりませんでした。

### 生命の水(ロシア)

ある商人に、三人の娘がありま  
した。  
三人の娘は、ある日の夕方、急  
際へ椅子を寄せて、いろ／＼な話  
をして居ました。  
突然、姉さんが云ひますには、  
「妾、王様のパン焼の所でもいゝ  
から、御嫁に行ければ嬉しいわ！  
だつて、さうすれば、随分王様の  
近くまで行けるんですもの！」  
と、云ひました。  
「ほんとだわ！妾は、ご殿の皿  
洗ひでもいゝわ！」  
と、その次の姉さんが云ひまし  
た。  
併し、三番目の妹は、上の姉さ  
んに反對して、  
「妾、王様でなくつちや嫁よ！  
妾は、王様の御嫁になつたら、可  
愛い男の兒を二人と、女の兒を一

人産んであげるの。男の兒は、手  
が金で、足が銀で、頭からはお月  
様の御光が差すし、額からはお日  
様の光が輝くの。そして、女の  
兒は、それは可愛いくて、笑  
ふと、その娘の周圍に、綺麗な花  
が眞赤に咲くし、泣けば涙の代り  
に、眞珠の玉が、ぽろ／＼と眼か  
ら流れるの！」  
と、夢の様な事を云つて、姉さ



ん途を笑はせました。  
王様は、森の中へ狩りに出かけ  
た歸り、思ひがけずも、商人の家

の窓の下を御通りになつて、娘達  
の話を、小耳にはさんで歸りまし  
た。  
翌日、王様は使を立て、三  
人の娘を呼び寄せ、昨日の夕方、  
何を話して居たかとお尋ねになり  
ました。  
「一番驚いて、一番恐がつたのは  
末の妹でした。が、王様は、親切  
におつしやるので、三人とも、す  
つかり話して終ひました。」

「さうだつたか、よし／＼、私は  
お前達の望みをかなへてあげよう  
姉さん達は、私の、忠義な家來の  
お嫁にならなさい。私はお前さん  
を賞ひませう。その代り、お前が  
云つた事を忘れてはいけないよ。  
私に、そのめづらしい兒をきつと  
産んで呉れなければ。」  
と、王様は、一番末の妹に云  
ひました。  
さて、自分達が、王様の下僕風  
情のお嫁さんになつた後

のに、妹が王様の奥様になつたの  
を見て、二人の姉さん達は、大變  
そねんで、妹をいぢめ出しまし  
た。妹は、間もなく、男の兒を  
産みました。見ると、妹の云つ  
た通り、赤ん坊の、手は金、足は  
銀、頭からはお月様、額からはお  
日様の、輝かしい光がさして居ま  
す。

姉さん達の、にくしみは、いよ  
いよひどくなつて、そつと、赤ん坊  
を、箱へ入れて、河へすて、流し  
て終ひました。そして、王様の所  
へは、素晴らしい赤ん坊の代りに  
生れたての犬の子を一匹、捕籠へ  
入れて持つて行きました。  
御覧になつた王様は、大變當が  
はづれたので、眞赤になつて怒つ  
て、お嫁さんを殺して終はうかと  
思ひましたが、やつと思ひ直して  
一度だけ許す事にしました。  
間もなく、妹の女王様は、二度  
度目の男の子を産みました。今度

の兒も、最初に云つた通りの、素  
晴らしい赤ん坊でしたが、心の悪  
い姉さん達は、また、きたない箱  
の中へ入れて、そつと、河へ流し  
て終ひました。

王様は、猫の子を御覽になると  
火の様に怒つて、また私をばかに  
するか、今度はそれは殺して終ふと  
云ひましたが、大臣達が諫めて、  
やつともう一度許して頂きました  
暫らくして、女王様は、また、  
三度目の兒を生みました。そして  
今度は、女の子で、矢張り最初云つ  
た通り、その兒が笑ふと、ばつと  
赤やんの周りに、眞赤な花が吹  
泣いて見えますし、オギヤアノと  
泣く時には、可愛い眼からは涙が  
こぼれずに、小さい眞珠の玉が、  
こぼれ落ちて來ました。

が、意地の悪い姉さん達は、ま  
た、可愛い赤やんを河へ流して  
終つて、王様の所へは、薄つべら  
な、木の板を一枚籠に入れて持つ  
て行きました。

大臣達は、それはあんまりです  
から、石の筒へ入れて、一人で  
死の様にささいと云つて、諫めま  
した。



道標が助けて居て下さつたのでせ  
う。

の子も、取り返してあげるといふ  
といふ神様の聲が聞えました。  
長い年月が経ちました。誰も物  
を喰べさせてくれる人はありませ  
んでしたが、女王様は、石の筒の  
中で、丈夫で生きて居ました。天

刺、大きくなつて、立派な青年に  
なりました。わけても末の妹は、  
泣けば眞珠の涙を流し、笑へば赤  
い花を吹かす、見るも美しい娘に  
なりました。

この庭に、なくてはならぬ物が、三  
つ足りませんよ。それがないうち  
はあなたは、ほんとうに「幸だ」と  
は云へませんよ。」



と、變な事を云ふのでした。  
「三つ？ おばあさん！ それは  
なあに？ 教へて頂戴、早く教へ  
て頂戴！」

「このナイフに、變つた事がなけ  
れば、兄さんは達者で、寶物を探  
して居るんだから、心配しなくて  
もいゝよ。ね。若し、兄さんが死  
ぬ様な事があつたら、このナイフ  
から血が流れるから……」  
と云つて、兄さんは、當どのな  
い旅に出發しました。  
兄さんは長い間歩いて、到々



ある山の麓までやつてきました。  
其處に、空へ届く程大きな、見  
事な樅の樹が一本生えて居て、そ  
の根元に、一人の、小さな老人が  
坐つて居ます。

兄さんは丁寧に挨拶しました。  
「よくいらつしやいました！」  
年寄も云ひました。  
「お爺さん、僕は「命の水」に「歌  
を歌ふ樹」と「物言ふ鳥」を探し  
に來たのですがね。どうでせう、  
見込がありますかね。」  
兄さんが尋ねますと、  
「見込はあるが、容易しい事では  
ありませんよ。探しに行く人は多  
いが、歸つて來る人は少ない。」  
年寄が云ひます。  
兄さんは、お爺さんに別れを告  
げて、一生懸命に、山へよち登り  
ました。  
ちやうど、今少しで、絶頂へ着  
く頃、後ろの方で、すどい聲で  
叫んで笑ふものがあります。  
「止れ！ 捕へる！ 殺せ！」  
兄さんは、ひよいと、後ろを振  
り返りました。すると、忽ち、兄  
さんの姿は、石塊に變つて終つて  
それと一緒に、家の壁へ突立て、



あつたナイフから、ダラ／＼と血が流れ落ちました。

「あゝ、兄さんはもう居ない。」  
娘さんは悲んで泣きました。

「と、次の兄さんは、兄さんと、同じ事を云つて、三つの寶物が探せなかつたら、せめて兄さん丈でも、探して来ると云つて、また出かけました。

「次の兄さんも、また、小さい不思議な年寄に會つて、兄さんと同じ事を云つて、山に登り初めました。そしてまた、あの、『止れ！ 捕へる！ 殺せ！』と、いふ、するどい叫び聲や、笑ひ聲を聞いて、思はず後ろを振り向くと一瞬間、路傍の石ころに突つて終ひました。

またナイフから血が流れ落ちました。

「どんなに、娘さんが悲しがつたか！ かうして、廣い世界に、たった一人残された妹は、今度は決



心して、自分で、寶物と、兄さん達を探しに出かけました。

「娘も、間もなく、毛長の老人の所へたどりつきました。

「髪は毛も、頬ひげも、眉毛も、余りのびすきて、地面へはえつて終つて、動けなくなつて居るのを見ると、娘は、氣の毒で堪らなかりました。で、はさみで、ジヨキ／＼と長い毛を、みんな切つてやりました。と、お爺さんは、初めて、自由に動けるやちになつたので、大變よろこんで、

「お、あんなは、いゝ娘だ！ 私は、此處へ坐つたりで、三十年も動けずに居た。よく切つて下さつた。で、あなたは何處へ行きなされる？ 事に依れば、私も何かの役に立つかも知れん！」

「そこで、娘は、すつかり話をすると、老人が云ふには、

「真すぐに、この山を登つて行きなされ！ 誰が、何んと云つても氣に留めてはいけませんぞ。止れ！ 捕へる！ 殺せ！」と後の方で云ふものがあつても、あなたは後を振り向いてはいけない。後を見れば石になる！ お山の頂きへ着けば「命の水」がたんとある。

「美しい樹が歌を歌つて居る。綺麗な鳥が物を言つて居る！ さあ行きなされ！ あ、それからね、忘れない様に、歸り途に、ころがつく石塊に「命の水」を、しづ／＼とつけてやりなされ！」

「で、山に登り初めました。そして、すぐ後ろでまたあの、『止れ！ 捕へる！ 殺せ！』といふ、恐ろしい叫び聲が聞えました。娘はギョツとしましたが、毛長のお爺さんに教へられた通り、後ろを向かずに、ずん／＼山を登つて行きました。そして、やす／＼と、頂へつづく事が出来ました。頂へ着くとすぐに、持つて居た小さな壺へ、一杯「命の水」を汲み取りました。

「そして「歌を歌ふ樹」の枝を折つて「物言ふ鳥」を捕へて、大よろこびで山を下りて来ました。

「お爺さんに教へられた通り、其處等に、ごろ／＼ころがつて居る石に、一掬づ、つぼの水をかけると、怒り石が動き出して、みな人間の姿に變つて、生き返りました。見ると、その人達の中に、懐しい二人の兄さんも居ました。

「兄妹三人は、手に手を取つて、家へ歸つて来ました。



「間もなく、この話が、王様の耳に達しました。王様は、何よりも泣けば眞珠の涙を洗すし、笑へば眞赤な花をさかす娘を見たいと思つて、この兄妹達の家を訪れました。

「なんと、いふ美しい娘！ 兄妹に案内されて、廣い庭に

「王様は、夢ではないかと思ひました。

「そして、フト、その小鳥の云つて居る言葉に耳を傾けると、何んといふ事ぞ、せら。この、三人の兄妹は、ずつと前に迷兒になつた、一度も見た事のない、王様自身の子供だといふのです。



「王様は、歌びの服を輝かせて、『有難う！ 有難う！ もつと聞かせて呉れ！』小鳥さん！ 物言ふ小鳥さん！ 早く先を聞かせて呉れ！」

「と、頼みました。小鳥の話で、昔からの事がすつかり分りました。

「王様は、大急ぎで、御殿へかへつて、何十年前の、石の筒を壊さしました。

鍋かぶり (日本)

「一人の土が、奥さんと一緒に、土佐の國の山奥を放しました。

「ちょうどその時、奥さんのお腹

「には赤ちやんが宿つてゐましたので、なか／＼道がはかどりませんでした。

「ある日の夕方、奥さんは急に産氣づいて、たうとう道の眞中で産み落してしまひました。お土は、どこかに百姓屋はないかと思つて方々、探しましたが、こんな山奥のことですから、どこにも見當りませんでした。そこで仕方なく、奥さんと赤坊をか／＼へて、野宿をする事になりました。

「奥さんは、心、細いやら何やらで、め／＼と泣いてゐました。お土は、しきりとそれを慰まめてゐましたが、しまひには自分もなんだか泣きたくなつてくるのでした。

「日が暮れると、森の奥の方からものすごい呻り聲が聞えてきました。これは土佐の國の名物の狼でした。土は、枯枝を集めてきて、どん／＼と火を燃しました。

「驚くすると、焚火の廻りには、多くの狼たちが集つて来て、三人の方をむいて、白い齒をむきだして、低く呻つてゐました。隙があつたら飛びかゝつてやらうと思つてゐるのでせう。」

「士は、狼なんか少とも怖くはありませんでしたが、妻や子に怪我があつてはならぬと思ひましたので、傍に生えてゐた大きな木にのぼつてゐる事にしました。まづ、奥さんと赤あやんとを、木の真中ほどにある、又になつた所へ上げました。そして自分は、直ぐ下の枝に跨つて、ちいつと狼の方を睨んでゐました。」



「狼めがけて、ヤツと斬りおろしました。士は、剣道の達人でしたから、一番上の狼は頭を眞二つに割られて、どうと地面へころげ落ちてゐました。」

「奴がその肩車に乗る、又乗る」と云ふ風にして、士のつい傍まで俯ひかがつて来ました。士は、刀を抜いて、一番上の

「ところが、一時間はかりすると又狼たちが集つて来ました。そして、前のやうに肩の上へ、肩の上へと乗つて、士の傍まで近寄つて来ました。」

「一番上になつた狼は、年寄りだと思つて、毛の色が銀色に光つてゐました。狼は、一降りオーと叫んで、士めがけて飛びつかうとしました。」

「かごとこで、狼の頭を見事に鐵の鎧を割つて、狼は深く斬りこみました。狼は苦しげな聲をあげて、地面へころげ落ちてゐました。そして、よろけながら、奥へ逃げこみました。他の狼たちは、その跡に逃げて行つてしまひました。」



「士は、萬身の力をこめて、ヤツと振りおろしました。今度は、

「方へ向つて歩きました。森を出はげれた所に、一軒の汚らしい、破れた家がありました。」

「士は、この家の門口に立つて、案内を請ひました。中から四十ぐらゐの男が出て来て、士たちの様子を見つて、泣くやうにして頼んで、やつと台所の隅を貸してもらふ事が出来た。」

「士は、主人に向つて、『もし、御老人はどうかなさつたのですか?』と、聞いてみました。主人は、



「でも助かりますすまい……」と、云ひました。士は、刀傷と聞いて、はつと思ひあたりました。」

「心配さうな顔をして、母は、昨夜深夜中ごろに外から歸つて来たのでございませうが、どこでどうしたのか、頭にひどい刀傷を受けてゐるのでございませう。一體どうしたのかと、いくら訊ねましても、口つきくことが出来ないので、よほど傷が深いやうでございませうから、と

「ことによると?と思つたので、ソツと台所を見廻して見ますと、棚の上の所にザツクリと底を割られた鎧が破つてゐました。」

「士は、赤ん坊を抱へた奥さんを見て、その日の夕方、やつとの事で町まで着く事が出来ました。町の人々は、その話をきいて、みんな口々に、士達の無事だつた事を慶びあひました。」

### 謎を解く王子 (長篇)

「王子アルマスは、六ヶ所の謎を解くために、コリカサスへ向つて出發しました。途中いろいろ苦しい目にあひながら、やがて黒ん坊の住んでゐる「霧の城」へやつて来ました。」

「霧の城」の番人は、アルマスの姿を見ると、大さう怒つて、いきなり飛びかゝつて来ました。アルマスは、刀を抜いて、その番人を眞二つに斬つてしまひました。」

アルマスの所法の劍で二つ切りされてしまひました。城にゐてこれを聞いた大將タラントーは、三百人といふチルマと呼ぶ大男の黒ん坊をよびよせて言ひつけました。

「あの人間をつかまへて来てくれ。褒美は望み次第だ。」

黒ん坊が歩き出したかと思はれるやうな大入道のチルマは、八つ石の桶をもつて、づしりづしりと出て来ました。

「おい、あばれ小僧。何んだつてお前は、この國へ来て皆を殺したんだ。さあ、来ておれを二つ切りにしてみる。」

チルマは、アルマスをすつかり裏手にして、持つてゐた棍棒を放つて、いきなりアルマスをわしづかみにしました。そして首つ玉をつかんで宙にぶらさけると、そのまゝ城の中へかへりかけました。その時アルマスは、ヤミーラにも

らつた魔法の短刀をぬいて柄も通れと、チルマの腋の下につきさしました。チルマは不意をうたれて



アルマスをそこへ落してしまひました。そして、あわてゝ自分の棍棒を拾はうとしました。がその時はやく、アルマスは立ち上つて、今度は魔法の劍を押つて、牛より太いチルマの胴を真つ二つに切つてしまひました。

城の中にこの知らせが聞えると、大將タラントーは大に怒つて、自ら黒ん坊軍の先頭に立つて突

進して来ました。黒ん坊の軍勢は次から次へと、アルマスの劍にかゝつて、ばたりばたりと切り倒されました。

最前からの戦ひで大分疲れてゐたアルマスは、出来るだけ我儘をして戦つてゐましたが、もうどうにも體が動かなくなりました。

で、敵のおしよせてくる隊をみて火打ちを打つて、ライオン王に貫つた毛を一本燃やしました。しかしその時、敵の軍勢は大河のやうにおしよせて来て、アルマスを虜にしてしまひました。

突然、平原のはるか向ふに獅子王の率ゐるライオン軍の一隊が現はれました。

「や、これは大變だ！ 黒ん坊どもは驚いて叫びました。

ライオン軍は砂をけたてゝ、ウオーウオーと吠へながら目近に追つて来ました。これを見たアルマスは大に力を得て、再び元氣づ

きました。身をおどらして劍を持ち直すと、能く無事に切りまくりました。そのうち一萬頭近くのライオン軍が到着して、あたりかまはず食ひやぶつて、人形もろとも粉みぢんにしてしまひました。

大將タラントーはすつかりおじけづいて、城の中へこつそりと逃げこまうとしましたが、その時後ろからアルマスは大聲でどなりました。

「どこへ行くのだ、卑怯もの。逃げるのか。」

かう言はれると、タラントーも逃げるわけにはゆきませんでした。「なに、生意氣な小僧め、さあ来い。この棍棒でたゞのめしてやる。」と言ふが早い、いきなりアルマスの頭めがけて棍棒をふり下しました。がその時すばやくアルマスは、ひらりと身をかわしてタラントーの後に飛びこんでしま

ひました。それとは知らずタラントーは確かに手ごたへがあつたと思つてうろろ前の方を見まわしてゐました。アルマスはその隙に劍をふり上げると、タラントーの驕天から真二つに切り下げました。



た。城の中は、普通の王様の城と同じやうに美しく飾り立て、あ

りました。

その時城の中には、まだ若いタラントーの娘がゐたのですが、その娘はアルマスに手紙を書き送りました。

世界の王、アルマス様、どうぞお姿を、あなたのしもべにして、あなたさまのお傍にゐさせて下さいませ。あなたさまのおいでのところへは、どこまででも御供がいたしたう御座います。

アルマスはこの手紙を讀むと、すぐその娘を自分の前に呼びました。娘はアルマスの足に何度も接吻して、お願ひがいつはりでないといふことを誓ひました。

「あなたの心はよく解つた。併し僕は大事な用事があつて、遠い處に行かなくてはならないのだ。だから歸りにあなたの持ちものど一

緒にあなたを僕のところへ連れて行くことにしよう。その時まで待つてゐてもらひたい。」

アルマスは娘にさう言ひきかせると、それから獅子王に頼んで、城や、城の中にあるものをすつかり



世話をして貰ふことにしました。「では獅子王さん、よろしく頼みます。罫が来て、あの娘には指一本もさばらせないで下さい。」

アルマスはさう頼んで、大將の馬小屋から新しい馬を一匹ひき出しました。そしてそれにまたが

つて、目指すカフのワイクへ向つて出發しました。

二

何日も泊りを重ねて行くうちにやがて驚くばかり、すがすがしく美しい野原に出て来ました。一面に薔薇やチューリップやクロロパールの花が咲きほこつて、眼もさめるばかきな美しい花園でした。一條の小川はその間を縫つて流れて、何とも云へぬおもむきを添へてゐました。

その野原を少し行くと、そこには今まで見たこともない奇妙な木が一本生えてゐました。枝は同じでしたが、ついでゐる花や葉は縫通りのあるか敷一切れない程さまざまでした。又、その近くにこれも亦奇妙な罫池があつて、それは普通の石と試金石と大理石と磁石と、四いろの石でつくつてありました。アルマスはこれらのものを見るとすぐ、こゝがシュール鳥の

うちにちがひないと思ひ當りました。アルマスは馬から下りて、馬に



草を食べさせ、自分もヤミイラから貰った食べ物を食べたり、小川の水を飲んだりして、そのまゝそこへ横になつて寝ました。

しばらくうとうとしてみると、ふと、けたままし、馬の嘶きや、足で土を蹴る音に眼がさめました。頭をあげて見ると、恐ろしい小山のやうな龍が、下になつた石を粉々に碎きながら、のそりのそり

と近づいて来てみました。アルマスはあつと驚いて立上り、ヤミイラから貰つた弓と矢を三本取出しました。そして、短刀は腰にしば

りつけ、鋼は首にかけて、まづ一本の矢をつがへてはなちました。矢は風を切つてとんで行つて、龍の眼の玉へぶすりと突き立ちました。その恐ろしい龍は毒氣を吐きながら、大地を震はす程に頭を打つけ打つけ、のたうちまわりました。アルマスはこれをみると、第二の矢をつがへて喉へ射こみしました。その時、龍はぐうつと大きな息を吸ひこんだので、そのためにアルマスは危く龍の口の中へ吸ひこまれやうとしました。が、あぶないところをふみ止つて、いきなり鋼を抜き、體ぢうの力を出して龍の喉から腹へかけて切り下げました。しかしその瞬間、はげしい毒氣と身の毛のよだつやうな恐ろしさのため、アルマスはばつた



りそこへ倒れて氣を失つてしまひました。やがて、アルマスが正氣づいたときには、龍は死體となつて傍に横はつてゐました。そして一面に流れてゐる血で、アルマスはつぶぬれでした。アルマスは喜びま

マスの上のその奇妙な木にあつたのです。丁度この時分ふたりの親鳥は何をさがしに行つて、あと

には子鳥だけが残つてゐました。親鳥はいつも子鳥に、留守の時は決して巣から首を出さないやうに

と教へてゐましたが、その日は下で、アルマスと龍のはげしい戦ひがあつたので、首を出して様子をつつかり眺めてしまひました。そして、丁度アルマスが起きた時分には、大變お腹が空いてゐたので食べ物がほしいといふやうに、やかましく鳴き立てました。

アルマスはそれと氣がつくと、龍を小さく刺んで食べさせてやりました。子鳥どもは嬉しがつて、よつてたかつて龍をすつかり食べてしまひました。それからアルマスは體を洗つて疲れを休めるために、そこへ横になると、又そのまゝ寝入つてしまひました。やがてシムール鳥が歸つて来ました。いつたいたシムール鳥のうちでは規則として、親鳥が歸つてき

たときには、子鳥は迎への挨拶に口を揃へて鳴くことにしてゐました。しかしその日は子鳥どもは、たらふく龍の肉を食べてゐたので

おかまひなしに、氣になつて、ぐうぐう寝てしまつてゐました。親鳥は近づいてみると、巢の中はひっそりして何の聲もしません。怪しみながらみると、木の下の一人の王子が寝てゐます。

「さてはあの男が子供を取つて食つたのだな。よし、仇を打つてやらう。」

「まあお待ちなさい。兎に角巢の中を一應見てからにしませう。罪もない人を殺すと天道様に申許ありませんから。」

それでふたりは、もう一度巢に近よつてみました。丁度その時、子供は眼を覺ました。お母ちゃん、なにもつて来てくれたの。」

「さう言つて、それから下であつた戦の話を、肉を切つて食べさせて貰つた話や、それをすつかり元氣づいた話などをして聞かせました。」



「それごらんない、お父さん。もう少しで大變なことをするところ

ろでしたわ。罪をつくらないでよござんしたね。」

母鳥は胸をなで下ろしながら言ひました。そこで父鳥は向ふの方へ飛んで行つて、持つてゐた岩を棄てました。岩は土の中へぐつと深くめりこんでしまひました。

歸つて来て氣がつくと、木の間にたつてゐるので、シムール鳥は自分の羽をひろげて、アルマスが眼をさますまで腹をつくつてゐました。

アルマスは眼をさますと、そこにシムール鳥がゐるので、うやうやしく敬禮しました。シムール鳥もよろこばしげに挨拶をかへして

アルマスは今までの話をすつかりして、

「おちいふわけですから、どうぞ私をヨリカサスのワークへつれて行つて下さい。さうすれば、あなたのおかげで、きつと謎が解けて、兄二人の仇がうてると思ひます。」

シムール鳥は、先づアルマスの勇ましい元氣をほめたゝへて、それから首葉をつまみました。

「あなたになさつたことは、とて人間業とは思へません。何年か前にも、あの龍が出てきて子供をすつかり食つてしまつたことがあ

「こゝへ居て下さい。欲しいものは何でもあげますし、何もかも揃った時もおつてあげませう。コーカサスの國はあなたの領分にして今の王子達をあなたの家来にしませう。ワイクへ行くとだけはおよしなさい。とても危ないところですから、きつと悪魔に殺されてしまひます。」



シムール鳥は言葉をつくりしてすめましたが、アルマスの心は動きませんでした。シムール鳥もアルマスの決心が石より硬いのを知ると、

「ではよろしい、さうなさい。しかし、行くとなると、野原へ行つて七つ頭の鹿を捕つて来なくてはなりません。それは、その皮で水を入れる袋をつくり、その肉で七回分の食物をこしらへるのです。何しろ途中には七つの海があるのですからね。もとより私が貴方を乗せて行つてあげるのです。」

すからね。ですからあなたは私にさう言つたら食べ物や飲み物をわしの口に入れてくれなくては駄目ですよ。」

そこでアルマスは、シムール鳥の言つた通りすべてをとのへてシムールの背に乗つて出立しました。海を渡るたび毎に、食物を口の中へ入れてやつて、やつと一番しほの海に向ふ岸につきました。

「私の息子さん。さあ、この道を歩きなさい。さうしたらワイクの町へ出ます。それからこの私の羽を三本持つて行きなさい。もし困つたことがあつたらこれを一本焼けば、すぐ眼をキラキラ光らせながら飛んで行きますから。」

シムール鳥はさう云つて三本の羽をアルマスに渡しました。アルマスはその羽を大切にしまつて、新しい道をとぼとぼと、ワイクの町をさしてやつて行きました。

ワイクの町につくとアルマスは通りといふ通りはもとより、勤工場、横町、小辻などすつかり歩きました。何の手がかりもありません。黙つてそのことばかり考へながら、七日の日が過ぎてしまひました。

これよりさき、アルマスは着いた最初の日に、ある呉服屋と知り合ひになりましたが、その後二人

は大變仲よくなつてゐました。八日目の朝、アルマスはひよつくりその友達に尋ねました。

「君、僕はね、善後には赤杉をどんな目にあはしたか」つてことを知りたいたいが、その謎の心を教へてくれなさいかね。」

すると友達はびつくりして叫びました。

「一たい君は、なんだつてそんなことをきくんのだい。もし君とこんなに仲よくなつてゐなかつたら、僕は君の首を切つてしまふよ。」

「僕の首を切つて！ 僕は僕の首を切らせれば教へてくれるんだね。」 アルマスは膝をすゝめました。

友達はアルマスが死ぬ程熱心に知りたがつてゐるのを知ると、

「そんなに知りたいのなら、王様に會つて聞かなくてはとて駄目だ。外に方法はありやしない。ここでは誰一人そのことを言ひはし



「案内して、王様の徳を慕つてきた外國の庶人だといつて、ひきあはせました。」

ないからね。丁度、幸ひ懇意な人が宮中にあるから、その人に君を紹介してあげやう。ハルークといふんだ。」

「それは有難い。」 アルマスはすつかり喜びました。

やがて呉服商人は、ハルークを家へよんで御馳走をして、アルマスに引き合せてました。ハルークはアルマスをシノーバー王の前へ

前にアルマスは、シムール鳥から目方が十匁もあるダイヤモンドを買つてゐましたので、それを王様に献上しました。王様はすぐそれが珍らしい、寶物であることに氣づいて、何處で手に入れたかをたづねました。

「はい、以前私は、大變な金持ちで、自分の國もあれば軍隊もありました。そんなダイヤモンドも私の國にはいくらでもございまして。こちらへ来る時も澤山持つて来てゐたのでございませうが、途中、銀の城で奪はれてしまつたのでございませう。それ一つだけは廢物の中へかくしておきましたので、やつとたすかつたのでございませう。」 アルマスはつくり話をして答へました。

シノーバー王は、アルマスがたつた一つしか残つてゐないダイヤモンドをくれたといふので、非常に喜んで、それよりもつと値う



あるなら何でもあげますよ。」

王は何度もアルマスに言うひました。

ある日のこと、王が又さう聞いたときアルマスは思ひきつて謎の事を聞いてみようと思ひました。

ちのあるものを運働としてアルマスに贈りました。そして出来るかぎり親切にもなして、宮殿の立派な客間へ案内しました。毎日毎日面白い遊びをして楽しませました。

「何か欲しいものはありませんか」

それで、

「たつた一つございます。誰れもゐないところで、あなたにだけ申し上げたいことございます。」と答へました。

すると王は、すぐ傍にゐた家来達に、あちらへ行くやうに命じました。

「私が一生のお願ひといふのは外でもございませぬ。善後には赤杉をどんな目にあはしたか」といふことを知りたいのでございませう。その言葉の意味が知りたいのでございませぬ。」

アルマスがかう答へると、王は驚いて、

「なんだつて？ それが教へられるものか。そんなことなき者があつたら、わしはすぐ首をはねてしまふんだ。」

かうきくと、アルマスはすつと語を他の面白いことになつて、王をごまかしてしまひました。

童心句

野口雨情選

山梨 芳野 孝

○星とれと僕のそでひく弟かな (賞)  
評、『ちや長い竿を持つといで。』

長崎 濱本 隆

こ猫がかまどの中へねんねしてた

愛知 伊藤きよ詩

門の外誰かなくのが聞えます

福岡 西岡 福忠

赤蜻蛉 妙見山には宿はなし

東京 大島 清正

霜柱 ひのきれそな鶏の足

茨城 内田みわ路

發動船河の霧中を割つて行く

一三八 東京 狩野 忠信

○ぬぎすてた下駄に小猫がねむつてる (賞)

評、誰れかの下駄をかりて行く

山形 林 潮花

雲一つ汽車と一緒には走つてる

福島 小林 枝次

鶏が鳴くから出て見りや寒かった

奉天 山崎泰一郎

車屋のニヤヤもお鼻を垂らしてる

石川 刀福 元成

夕焼がわだちの音に消えてつた

兵庫 前田 修

まん前で雀が考(こんでいた

評、雀(さて、今夜のお宿は。』

東京 板谷 令子

初雪をしずかににふみました。

大阪 林 英夫

春中の子厚い着物で穂のやう

雪を待つ町の子供や十二月

東京 田中 喜一

東京 後藤 賢三

○ほつたがおつこちさうにあそぶ子等

評、夕日も赤々おつこちた。

東京 福島 正夫

夕焼に富士山黒くそびえたり

山形 青木 久彌

夕方の電線うなる吹雪かな

福島 新國 香華

千物の着物がふわりおどつた

岐阜 後藤 英二

どうしても此の問題が出来ません

東京 篠崎 蜜聲

鶏をねばけて猫がながめてる

一三九

東京 紫野 吐詩華

○暮れる町窓そに見てゐるだるまだこ

評、だるま肌『隣村まで見えるよう。』

新潟 田中 準一

おぼる月使ひ隠りの足早し

秋田 梅田 雄太郎

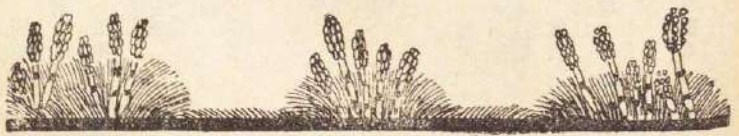
あーれあれとんびが森に沈んでく

青森 原子 清定

はしわたるくるまのおとのさむさかな

東京 小松 一路

寒菊が咲いてゐる炭きつてゐる





童謡

からまるは  
ゆうべ圍爐の  
おぼろ夢

猫はさ  
春の日永を  
とろりとおねんね  
とろりとおねんね

雪小坊主

藤岡 松井 雅夫

野口雨情選

つんだらお猿の  
袈裟おろか  
それとも雀の  
帯おろか

ねずみはさ  
ねずみはさ

ちらちら小坊主  
ほいかむり  
すゝきをくもつて

紡車

東京  
一の瀬ゆきみつ

婆さんからりと  
しづかにまはす  
とろりと散るは  
梨の花

猫はさ  
猫はさ  
それでも知らずに  
日なたでおひるね

裏の雑木林

東京 村木 良三

山家の婆さん  
からりとまはす  
白い小糸の  
紡車  
からりと唄に

朝ひるばんに  
御堂くものす  
コツクリコロリ  
山のお寺にや  
おぼさま二人  
鐘もならさず  
日がくれまする

ねずみはさ  
ねずみはさ  
それでも知らずに  
日なたでおひるね  
日なたでおひるね

裏の雑木林は  
晝でも眞暗だ  
チヌウチヌウ雀も  
すゝきはら

出てこない

裏の雑木林で  
仔猫が死んだ  
ねんねん親猫ないてゐた

朝ひるばんに  
御堂くものす  
コツクリコロリ  
山のお寺にや  
おぼさま二人  
鐘もならさず  
日がくれまする

ほゝ骨  
見えますね

見えますよ  
父さん  
ほんとに年寄ね

裏の雑木林に  
雪のふる晩は  
さら〜雪の音ばかり

年取つた父さん

大分 佐藤 光子



日暮の土橋  
群馬 橋本 暮村  
日暮の土橋  
寒むそな土橋  
枯草カサカサ  
ゆれてゐる  
日暮の土橋  
寒むそな土橋  
わたしが渡つて  
遊んでる

山のお寺

神奈川 新倉しげ子

山のお寺にや  
和尚さま一人  
も一人おぼさま  
ちさくて一人  
二人おぼさま

つ〜父さん  
見てゐると  
ほんとに  
ほんとに  
年寄ね  
父さん

父さん  
白髪も

一本足から傘

岐阜 田中秋夜詩

アッコ土橋の  
柳の下にさ  
から傘おげが  
でるだとな

から傘お化は  
一本足でさ  
舌だいてピョコ〜  
でるだとな

一本足から傘  
高下駄ばきでさ  
雨夜にカラコロ  
でるだとな

雪だるま

新潟 渡邊  
僕が こさへた

直

雪だるま

大人の 背より  
背がたかい

妹が こさへた  
雪だるま

妹の 背より  
背がひくい

二つ 並んで  
仲のいい

僕と 妹の  
雪だるま

天王寺の塔

大阪 藤村つとむ  
天王寺の塔は

高いナ高いナ

一つ目屋根にや  
鳩さんぼつぼ

二つ目屋根にや  
雀がちゆちゆ

三つ目の屋根にや  
秋風ひやり

四つ目の屋根にや  
鳥がかあかあ

五つ目ごろは  
秋空高い

蜥蜴のひなたんぼ

大阪 兼松 竹夫  
蜥蜴石垣

ひなたんぼ

破れたごむまり  
かけひとつ

あしびの花は  
白い花

通る人ない  
ひつそりこ

木つつき

岐阜 後藤 英二  
こつこつ 大工の  
木つつきが  
枯木に 穴を  
あけて居た

晝中 こつこつ

木つつきが  
家を作ると  
穴あけた

爐邊

千葉 半澤 南瓜

桐さくべたよ  
大きな槽さ  
チロリ〜と

火が まはる  
居爐裡真四角  
煤けた自在

外ぢや みぞれが  
さら〜と

鍋の煮豆の  
コゲつく臭ひ

やつと婆やの  
目が醒めた

雪の夜

山形 村山俊太郎

雪の夜ふけに  
なく鳥は

ほう ほう  
きもとり 夜たかどり  
子をとろ 子をとろ

ゆれてくる  
雪夜の提灯  
化け 提灯

泣く子は  
夜たかにくれてやれ  
ほう ほう

夜たかにくれてやれ

紅緒の下駄



お日様朝からニツコニコ  
父さんこのまき  
切りましょか  
ゼツコン〜〜〜コ  
父さんこのまき堅いのね  
ゼツコン〜〜〜コ  
ゼツコン〜〜〜コ

紅緒のお下駄

大阪 井内 昇一

紅緒のお下駄は  
よいお下駄  
早くはきたい  
遊びたい

カタコトお客に参りたい  
紅緒のお下駄は  
うれしいな

きこり

茨城 松本 博  
今日はうれしい日曜日





童謡

野口雨情選

(子供篇)

日やけ雲(賞)

静岡 永森 一彌

ひでりの河原は  
さざれ石  
ほろ／＼鳴きま  
かはら鳩

小鳩の羽まで  
かはさます

ひでりの河原は

日やけ雲

なよ／＼なでしこ

石の上

つぼみも枯れます

ほそりまます

雨々ふらない

日やけ雲

春が来た(賞)

秋田 岩谷 貞三

土手の柳が  
青い芽を吹いて  
ソヨ／＼風に春が来た  
遠いお山の

白い雪

チロ／＼消えて春が来た

隣のおちさん

冬圍ひ ほごし

小唄うたつて春が来た

茶屋のおばさんも

小川に來てる

茶碗コリ／＼春が来た

土手にやポコ／＼

落の臺が出るし

軒にかけろうよ春が来た

びわの花(賞)

大分 矢田 ふみ

山のくろの

一四四

びわの木に

花が咲いてる

白い花

子供がひとり

道をゆき

あとはさみしい

山のくろ

ぶち猫

岐阜 後藤 珠江

(十四才)

斑猫

うまそに

魚食べた

三毛猫

ほしそに

ながめてた

山の上

東京 越村 和賀

(十二才)

霜降る山の  
大木に  
鳥が一羽  
とまつてる  
霜降る寒い  
山の上

日ぐれ

大分 河越ちえ子

(零五)

日が暮れた  
日が暮れた  
あつちの空から  
こつちの空まで  
日が暮れた

山

千葉 坂巻

(六年)

山の中を  
がさ／＼歩いてた  
松葉が  
ちくりと  
ほつべたをさした

日まはり草

千葉 岩井

(六年)

壁にはつてある繪  
日まはり草の繪  
下で子供が  
眠めてる

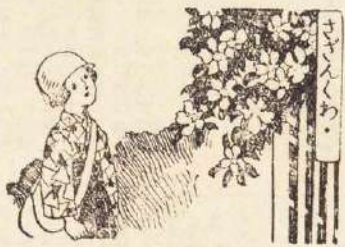
さゞんくわ

埼玉 中島

正三

(十四才)

咲いた咲いたよ  
さゞんくわが



うす桃色に  
さいてるよ

げんかん前で  
さゞんくわが

片ひら落して  
咲いてるよ

風にゆうらり  
さゞんくわが

うす桃色に  
咲いてるよ

冬の朝

山口 松浦 松恵

(高二)

靱の上の白い霜  
石にころんだ痛い足  
しんしんしみる白い霜

一四五

▽百號發行のごあいさつを致します。
▽「金の星」此の號をもつて百號となりま
した。かへり見ると、よくこんな長い間
續いたと思ひます。と同時に約十年間の、
移り變りの有様が、いろ／＼と考へ出され
ます。
▽「金の星」がはじめて創刊號を出したのは
大正八年十月でありました。童話と童謡の
一番盛んな時代でありましたから、ずるぶ
ん盛んな歓迎を受けました。お仲間、お
も、その後と先きに澤山出ました。これも
雑誌「おとぎの世界」「童話」など、おの
れも、これ等の雑誌もとうの昔に無くなつ
てしまひました。
▽今尚残つてゐて、なほ童話と童謡の爲め
に活動してゐる雑誌は、本誌を外にしては
「赤い鳥」と「金の船」があります。いづ
れも昔の面影がなくなつてゐます。
▽最早、童話と童謡の時代は過ぎたのであ
りませうか。
しかし、一時の新興児童藝術としての活
氣ある時代を過ぎてゐます。そのかわり廣
く行きわたつて盛んに讀まれ歌はれてどん
な少年少女にも、喜ばれ樂まれてゐます。

▽童話、童謡の雑誌は、たしかに使命をは
たした事を信じます。「金の星」もまた、そ
の中の一つとして相當の仕事をして来た事
を信じます。
▽野口先生の童話をはじめ、沖野先生の童
話、本居先生の童謡曲、寺内先生の續、そ
の他大家の作を掲げて、皆さんに紹介の役
をつとめたのは「金の星」でありました。
▽その「金の星」が、百號まで盛んに發
行することの出来たのは、先づ第一に愛讀
者の皆様のお禮があつたからで、これを
機會に厚くお禮をのべたいと思ひます。
▽また、この機會に、創刊號以來熱心に本
誌の爲めに努力して下さつた野口雨情先生
及び沖野岩三郎先生には深く感謝の意
をのべます。
▽最後に、童話、童謡の將來の爲に、こゝ
皆さんと共に萬歳を叫びたく思ひます。
萬歳!! 萬歳!! 萬歳!!
童話推薦取消 本誌一月號推薦童話「一
郎さんの知らない話」は、別稿なる事が判
明しましたから、こゝにその推薦を取り消
してゐます。原作者にはさぞ迷惑をお感じにな
つてゐらうと思ひます。編輯者不注意
の段深くお詫申上ります。
尙、原作者より次の一文を寄せられました
から、掲載いたします。

小牧君へ——私は、こんどの君の行爲に
對して、責めも、嘲罵も浴びせたくない。
たゞ私自身が、カビの生えた過去のもの
を明るみに曝らされた恨みと、チクジたる
ものを自ら感ずるのみである。
彼の君の「一郎さんの知らない話」、また
私の作品である「春江さんの知らない話」
は、大正十一年八月に、ゴトモ社發行の「童
話」誌上に發表されたものである。その當時
から思ふと、現在の私は、變化とすくなく
とも、精進はして来たと思つてゐる。そし
て、打明けて云ふなら、彼の作品も嫌やな
ら、船木根郎といふ、それ自身の姓名すら
いまでは地げうちたい心持である時であつ
た。小牧君よ。何んといふ隠れた君は魔法
にかゝられてしまつたのか。
未知の小牧君よ。私自身は、ある友人か
ら、私自身が彼の作品を、小牧昌徳なる氏
名のもとに再發表したかの如く、問はれた
のである。——かうした私は迷惑を初めて
感じた。——それは、彼の「春江さんの
知らない話」は、君自身に對して魅力を持
つてゐたのであらうか?
ともかくも、私にとつて、處女作であつ
た彼の作品は、實に呪はれた作品となつて
しまつた。
(小石川區水道町十五松永方 船木根郎)

童心句掲載外佳作

- 六遠 俊雄(山梨) 茶木 七郎(神奈川)
田中 準一(新潟) 森本 秋男(東京)
入江 一男(東京) 島本 夫二(名古屋)
辻村 利吉(山形) 長谷川孝(茨城)
野澤 秀雄(山梨) 河邊すみ子(東京)
幹 葉津子(神奈川) 戸野 紙吉(東京)
醍醐 正明(東京) 長谷部小八郎(東京)
小野つで子(熊本) 中里 素行(神奈川)
水谷 秀治(茨城) 松本 秀穂(東京)
大内 憲二(福岡) 松本 秀穂(東京)
野口 玉露(神奈川) 中村 正義(大阪)

童話掲載外佳作

- (大人篇)
植田 良實(高知) 東山 辰夫(大阪)
小林 金次郎(福岡) 新井 悦三(群馬)
和田 曉峰(大阪) 鈴木春五郎(千葉)
上杉 スメ(大分) 酒井 嗣司(兵庫)
大島 秀夫(愛知) 萩野 正二(北海道)
古川 幸枝(茨城) 山田 次郎(東京)
小林 直次(愛知) 山本 詩風(徳島)
前田 修兵(兵庫) 若山 泰(都)
岡野しげる(神奈川) 茶木 順造(不明)
佐々木一(東京) 花村すゝむ(岐阜)
小林 好雄(東京) 太田 貞夫(愛知)
川島 隼英(東京) 高岡 千尋(東京)
土屋 静文(愛知) 藤原眞砂雄(神奈川)
井尻 忠雄(和歌山) 吳 きよし(不明)
山田 貞千(千葉) 奥 きたけ(兵庫)
増田 實(茨城) 山田三津夫(不明)
(子供篇)
大川 政雄(千葉) 加藤 白春(高知)
後藤 珠江(東京) 川島喜代子(東京)
佐々木ヨシ(大分) 粕谷 滋(東京)
渡邊 睦郎(栃木) 小田 露生(兵庫)
岩井 悦(千葉) 高岡 千尋(東京)
新貝 治子(大分) 奥村 健一(東京)
石井 正巳(千葉) 新川 香華(福岡)
小澤喜代明(愛知) 早川 吾郎(東京)
丸岡 大二(東京) 小橋 蓮夫(東京)
久保田正文(長野) 山田貞四郎(千葉)
鴻池登美子(兵庫) 井口 兼子(大阪)
近藤恭太郎(秋田) 小町 ゆみ(東京)
中澤 四郎(新潟) 佐藤 政弘(東京)
横井 永吉(京都) 石井 千(熊本)
福宜田慶子(大連) 山口 素行(神奈川)
平野千代松(千葉) 西川 一夫(秋田)
渡邊 湊次(茨城) 山口 貞二(埼玉)
雨宮 恒之(山梨) 篠崎 正吉(東京)
小林金太郎(福岡) 後藤 英三(岐阜)
小林金次郎(福岡) (以本次號)

新誌友名簿

新らしく出た本

○孝子遺囑(上) 藤澤衝彦著
この中に出てくる孝子は全部で三十
五人、みんな親に孝行であつたために
のちにえらい人となつて、世の中の人
のお手本とあがめられました。
朝な夕なに親様おがめ
親にまさりし神はなし
どうか日本の國の少年少女が一人でも
多くこの本を讀んで下さる事を望ま
す。四六倍理輸入販賣本、内容二五〇
頁、挿畫多數入、定價壹圓八十錢、東京
日本橋區通三丁目丸善株式會社發行)
○少年少女科學 兒童讀物學
(松平道夫著)
金蘭社の「少年少女科學大系」は、
内容が面白くて分りやすく、しかも各
頁ごとに寫眞版を入れて、お話と寫眞
と兩方で説明しようといふのですから
實に立派なものです。大きな博物館へ
ゆくりより、どんな面白い學者に教へて
もらふよりも、もつと「タメ」になり
ます。第八篇は「兒童讀物學」として
少年少女が知らねばならぬ、この世
のありとあらゆる讀物に就いて説明した
ものです。四六判二百頁、挿畫多數入、
定價壹圓、東京市外葉橋上駒込二八、
金蘭社發行)



# 金の星社 三月號 出版だより

## 出版部より

○一月は豫定の通り、久米先生の「少年發明家物語」と、三島彌川先生の「南朝皇史、新田義貞」及び立石美和先生の「少年天才物語」の三冊を發行することが出来、いづれも出版界に大評判でした。

○二月は「輸入、アラビヤン・ナイト」といふ大物と、三井信衛先生の「少年大飛行家物語」それから大戸喜一郎先生の「和孝行な少年少女のお話」の三冊を發行いたしました。

○以上の三冊は、前號の豫告にもあります通り、おの／＼立派な本であります。

○三月には、金の星社の一大計畫である「金の星童話文庫」を一度に十冊發行いたす事になつております。この大計畫の陣立では、まだ發表するには早過ぎますから、もう

少し後にお知らせします。これまでにない良い本を、驚く程の安い定価で發行しますから、兒童書の出版界からは非常な驚きをもつて見られる事と思ひます。

○金の星社も、雑誌と本の出版の爲めに長い間努力して参りました。これがからには殊に本の出版には全力を擧げて進む決心ををります。皆さんのお力添へをねがひます。

## 近刊書おしらせ

### 日本歴史實傳物語叢書(9) 〇八幡太郎義家

(三島彌川先生著)

日本の子供で、八幡太郎の名を知らない者はありません。そこで歴史の研究で有名な三島先生が、その八幡太郎の一生を誰にもわかり易く、そして事實をしらべて、面白く讀ませるやうに書いたのが

この本です。八幡太郎義家の先祖からしらべて、その生ひ立ちから父頼義に従つて雪の深い奥州で九年の間安部の責任、宗任を攻めて大した功を現した事、また三年の間、清原の武衡、家衡と戦つて、これを亡した歴史に名高い。『前九年、後三年の役』の事が、くわしく書いてあります。それに頼義が武勇のほか、智略にすぐれた大将であつて、そして優しい歌人であつたこと、そのほかいろ／＼の面白い逸話が載つてゐます。またそのころの戦場の地理までも、今の子供にわかるやうにしらべて書いてあります。さすがに三島先生の苦心の作だけあつて、大人が讀んでも興味のない歴史物語です。それに羽鳥古山畫伯の繪が、昔の繪巻物をしらべて、よくその頃の有様を今見るやうに畫かれてあります。歴史實傳物語の名にそむかない、立派な本であることを、自慢してお知らせが出来ます。(定価一圓送料十錢)

○歴史實傳物語叢書も、これで九冊となりました。次は頼朝の夷傑西郷隆盛の一代記です。

## 讀後感

### ギリシヤ英雄物語

兵庫縣西宮市西濱新築 二三〇三(金の星社友)

朝比奈 豊

近頃、少年少女むきの讀物が續刊されますが、その多くは、外観のみで内容の不足なものばかりです。或は内容の充實さをや、満足するに足るものは今度は體裁がおまつて來てゐます。それに、定価は決して安くはないやうです。この點に於て、私はかねがね、金の星社の世界少年少女名著大系に感嘆して居ましたが、先日、その十八(ギリシヤ英雄物語)を求めまして、その内容外観に周旋の注意を拂はれた、同社の奉仕的の出版に感謝する次第です。

四六判金文字箱入美装は本大系共通の特長ですが、本書の口繪、装丁アンドロメダとベルシウスは全く美しいです。内容も又、キングスリーの名著だけあつて立派なものです。子供は勿論、一般大人も充分に、世界童話の發源地たる

ギリシヤの神話を味はう事が出来ます。それに、どうしてこれ程安値な出版が出来たのでせう。幸に本大系が廣く世に知られて、純な幼い魂の育まれん事を希ふ次第であります。

## 奴隸トム物語

東京 小林 一路

奴隸トムが若主人から銀貨を買つた時の、ニリザが氷塊に乗つて河を渡り、とう／＼親子三人自由の天地カナダへ着いた瞬間の感激等々、奴隸ならではと思はれる事が澤山書いてあります。又この物語は色々なことを私に教へてくれました。奴隸は買へたが心は買へなかつたとか、トムは天國に自由を得たとか。愛に就いては母性愛の絶對的なこと。奴隸も愛する事が出来た。トプシーも愛せらるゝ事によつて善い人になれたとかね。善くなる迄のトプシーの行動はまつたくほほえみずにはゐられませんが、私は世界中で一番悪い人間なんだね」と云つて雷がへりをして笑つたりするんですからね。

『人の一生は公平なり』と私が思つてゐる事をこの物語が裏書してくれました。

## ジャンバルジャン

秋田縣師範學校寄宿舎内

岩谷 貞三

この本を手に入れたのを喜び、早速讀んで見ました。そしてジャンバルジャンは一片のパンを盗んだため牢に入れられたが、やがて彼は立派な眞の人間となつて世の中に活躍し哀れな人を救つた。彼の美しい心が神のやうな心がひどく私に響きましたので、子供好の自分は附近の子供等を集めて、自分ばかりその氣を味つてはいけなしいと思つて、純な彼等の心にこの偉いジャンバルジャンの精神を溶かしてやりました。彼等は興奮して自分も偉い人間にならうと私に誓ひました。

## 青い鳥

東京府下瀬野川字西ヶ原 五三三

竹内虎之助

「青い鳥、青い鳥」

青い鳥は何處に居る  
いばらの奥か 水底か  
山の森か 野の果か——

少年チルチル、妹ミチル(貧乏な樵夫の子)が青い鳥(幸福)を探しに行く物語、すばらしい名著です。

妖婆から貰つた青い帽子のダイヤモンドをまわすと、變つた／＼世の中が、妖婆が、美麗な娘が見えてくる。妖婆は大玉石、柱時計の振子から小さな美少女時「音楽」と共におどり出す。種々の精が飛び出す。

『思ひ出の國』でおぢいさまやおばあさま、なつかしい三人の弟に會ふ。

實に面白いです。『世界少年少女名著大系』の一としての本。大木寺内兩先生ほんとに有難うございます。

## イソップ物語

東京府下大島町二丁目 六〇六番地

猪股 夏雄

彼の歸路ふと書店の前を行きすぎようとすると、チラッと目に入つたものがある。

## 金の星社 出版目録を さしあげます

金の星社には、子供讀む本ならんでも取りそろへてあります。ハガキでお申越し次第、出版目録をお送りいたします。

# 懸賞創作募集

【意注】童童童

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに句なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は学校や学年（または住所と年齢）とおとさないやうにして下さい。  
 用紙は童心句はハガキ、童話や童謡はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は二月廿九日（その以後は次號へ廻る）発表は五月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地の星社。

（一般讀者の創作）

童話……野口雨情先生選  
 話……立石美和先生選  
 句……野口雨情先生選

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘  
 三月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢  
 半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢  
 一年分三冊（送料共）四圓八拾錢  
 但し新年號は特別號で五十錢です。御注文の際は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番

【送金】  
 御注文は必ず前金で御送込み下さい  
 送金は振替が一番便利で御座います  
 切手代用は、送金切手一割増しです  
 第何巻第何號よりと書いてください  
 住所姓名はつきり書いてください

【注意】  
 廣告料は御照會次第お答へ致します  
 昭和三年二月九日印刷納本（毎月一回）  
 昭和三年三月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人 齋藤 保  
 印刷 人 澁谷 房三  
 印刷所 東京市外田端三丁目十五番地  
 東京市外田端三百五十一番地  
 發行所 金の星社  
 振替口座東京五九五六番  
 電話小石川五三三八七番

# 金の星社發行著名目錄

系大傳人偉 編五第	系大傳人偉 編四第	系大傳人偉 編三第	系大傳人偉 編二第	系大傳人偉 編一第
太閤秀吉	リンコルン	ネルソン	ローマシーサー	ジャンヌダルク
三島崙川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を参考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。	久米敏一先生著。最も優れた立派傳として、この『リンコルン』を好むべきである。紙一枚、ペン先一ツ買への欲しいリンコルンが、如何にして大誌頭の地位をかち得たか。本書を讀まぬ者は一生の不幸である。	三井信衛先生著。トラファルガアの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。	露田史光先生著。シーサーは古代の大英雄である。世界歴史を進じてシーサー程の英雄は幾人と數へる程しかない。そのシーサーの變化極りない運命を書いたのが本書である。	大木雄三先生著。有名なオレルブンの少女ジャンヌ、ダルクが奮ひ立つて世國を救ひながら救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたり、涙ながら、悲劇的物語である。
錢十九金 錢六金 送料	錢十九金 錢六金 送料	錢十九金 錢六金 送料	錢十九金 錢六金 送料	錢十九金 錢六金 送料

しなのもるゐてれさ唱愛ごほ集譜曲の社本

# 集 譜 曲 謠 童 星 の 金

錢六金料送・錢拾八金下以輯三・錢拾六金各輯二輯一

第十三輯	しやんこくお馬	藤井清水作曲 野口雨情作譜	（目曲）	しやんこくお馬、おめ、とおて、お留守、子供は風の子、因幡の白兎、秋の夜
第十二輯	俵はごろく	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	俵はごろく、歌の中、雲の巻、狐の提灯、つまらない、小石
第十一輯	夢のお國	藤井清水作曲 野口雨情作譜	（目曲）	夢のお國、兎が来い、赤い楢んぼ、踏さんお手まり、櫻の歌、砂の敷
第十輯	名所めぐり	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	長柄の橋、柱くすり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳餅、石山寺の秋の月
第九輯	あの町この町	中山晋平作曲 野口雨情作譜	（目曲）	あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、證誠寺の狸囃
第八輯	べんべん鳥	小松耕輔作曲 連崎龍作譜	（目曲）	べんべん鳥、焚のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蜻蛉、さみだれ
第七輯	お人形さんの夢	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱
第六輯	子守唄	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、葱坊主、藪の下道
第五輯	夢ごり	小松耕輔作曲 野口雨情作譜	（目曲）	夢ごり、おしやれ橋、つげ子、十と七つ、雲雀の水波、雀の機織
第四輯	赤い靴	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、雄捨山、朝鮮船、風、眠り籠の子
第三輯	青い空	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	青い空、燕、雨夜の傘、でんぐり、雀の酒盛り、呼子島
第二輯	一つお星さん	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	一つお星さん、七つの子、鵲と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬
第一輯	人買船	本居長世作曲 野口雨情作譜	（目曲）	人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん

# 録 目 著 名 行 發 社 星 の 金

系大傳人偉 編十第	系大傳人偉 編九第	系大傳人偉 編八第	系大傳人偉 編七第	系大傳人偉 編六第
<b>コロムブス</b>	<b>英雄。ピーター大帝</b>	<b>大楠公</b>	<b>ワシントン</b>	<b>ナイチンゲール</b>
三井信衛先生著。廣い大西洋に小さな船を浮べて、遂にアメリカ大陸を發見したコロムブスの勇壯な物語です。四面海にかこまれた日本國の少年少女に、是非讀んでいただきたいと思ひます。	大月喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシアを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妾までも殺さなければならなくなつた變化極りないピーター大帝の物語です。	三井信衛先生著。補正成の傳記を下しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感じるでせう。面白くてそして本當の正成のお話が解る本です。	三井信衛先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。	入交理一郎先生著。女神様のやうに氣高き心を持つたナイチンゲール嬢の一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になれます。少年少女の爲に書かれたはじめての本です。
錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送



坊ちゃんや嬢ちゃんのお歯には、  
やはらかいお歯には、  
ライオンはみがきが  
一番よろしう御座います。

# ライオン歯磨

煉製チューブ入

「金の星」第十卷第三號  
（定価全四十錢 送料一錢五厘）